
雨、何時まで降り続く

薄明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨、何時まで降り続く

【Nコード】

N8262R

【作者名】

薄明

【あらすじ】

ドイツ以外に雨と名の付くISはもう1機存在していた!?

そんなISを使える雨のように明るくない心情を持つ少年。

彼の心は何時、晴れるのか。何時、真実を知れるのか。

何時、曇りの無い快晴へとなるのか?

『雨』の名が付くISを操る明るくない心情の主人公が送る、アナザー・ストーリー！

PV330000、ユニーク330000突破!

Story 000

「ふう……」

ため息が思わず出る。意識がぼんやりしていて、よく分かったなと痛感する。

そして……

徐々に意識が覚醒してくる頃

ここはどこだ？そんな疑問を僕は抱いた

「それなら答えてやるう。ここは輪廻転生の場じゃ。」
なっ！！つまり僕は……

「そうじゃ。死んだってことじゃ。わしの知り合いのせいだな。」
どんな、原因で？

「爆弾じゃ。実験してみたい、とな。だが奇遇にも他の人達は助かった。」

お前だけが、亡死んだくなった」

何で、何で俺だけなんだ？

「偶然にも爆弾の近くにいたからのう。だから、謝礼として、知り合いから死お前んだ奴の転生を

頼まれた。」

じゃあ、生き返れる！！

「場所の希望はあるか？」

もて「だめじゃ」……え？「それ以外でじゃ。」

元の場所がだめなら……ISの世界へ！！

「いいじゃろう。設定は生前お前が考えていたものにしてやる。お前の幸運を祈る……」

そして、僕はまばゆい光に包まれた。

その時、僕に負ネガティブシンキングの思考が加わったことは、
誰も知ることは無い。

Story 000 (後書き)

初めまして。東北・関東大震災でなくなられた方、ご冥福を祈ります。

特に書くこともないですが、ご意見・ご感想をお待ちしております。

Settings 01 設定 (随時更新) (前書き)

オリ主紹介の会。

Settings 01 設定 〈随時更新〉

僕は長峰零斗^{ながみねれいと}だ。輪廻転生者。元の名前は忘却のかなたへ。そして、2人目のIS操縦者だ。小学校で登校拒否となった経緯があるが、IS操縦が出来てしまったため、身を隠さなければならぬといけなかったからだ。だが、学力は問題ない。東京大学の全科目、全過程が頭に入っているからだ。

僕は転生前、六年掛けて全科目を習ったからだ。おまけに首席卒業。そして、転生し今に至る。

長峰零斗

9月21日生まれ

国籍 日本

容姿

テニスの 様の不二周助に非常に似ているらしい。

髪の色…黒

瞳の色…虹彩異色症^{オッドアイ}であり右目が黒、左目が紺

性格

人にはほぼ敬語で話す。(一部は敬語ではない。)怒ると(熱中すると)

眼鏡を掛けて相手が負けを認めるまで論理で完膚無きまでに叩き潰す。

人をよく茶化し、人の弱みをかなり握っている。

朴念仁等ではなく、お人好しの八方美人。自由国籍権はあえて持たない。

知力・体力

知力：天才。丸暗記、応用が得意。

東京大学の全科目、全知識を覚えている。

体力：程々に。どこかの武術「冥月流」を習得している。
アーチェリー大会（全国）優勝経験あり。
剣道では大会には参加はしないが突きが非常に得意。

IS「五月雨」さみだれについて

第二形態・五月雨とも。

機体色は変わっていないが、所々に銀の細いラインが入った。

能力

特殊機構「High Speed System」搭載。通称「
村雨」むらい。

村雨使用時は最高7200km/s、起動加速力7200km/h/sが出せるが

航続距離が2kmと指定される。いったん止まれば、リセットされるが。

通常時は航続距離は50km程度。「村雨」を使用するともう一回「村雨」を

使うのに2分間チャージが必要。瞬間移動に見える…らしい。
特殊機構「冷酷」ルースレスこちらは変形機構で、変形したのは。

武装も武装なので、一応^{ある意味}、即時対応万能機だ。

武装

太刀「時雨」しぐれ

細身の太刀で軽量。近距離用で、左手で扱う。

弓「霧雨」きりさめ

25本/sが可能だが、低威力。中距離用。

アサルトライフル

「地雨」
じあめ

軽量化されたアサルトライフル。中距離用。

リニアガン

「長雨」
ながあめ

軽量で、リニアモーターの応用。中々超遠距離用。
エネルギーの消耗が激しく、発射回数は5回が限界。

空対空ミサイル

「秋雨」
あきあめ

普通の重量。ARHにより追尾可能。
アクティブレーダーホーミング

レーダーに入る範囲ならどこでも狙える。逆に、レーダーに入らないと狙えない。

プラズマ砲

「雷雨」
らいう

武装で最も重量があるが一番ダメージが望める。

しかし、零距离以外ではプラズマが発散するため、零距离での

攻撃手段。

バッテリーシステム
充電池仕様で稼動し、発射可能回数は10。

追加武装

パッケージ
一式装備「降り続く雨」
コンスタント・レイン

グレネードランチャー

「俄雨」
にわかあめ

軽量で、様々な弾が発射可能。

通常用として、対IS榴弾、散弾、フレシエット弾、焼夷弾。

妨害用として、チャフ、フレア、発煙弾、閃光弾。

特殊刀剣

「夕立」
ゆうだち

「時雨」の右手仕様。バージョンしかし、チェーンソーに変形する。

マシンガン

「梅雨」
ばいう

軽量のマシンガン。

ショットガン

「大雨」
おおあめ

軽量のショットガン。

弾薬は、威力：大・散弾量：少、威力：中・散弾量：程々、威力：小・散弾量：多、の3つがある。

ワンオフ・アビリティ

単一仕様能力

「星火燎原」
せいかりようげん
ルースレス

「冷酷」使用時にのみ使用可能。

武装に「雷雨」で充填したエネルギーを流す。

遠距離武装の場合、数千発から数万発の矢・銃弾を放つ。

近距離武装の場合、武装の温度を溶けない限界まで急上昇させ、電気を纏う。

「雷雨」の場合、使用不可。

待機状態

CA IOのGW - 3000BD - 1AJF。

Story 001 (前書き)

若干の改変はお許しください。では、やっと本話です。どうぞ……！
—夏視点ではなくオリ主視点です。(これまでも、これからも)

Story 001

「皆さん入学おめでとうございます。私はこのクラスの副担任の山^や田^{また}真^ま耶^やです」

黒板の前でにっこりと微笑む副担任の山田真耶先生。回文だ。親もすごい名前をつけたものだ。身長は小さいが、ロリではない。こういう人がタイプの人っているんだろうな。

印象は、子供^{身長が低い}+大人^{巨乳}。といったところだろうか。初見のまんまだが。僕？断じて僕は好みのタイプではない。というか、僕は年上思考はない。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「……………」

山田先生の短い自己紹介？に帰って来たのは静寂だ。教室の中は緊張感に包まれていて誰もが無反応だ。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

目が潤んでいる。ちょっとうるたえる山田^あ先生^のがかわいそうと思うがこれは経験がものを言っだろう。

ここはIS学園。原作に沿うようにしか僕は動かなかったから一夏はこの学園に入学することになった。そして転生者^{生まれ変わり}の僕も。

藍越学園受験会場に向かったはずがなぜかISが置いてあり、なぜか俺に反応した。と一夏は言っていたらしい
と千冬さん談。

何故一文字間違える？まあおいといて。
ISが起動できる理由はまあ姉が仕組んだものだろう。僕の場合も。

まあこれ一夏はIS学園に入学する。（お偉いさんの理由によつて）

僕は起動した時点で決まっていたんだけど。

そうして今日はIS学園の入学式。別名、登校初日。右を向いても左を向いても、前を向いても後ろを向いても

存在が確認できる男の生徒は僕、そして一夏だ。そして一夏は僕に気づいていない。びっくりするよね。きっと。

一夏は僕の幼馴染、親友だ。小5のときに僕がISを起動してはい、サヨナラになったけど。

思ったことつて結構ある。

周囲に女しかいないって環境は小5のとき教えられ覚悟をしていたが予想以上にキツイ。

しかもここは女尊男卑の世界。転生生まれ変わっしてよかったのだろうか？

「次は織斑一夏君！」

どうやら自己紹介は一夏、君の番だ。楽しみに聞いてやろう。

は、はいっ!？」

呼ばれてたのに気づかないっていうのも…まあ一夏らしいっちゃそうだけど。焦ってるし。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしく願います」

そしてために溜め込んだあの言葉終わりの言葉を口にした。ってやっぱり予想ど
うり。

「い、以上です」

予想していたけれども、それはないよ…一夏。女子のずっとける
音が聞こえた気がするけれども…
と僕はあきれている。

その後、僕は笑いをこらえることとなるが、それはまた次のお話。

後書き風を書くが、まあ零斗僕の一番の得意分野十八番は他人一夏のフラグ成立

の誘導だ。

Story 001 (後書き)

まあ初日ってきつと長くなるわあってのはまた別の話。

ではなく、初日が5話ぐらい？かな？といいつつプロットを作成しない僕なのであった…

そしてこの話のタイトルは一夏に向けてな気がするけど…

そして最後に。

ご意見・ご感想お待ちしております！！

Story 002

「えっ、あれ！？ ダメでした!？」

きつと天罰が下るよ、うん。

その確信は…

千冬さんのご登場だ。

そして、織斑コケさせた奴一夏に天罰、いや出席簿がうなる。
ん？ちよつとまで、出席簿つて打楽器だっけ？

「げっ！ 千冬姉え……あぐっ!？」

出席簿がもう一度、いや今度は出席簿の悲鳴が聞こえた。間違いな
く。

「織斑先生だ。このバカ者め」

この人を見ると威圧感が。いえ、なんでもないです、織斑先生。
読心術教えたのが悪かったか。

織斑 千冬。

一夏の実姉で、職業不詳（一夏が小4の頃に目く言わせると）。月に数
回、仕事の休みに家に帰るぐらい。

元IS操縦者パイロットであること以外、一夏は姉の事を知らなかった。まあ、

僕は知っていた。例の事件も。^{白騎士}

例の事件は、割愛させてもらうが、嫌な予感が、一夏を襲ったと僕は直感した。

「お、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

千冬さんは僕達生徒の方を向きながら胸に手を当てて発言する。

僕は啞然と見ている。威圧k(ry

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15才を16才までに鍛え抜く事だ。逆らってもいいが、私の言う事は聞け。いいな」

相変わらずつていえばまさにその通りだ。歓声がすごい。しかもそのカリスマ性が…

やっぱり。そして、耳を若干塞ぐ事にした。そしてその1/75秒後^{刹那}

人気は相変わらずだ。だが奴はブラk(ry

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

そして、2回目の歓声

…明らかにDMがいるよね。と直感

「……で、お前は挨拶のひとつ、碌に出来んのか？」
まあ僕からするとその通りです。

「いや、千冬姉……それはへブツ!？」
千冬さんの手が一夏の頭をつかみ、机に。内容はご想像にお任せします。

「織斑先生だ。いい加減、同じ事を言わせるな」
「ず、ずいません……おりむらせんせい……」
そんなやり取りに僕は

”苦笑い”をしてしまった!!
どうしよう、すごく睨んでる。仕方ない

「なんだ長峰。お前もやられたいか？」
読心術使えるんだから、読み取ってね。

”このブラコンが”
うん、チョークが飛んできた。恐ろしい。
避けたら壁にめり込んでるし…

多分一夏は

チヨークが壁に直撃チヨーク撃とでも考えてるだろ。

一夏はどうなってるって？ご想z（ry

そんな姉弟（+僕）のやりとりを余所に、クラスメート達がヒソヒソと話し始めた。

「ねえ、織斑君ってあの千冬様の弟なの…?」

「じゃあ長峰君は千冬様とどついう関係なの…?」

「それじゃあ男でISを使えるっていうのも…それが関係してるのかしら？でも、長峰君は違うし…」

「
静かにつ…!」

ざわめきが大きくなるところで、千冬さんが一喝する。

しん、と静まった教室。千冬は教壇に上がってそれを見回した。

「諸君には半年でISに関する基礎知識を覚えてもらう。その後、実習だが…基礎動作は半月で体に染み込ませろ、良いな。良いならば返事をしろ。良くなくても返事をしろ…!」

千冬の凛々しい、というよりは雄々しい姿に、クラス中から「はいっ…!」という、威勢のいい一斉に強い返事が返される。

「…」

一夏は啞然としていた。

「ふう〜」
僕は疲れていた。

シートホームルーム
SHR何とか終了。

しかし自己紹介してないよね、うん。

あらっ…

非常に面倒な事に

教室の
とある入り口 を注視してみる。

他のクラスの女子が、ね。
男子ってそんな興味引く？

「あの…ちよつとどいてくれないかな？」

その声に、廊下にいた女子達の視線が一気に向けられた。一夏と僕

に。

お目当てはどつ見ても男子^{僕達}。オあ、どつする、僕。

興味って怖い。

そして

その後

一夏は犠牲になったのだ。

Story 002 (後書き)

後参話位？な初日。

同室とか、そんな話は別の話である。

昔話から続いているね。

話数がかさばるのはまた別の話である。

ご意見・ご感想をお待ちしております

Story 003

「少し良いか？」

とどこかから懐かしい声が。

篠ノ之箒、僕と一夏の幼馴染。昔はツンデレだった。今？そんなもの聞かれても困る。

小学四年のころまで一緒だったなあ。

「えっ……？」

あゝあ、せっかくの好意を無駄にして。

だからフラグ建築士になっちゃうんだよ、一夏。といいつつ、五割がた僕の誘導で成り立っていたが。

僕は先生にも計算^{最悪}尽くめの奴^{悪魔}って言われたことがあったなあ…

「零斗^{ひん}も良いか？」

「悪い」

もちろん断るが、箒へのちょっかいは忘れずに行つ。

「僕は読書をしているから、一夏と“二人つきり”で話して来い、箒。」

そして目線で

…頑張ってね、箒

おお、顔赤くしてる。まあ、頑張って来い。

…そして

機嫌が悪そうな筈。一夏、お前何をした。

「いちかはぼんやりしている」

そんなステータスの一夏君。そして…

パンツ！とものすごい効果音。千冬さ…もとい織斑先生から放たれる兵器出席簿の悲鳴が聞こえる。

「とつとと席に着け、織斑」

今度は笑いをこらえた。うん、偉いよ、僕。

「
であるからして、ISの基本的な運用は国家の認証が必要であり、枠内を遺脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ
」

現在2時限目。教卓で先生副担任が丁寧に教科書の文章を読む。初歩の初歩。だが、災難はまだまだ続く。

……一夏…君は、理解しているのか？

そして、筈に助けてもらおうとしている一夏。筈は熱心だ。気がつく気配がないな。うん。

「織斑くん、何かわからないところはありますか？」
「えっと……」

山田先生
副担任にいきなりそんなことを言われて、焦る一夏。
よし、いいぞ、もっとやれ。

「質問やわからないところがあったら聞いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

……山田先生って見かけによらず、頼りになるのか？ まあ見た目で判断をしてはいけないけれど……

「……先生」

「はい！」

「ほとんど全部わかりません……」

それは大変だよ、一夏。君の行く先が心配だ。

「え……ぜ、全部、ですか……？」

一夏、困らせちゃだめだよ……さっきの出席簿シート絶対くると思う。

「山田先生、めげちゃだめです。」

さらに焦る先生。やべ、俺も殴られるフラグが……

「え、えっと……織斑くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

困り顔な表情のまま山田先生はみんなに拳手を促す。

そりゃあ誰もがわかってるよね。
一夏、僕は君が馬鹿だと再認識した。

そして、追い討ちでここで千冬姉さんが呆れ顔で聞いてくる。

「…織斑、入学前に渡した参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

「パァン！」

「おお〜予想通り。」

「必読と書いてあったらろつが馬鹿」

「パシッ！」

「駄目ですよ。やるなら予測できる場所以外で。まあ、そこでも止めますが？」

「…チッ」

皆さん唾然とした様子で俺を見ている。

「織斑、あとで再発行してやるから1週間以内に覚える。いいな？」

「い、いや、1週間であの分厚さはちよつと……」

「やれと言っている」

「…はい。やります」

ギロリ、という擬音がお似合いだ。一夏、あきらめる。

「ISはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遙かに凌ぐ。そういつた『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故アクシデントが起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解ができなくても覚える。そして守れ。規則とはそういうものだ」

正論を述べる千冬さん。

「貴様、『自分は望んでここにいるわけではない』と思っているな？」

流石。前の話で話したことは撤回。読心術教えといてよかった。

「望む望まざるにかかわらず、人は集団の中で生きなくてはならない。それすら放棄するなら、まず人であることを辞めることだな」

容赦無しだ、でも僕にとっては追撃の余地がある。そして僕からの追撃開始

「それに加えて、IS学園は高等学校です。女子高に紛れ込んだ様な状況とはいえ、所詮は高校です。卒業しないと就職できないと思えますが？」

「長峰の言うとおりだ、織斑。所詮高校。そのことは忘れるな。」

一夏、渋谷了解。

そして、一時限目が終わった。

Story 003 (後書き)

主人公初台詞おめでとう

まあ、書くタイミングが無かったただけですが。

お気に入り登録をしていただけた4人の皆様、ありがとうございます。

ご意見・ご感想お待ちしております。

Story 004

―――1時限目、終了

「久し振り、一夏。」
声を掛けたら…

「ちよつとよろしくて？」
いきなり声を掛けられた。しかも、僕？

その声の主は―――イギリス代表候補生か。
「初めまして、ミス・オルコット…であっていますか？」

「ええ、そうですね、イギリスの代表候補生にして、入試首席のセシリア・オルコットですわ」

正確には、僕が一番なのだが情報操作で10番扱いとなっている。

「その代表候補生が、僕と一夏の何の用事で？」

「ちよつとまった。零斗、代表候補生って、何？」

女子、かなり転倒。

はあ〜これだから織斑一夏コケさせる奴は困る。

「10秒以内で説明すると、エリートってこと。」

「信じられませんわ!! 日本の男性というのは、こんなにも知識に乏しいものなのかしら!?!」

「僕もジャパニーズですが?」

「…バカにしていますわね?」

「いや、正直に言っただけです。」

「貴方はともかく…何も知らないでよく、この学園に入れましたわね?」

男で唯一、ISを操縦できると聞いていましたけど…期待外れですわ」

貴方…僕 期待外れ…一夏だろう と脳内補完。

「なんですの、その態度。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、

それ相応の態度というものがあるのではないかしら?」

こういうタイプの輩…非常に厄介だ。

一夏に任せるか…いや、それは駄目だ。火に油を注ぐことになって

しまつ。

どうしようもないので、リスタート 応対再開。

「なんで反応しないのかしら!？」

どっちみち待っているのは厄介事ですか…

「用が無かったら離れていただけます？ミス・オルコット。読書がしたいのですが」

そう、読書。ミステリーの種明かしの肝心な部分なので、邪魔をしないで欲しい。

「むむう！わたくしを馬鹿にしていますわね！

でもまあ、わたくしは優しいので”今”は許して差し上げますわ！」

32

「何せ私は入試で唯一、教官を倒した…エリート中のエリートなのですから！」

「ふう…カワイソウです。僕は30秒で完膚無きまでに叩き潰しましたか？」

「俺も倒したぞ」

「はい？」

その瞬間、セシリアは…

シヨックだっただろう。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?!」

「説明しましょう。僕は前述の通り。」

「一夏君は…興奮した先生を避けたら先生が壁に追突し勝っただけです。」

「わ、私だけだと聞いていましたが……?」

「パニック状態だ。」

「フフ…カワイソウに…その勝ったのは私だけって

言うのは女子に限った話、と考えるのが妥当ですよ。ミス・オルコット」

「貴方たちが?あなたも教官を倒したって言うの!?!」

「おゝお怒りのようで。まあ追い討ちをかけて…っ」と

「ええ、僕は余裕で。」

言い終わった直後、2時限目、開始となる。

「この続きは、また改めてしますわ!?!」

「何なんだアレ?」と一夏。

「さあ」と返し、僕も席に着く。

言い争いか…

何で、こんなめんどくさいのが絡んでくるんだ?

「さて、授業を始める前にクラス代表を決めておく。クラス代表、か。響きはいいが面倒なだけだ。」

「自薦他薦は問わない。誰かいないか？」

「はい」

一人の生徒が手を上げた。立候補かと思われたがそうではなかった。

「織斑君を推薦します！」

「なにっ…」

やっぱり。いや待てよ、一夏がって事は…

「私は長峰君を推薦します。」

「やっぱり…」

予想できた展開。まあ他薦の場合拒否権は無い、って言う結末オチだらうからな。

「他には居ないか？ いないなら、二人で決定戦だぞ？」

次々に上がる、一夏と僕を推薦する声。僕らは客寄せなのかよ…

「納得できませんわっ！！」

発言したのはセシリア・オルコットだ。

助かった…かな？

客寄せの男子に代表をやられるのは…心外だ！！と言わんばかりにもう一声。

「そんな選出は認められませんっ！」

「男がクラス代表だなんて、いい恥晒しですわ！！ このセシリア・

オルコットに、
そんな屈辱を一年間も味わえとおっしゃるのですか!？」

いやあ、プライドが高いっていいね
このまま行けば… 駄目だ、一夏のフラグが成立しないな。
そして、再認識事項が一つ。それは…

うん。暴走って怖い。

「大体、文化としても後進的なこんな国で
暮らさなくてはいけない事自体、耐え難い屈辱だというのに…!!」

その瞬間、僕は眼鏡を掛け言葉を放っていた。

「…イギリスだって、国の自慢になりそうなものは少ないと思いま
すが？」

ミス・オルコット。

それに…世界一美味しくない料理で何年覇者なんでしょうね?」と
笑いながら。

僕が眼鏡を掛けるって事は、怒った時と本気になった時。と幼馴染
は知っているはず。

実際、二人ともびっくりしている。

「美味しい料理はたくさんありますわっ!! 貴方、私の祖国を侮辱
しますの!？」

「その侮辱を先にやったのは貴方です。さらに、僕は小さいころからDSなんでね。」
と今度は俗に言う不敵な笑みで返す。

-. -. -. 火に油を注ぎ、苦しめるのが僕の趣味だ。

目論見通り、彼女は言い出した。

「決闘ですわ!!!」

「良いでしょう。可哀想なんで一夏君をどちらか勝ち抜いたほうと戦わせるようにしていただけます？織斑先生。」

「あ、ああ」

「私が勝つたらあなたを小間使い…いえ、奴隷にして差し上げますわ!!!」

「好きになさってください。で、差はどのくらいつけて差し上げますしょうか？」

「あら…早速、お願いかしら？」

それをハンデの申し入れと思ったのか、セシリアがフフンと鼻を鳴らした。

「僕がどの程度、ハンデをつければ良いかって話です。そうですね、貴方がボロ負けと認識するのまでが楽しいのですが、専用機もメンテナンス中。

そうですね。こちらは攻撃を一切行いません。」

「は…?」

静寂がクラスを横切る。そして…

そして、クラス中が爆笑した。だが、それで良い。

「ちょっと長峰君、それ本気?」

「男が女より強いなんて…: ISが出来る前の話だよ?」

「もしも男と女が戦争したら、三日持たないって言われてるのに」
ふう。これだから無知な奴は困る。

「ふう。所詮IS適合率が高いアホと馬鹿の集まりでしたか。」

次にクラスからの大ブーイング。

「説明してあげましょう。分からなくてもいいです。分かる人要領が良い人のために話すのですから。」

戦闘に関しては女対男はIS対全武力でしょう。だから確実に男の負けでしょう。

ですが、「ISを使う」男は負けると決まっていますか?

僕の話したいことはこれですべてです。」

「あっ……!!」

その言葉の意味に、目を見開いた。ほぼ全員。幼馴染は信頼して
てくれたようだ。

千冬さんの目が光ったが、おそらく

流石だな、零斗 と言ったところだろう。

「それにこれは、ISを使える男とセシリア・オルコットの勝負だ。
ここはIS学園。」

戦争などを引っ張り出しても空しくなるだけです。」

「貴方に関しては相当の知識がありますわね。」

僕は眼鏡をはずしながら、こう言った。

「それはどうも。伊達に、日本の東京大学の全科目、全過程を記憶
しているわけじゃないのね。」

黄色い声援だ。クソッ、言うべきじゃなかったな。これはミステイ
クダ。

「ですが、『僕も専用機持ちだ。ハンデは前述の通りです。』!!」

………そこまで と声が響き渡る。

千冬さん、流石。

「それでは、勝負は次の月曜、第三アリーナで行う。長峰とオルコット、そして織斑はそれぞれ、準備をしておけ」

「分かりました」

「承知しましたわ」

「はあ、俺も?????」

織斑先生の出席簿（チョッパ）が落ちたのは言うまでも無い。

おまけに休憩時間はさっきのことで読書が出来なかった。

そして、昼

篤は一夏のせいで怒ってしまった。

まあ、僕は、

「一夏は唐変木で朴念仁だからしょうがないよ」と篤に発言。

篤は顔を赤くしている。恥ずかしさがこみ上げたのだろう。

.....まあ頑張っ
てね、篤

うん。前言った気がする。

Story 004 (後書き)

零斗君のSの部分が見え始めました…

暴走しないように注意を…

ご意見・ご感想お待ちしております！

Story 005

放課後

部屋割りにについての説明…

僕は驚いた…というかまあ普通はそうだ。

一夏、君と同室なんて。

そして食事では質問の嵐。まあ早く食事を終わらせて今部屋の前だ。

まあ千冬さんいわく、『一夏にはまだ鍵を渡していない』
だそうだ。という事で、

……窓際は頂いた。

そして、一夏が来る前にと

電話のコールが5回続いた後

「あ、もしもし?」

「お、これは。東さんいとしのねーくんではないか?」
そう、電話の相手、それは篠ノ之東であった。

おっと、盗聴対策としてこれオンにしとかなきゃ。

と言っわけで、極秘である。

内容的には、

僕のISはどんな状況?

一夏のISはどつ?

第四世代、三機目は?

で終わりである。

「ふう〜」

「おじゃまします」

それに反応する俺

「どうぞ、一夏。だが窓際は頂いた。」

「久し振りだな」

「ああ」

そして切り出す僕

「お前は小5から今まで何してた？」

一夏が説明。割愛させてもらう。

「で、そういうお前は？」

今度は僕が説明…しなかった。

「悪い、極秘なんだ」

「一夏」

「なんだ？」

「すまないな…」

「いや、いいって。」

「じゃあ、一夏、僕はもうシャワー浴びたから先に寝させてもらうよ。」

「ああ」

そして、僕は夢を見た。

Story 005 (後書き)

気休めな話です。

今日は、これで最後だと思います。

ではこれで

ご意「僕は皆様方からの貴重な

ご意見や感想などをお待ちしております。」！？

Extra 001 (前書き)

夢ですね、はい

夢才子は確定いたしました

あの日。

僕はISを起動させた日。

僕は、世界で始めてISを起動させた男として大々的に報道され、
モルモット
実験動物としての人生が待っていた…

ということは無かった。報道もされなかった。が、気付かれている可能性もあるので、

登校拒否扱いを受けることとなった。鈴は心配もしてくれた。

そして、日本政府の処置で、ロシアへと旅立った。

表向きは、軍隊の練習への参加。

正しくは、要人保護。要人保護プログラムを使うと、逆に怪しまれる、だそうだ。

ロシアで、青い髪更識さんの人とも出会った。ってというか、同室にされた。

って言うか、原作ではなかったよね、うん。

そして、何故か、懐いてしまった。

そこで、僕は、ふと思った……

僕は、ロシアへ、何をするために来たんだ？

そう、何も、することは無い。あるとしても、軍隊の練習への参加。それ以外は、ロシアでの生活を、少しでも楽しくしようじゃないか。

そう思った僕が、浅はかだったのかもしれない。

気付かれていない、筈だった。

だが、誰も、時を止められないように、気付かれるのは、必然だったのかもしれない。

誰かに気付かれ、気付けばモンドグロツソに出場していた。
そして独特な戦い方から「ア・ドロップ・オブ・レイン一滴の雨」と呼ばれていた。

しかし、世の中、非情である。
強いて言えば、平等なんて無い様に。

一夏誘拐事件。千冬さんも僕も大会を投げ出した。
そこで、協力してきたのがドイツである。

この人、もとい国は、グルだったんじゃないのか？と思いつながら、助けるためにはしょうがない。

で、一夏を発見、無事に保護できたが、再び言うが、世の中、非情である。強いて言えば、平等なんて無い様に。

千冬さんはドイツ軍の教官になった。誘拐事件の見返りに。そして僕は、今までどおりロシアで動いていた。軍隊での練習のみ、といっても気付かれてしまったので逆に気が軽い。

そして、時は過ぎ

入学1週間前。ロシアからの帰国。

さらに時は過ぎ

今に至る。

今更識さんはどうしているんだろうか？
そんな疑問が、僕の頭を掠める。

そして
.

「夢が替わった。悪夢だ。」

- - - -
嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ

そう思って、僕は跳ね起きた。

時計は3時を指し示していた。

額と背中には大量の汗。

眠れそうにも無いから、制服の魔改造を始める長峰例とであった。

Extra 001 (後書き)

そんな過去があったのか…と自分で書いといて思いました。

気にしないでください。

後このお話、1回消滅したので、大分変わっています。

ご意見・ご感想お待ちしております！

「おはよう、零斗」

「おはよう、一夏。」

「って言うか、お前、ものすごく起きるのが早いんだな。」

「ああ」

いつも4時半には起きる。が、今日は例外だ。

「何やってるんだ？」

「秘密」

といつつ制服の魔改造だ。学園に許可取ればいいらしいし。変更点は上着を理科の先生の様にしたってところだ。

後、某「お前に明日は来ない」とか言ってたドラマの主役がはめていた手袋も装備。

え？何故持つてるのかって？親父のコネだ。

「メシ食いに行こうぜ。」

「僕はもう食べた。だから、食べてこい。」

「ああ、分かった、先に行ってる。」

「ちよっと待て、僕は食べたよ。それに、君は1日4食も食べさせる奴だったのか？」

「うう」

「冗談だ。早く食べてこい。」

「はい」

「返事のはすな」と追い討ちをかける。

「はい」

朝から漫才って言うのも、疲れるなあ。

魔改造が終わったため、なんとなく食堂経由で教室へ

「…十周させるぞ！」

朝から凄いなあ。

「お早う御座います。織斑先生。」

「そういうお前は食事を摂ったのか？」

「ええ」

と言って森永 菓のアレの空き容器を取り出した。

「ほう。ウイーイ リーか」

「じゃあ、そろそろ時間なんで、お先に失礼します。」

「ちょっと待った。どうして制服が昨日と違うんだ？」

と一夏。

「許可は取ったよな…長峰。」

「ええ、勿論です先生。」

ではこれで失礼します。皆さん、遅れないように注意してください。

」

……そして1時限目

筭は機嫌が悪い。

一夏がなんかしたんだろう。うん。

チヨークが飛んできた、うん。

授業を聞いていないから。尤も、覚えているので意味無いが。

パシィッ！うん、今回は予測できたから簡単だ。

そして目線を千冬さんと合わせる。

読心術で読んだ筈だ、多分。

パンー！！

今度はチヨークの碎ける音。

一夏はまたチヨークの犠牲になったのだ。

なんでって、僕が千冬さんにむけて心の中で

”一夏も授業聞いてなさそう”と思ったからである。

……お前、このままじゃ勝てないぞ

だからこそ、情報収集は僕がやってやる。

そう思いながら、1時限目は終わった。

Story 006 (後書き)

一回死亡した第六話。

久しぶりの番外編じゃない話です。

おそらく4月5日まではこのペースです

ご意見、ご感想お待ちしております。

Story 007

「とうわけで…」

まだ眠い。が、悟らせはしない。

「…脳内神経伝達物質エンドルフィンなどがあげられ…」

…その後、普通の男子にとっては、恥ずかしい話があったが、それはまた別のはなs(ry

キーンコーンカーンコーン

ん？最初のキーンの「ん」が違った気がする…

「あつ。えっと、次の時間では空中におけるIS基本制動をやりますからね」

ふう

…嫌な予感のみは確実に的中するものだ。

キヤアアアアア「うるさい、黙れ。」

二度目。と同時に千冬さんの怒りの声。

そして、一夏へと声は向かう。

「ところで織斑、お前のISだが準備まで時間がかかる」

「へ？」

「予備機が無い。だから、少し待て。学園が専用機を用意するそう
だ。」

一夏は当惑した顔で???と言ったような表情をしている。

「専用機!?一年の、しかもこの時期に?」

「つまりそれって政府からの支援が出ているって事で…」

「ああ、いいなあ… 私も早く専用機欲しいな」

ふう、しょうがない。

「お前は世界の男の中でたった二人のIS操縦者のうちの一人なんだ、分かるか？」

だから、試験的実験も兼ねてお前に専用機が用意されるんだ。」

「分かったけど…お前は?」

「俺のISは「やめとけ。トップシークレット極秘情報だ。…分かりました。」

「はい?」

「だから、極秘事項だからいえません。で解決。」

悪い一夏。俺の正体がばれるからな。

「ついでに言うと、教科書頁6ページを見る。理解できたか？一夏？」

「まあ…なんとなく…」

「あ、先生篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんですか？」

苗字的にも、存在しないからね。うん。

篠ノ井さんだったら結構いそうだが。

篠ノ之束。僕の知識の25%ほどはこの人によって成り立っている。勿論、ISについてのみだが。

「そうだ、篠ノ之はあいつの妹だ」

一夏は千f…織斑先生に不満を抱いてそうだ。うん。
何故って…表情で分かるくらいなんだもん。

「ええええーっ！ す、すごい！ このクラスに有名人の身内が2人もいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？ やっぱり天才なの！？」
そして3人目、止めとくか。

「篠ノ之さんも「ストップ」…え」

「まず、筈は博士自身じゃない。さらに、兄弟姉妹が天才だからって天才とは限らない…って今一夏が小声で言っていましたか？
だから、何事も程々にしたほうがよろしいかと思えます。」

そして、一夏に”お前の手柄”にしてやるとアイ・コンタクト。

一夏は啞然としている。皆も啞然としている。
そして、僕は一夏の手立てにしようとしているのを読み取ったのか、
千冬さんは
「織斑と長峰の言つとおりだ。それに、もう時間だ。席に着け！…
さて、授業を始めるぞ。山田先生、号令」
「は、はいっ」

――――授業の時間はあっという間に流れ

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど。」

でも、貴方は何ですか？専用機も持たずに、私に勝てるんですか？」

「ええ、ミス・オルコット。ですがつまらないのでわざと負けませよ。」

「はあ？貴方にも失望しました。そんな気休めを言つて。」

「じゃあ、ちよつと閑話休題で質問致します。」

貴方は第二回モンド・グロツソ大会を観戦していましたか？」

「ええ、一応は。」

「じゃあ、その大会は僕も出ていました。僕はなんと呼ばれたでしょうか？」

微笑みながら発言する僕。彼女…ミス・オルコットの顔が青ざめていく。

「ま、まさか、そんなことが…」
「あるんですよ、それが。」
そして、機密事項を僕は話した。

…授業中、確認を取った。アイ・コンタクト目線で。まあ、許可を出して
くれた。

だから、話した。

「そう、僕が一粒の雨だ。ア・ドロップ・オフ・レイン」

だから、僕は訓練機でも勝てる。そういうことです。「

…教室がざわめき始める。

まあ、逃亡だ。丁度昼だからっ!!

…お昼におにぎりを買って逃げたのは言っまでもない。

Story 007 (後書き)

自らばらした零斗君

いったいどうなる？

ご意見・ご感想・評価などお待ちしております・

「お前も幼馴染だからな。」
だそうで。うん、人生諦めが肝心だ。

で、今、剣道場にいる。で、試合を見ていた。 by 僕。

「どういうことだ」

まあしょうがない、うん。だって、一夏、昔強かったんだもん。

「いや、どういうことって言われても…」

それは頷ける。と言うか、僕って心でコメント返したっけ？

ギャラリーに混じる僕。だって、剣道部全員が見てるんだもん。
一本負けて…恥ずかしいと思うよ、一夏。

「どうしてここまで弱くなっている!？」

「受験勉強してたから、かな？」

何故疑問系何だ、一夏。

「…中学では何部に所属していた」

「帰宅部。三年連続皆勤賞だ。」

なるほど、見えてきたぞ。一夏、つまり君は、
(バイトが忙しかった)とでも言いたいのか。

「…直す」

「はい？」

「鍛えなおす！IS以前の問題だ！これから毎日、放課後3時間、
私が稽古をつけてやる!!」

部活の方は大丈夫なのかね、篝。

だがそんなこと、尊には伝わらない。
だって、全部喋ってないもん。

「それはちよつと長いような…」

「だから、それ以前の問題だと言っている!」

…僕の出番無いよね、うん。

「じゃあ、次は零斗、お前だ。」

「はいはい。」

「早くしろ!!」

まだ怒ってるよ…ふざけてるだろ、朴念仁…^{「夏}

えくと、眼鏡眼鏡…あつた。

と言つわけで、眼鏡装着!

周囲がざわつき始める。

竹刀を持っているのは左手に一本だけ、つまり、両手で握っていない。
い。

つてことになる。

「なつかしいな。」

「それはどうも。」

「始めっ」

…十分経過。

眼鏡を外す。

結果？僕の勝ち。

周囲からは感嘆の声が上がっていた。

一夏と箒の試合を見て、作戦を練ったのが功を奏した。

相変わらず、一夏は落ち込んでいる。

心にグサツと来る言葉が合ったらしい。

「まあ、事実なんだからしょうがないよ。」

…はっ、しまった。ついいつもの癖で…

「ごめん、一夏。とりあえず、着替えて部屋に行こう。」

「故に正当だ！」

…どうしたんだろ、箒？　まあいいか。

そうやって放っておいたり、度重なる不幸傷口に塩（主に言葉で）、のような状態に

するのが長峰クオリティだ、うん。

月曜日…

はい？

なぜか変更になっている順番。

だってまず僕対セシリア・オルコットだった気が…
僕最後になってるんだもん。そして、注意書きで、

「長峰零斗は代表《クラス代表》とはなりません、試合に参加いたしません。」

なお、参加選手へ通達。故意に負けた場合、
重いペナルティが待っているのでご注意ください。」

アレ？わざと負けられないじゃん。

ってわけで、クラス代表立候補者トーナメント、否応無しに開幕。
決定戦

Story 008 (後書き)

作者の力は偉大だ…

ブスッ!!

なんか旗が腕に刺さってるんですけど…

え〜と、なんか書いてある…

死亡フラグだと!?

さくしゃはちからつきた。

そんなわけないです。

では

ご意見、ご感想、お待ちしております。

Story 009 (前書き)

ナンバーからして、サイボーグが…というのはありません。
あしからず。

ゆっくりと来た僕。だって、暇なんだもん。

「お、織斑くん織斑くん織斑くん」

お、なんかやつてる。丁度百…もとい白式がある。

しかも山田先生は転びそうで転ばないと言う歯がゆい感覚。

「山田先生、まず落ち着いてください。はい、深呼吸」

と言ったのは一夏だ。そして、山田先生の深呼吸。

「はい、そこで止めて。」

一夏、良いなあ君は、台詞多くて。しかも、先生息止めちゃってるし。

「やめろよ、一夏。」と言った直後、

「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者」と千冬さん。いやあ、迫力あるね。

パァン！

おお、細胞を5000個死滅させる兵器《出席簿》じゃないか。なんと懐かしい。

「千冬ん、パァン！」

「学校では織斑先生と呼べ。学習しろ、さもなければ死ぬ」

とか何とか。僕は、ピットの席に座る。って言うか、気づかれてないの僕？

「長峰」

「何ですか？織斑先生？」

「降雨も届いてるぞ」

はい？メンテは？

「終わっているらしい。お前も早く行け！」
と言われて、取りに行く僕。

山田先生、もう一つの荷物の腕時計にお困りのようです。

「あ、その腕時計は僕のです。」

「え？ええ！？」

「じゃあ、もらっていくますね。」

「は、はい」

.....お帰り、降雨

そんなことを言ってるうちに

ゲート開放まで2・057...秒らしい。

そして、試合は始まった。

「あら、逃げずにきましたのね」

まあそうくるよね。

説明しよう。セシリアが搭乗するISは「ブルー・ティアーズ青い雲」。
メインは射撃とした機体で、第3世代兵器「ビットBT兵器」と言われる
武装のデータの

サンプルを取るために開発された実験・試作機。
そのせいで、実弾は非搭載。ややこしい機体だ。IS

今のセシリアが握っている「スターライトmk？」は特殊レーザー
ライフルと。

詳しくは原作 or Wiki ediaを参照してください。

「最後のチャンスをおげますわ」

「チャンスって？」

「私が…（以下略させていただきます by 作者
結構自信過剰だな。その自信があだになりそうだけど。」

「そういうのはチャンスとは言わないな」

「そう？ 残念ですわ。それなら・・・」

「・・・戦いから27分経過。」

「・・・27分。持ったほうですわね。ほめて差し上げますわ」
「そりゃどうも」

シールドエネルギー
残り67

「この青い雫を前にして、初見でここまで耐えたのは初めてですわね」

「・・・さらに少し経過」

「なるほど、そういうことでしたか」
「そんな発言をした矢先、
スカート状のアーマーが変形する。まだ隠し玉はあった、ということか。」

「かかりましたわね」

「!?!?」

「おあいにくさま！ ブルー・ティアーズ ビットは6機ありましてよ!..」

ブルー・ティアーズは今までのレーザー射撃を行うものではなく、「ミサイル」だったようだ。

「一夏、君は強運の持ち主だ。」

「機体に救われたな、馬鹿者め」

山田先生が分からない、と言った顔をしている。

「……ただ、すぐに分かることだ。」

「ま、まさか：ファースト・シフト一次移行！？ あ、貴方、今まで初期設定だけの機体で戦っていたというの！？」

セシリアの顔色が、先ほどの勝利を確信した笑みが消える。

一夏に取っては最高のチャンス。だが、僕に言わせると大ポ力をやらかして敗戦 ってオチだろう。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

白式の武器は雪片式型…か、やってくれるじゃん、東さん天才。

「俺も、俺の家族を守る」

「……は、貴方、何を言っ……」

「とりあえずは、千冬姉の名前を守るぞ…」

「うおおおッ！」

「セシリア・オルコットの勝ちですね。」

「何故、そう思う？」

本気ではないが、それでも余裕だ。

そして、終了後

「僕より一夏のほうが伸びしろがあり、貴方の理想には近いと思いますよ？ミス・オルコット」

彼女は顔を真っ赤にした。多分一夏のフラグがたったはずだ。
うん、きつと。

ピットに戻る。

「零斗、どうしてあんな動き出来るんだ？」

「秘密：だがもしかしたら千冬さんは話してくれるかもよ？」

「じゃあ僕は、先に部屋に戻ってるから。箒と二人で帰りな。」
「と言い、ピットを去る。」

と、そのまえに箒のところへ行き話してみる。無論、内緒話風に。

「恋のライバルが増えたんじゃない？あ、一夏の取り合い、がんばってね。」

内心笑っている。

だって、箒の顔が今迄で見たこともないような赤さなんだもん。

箒が何か言っているが誰も気にしない…と思う。

クラス代表決定戦も終わったことだし、さて、昼食食事に行くか。

- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -

翌日 ショートホームルーム S H R。一夏、おめでとう。

「では、一年一組の代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね!」

そんな喜ばしいことですか? 山田先生?

「先生、質問です。」

「はい、織斑くん」

「俺は昨日の試合に負けたんですが、何でクラス代表になったんでしょうか?」

まあ、そういうわな。

「それは…「それはわたくしが辞退したからですわ!」

おそらくフラグ成立だ。おめでとう、一夏。

確定要素はテンション高い、上機嫌ってところ。

「まあ勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然のこと。」

なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから。それは仕方のないことですよ」

さらに、セシリア・オルコットは続ける。

「それで、まあ、わたくしも大人気なく怒ったことを反省しまして

：

「一夏さん”にクラス代表を譲ることにしましたわ。やはりIS操縦には実践が何よりの糧。」

クラス代表となれば戦いには事欠きませんもの」

お、これは”確実に”フラグスイッチが入ったな。
こめんな
残念篤。

「いやあ、セシリア分かってるね！」

「そうだよー。折角世界で二人だけの男子がいるんだから、同じクラスになった以上は持ち上げないとねー」

「私たちは貴重な経験を積める。他のクラスの子に情報売れる。一粒で二度おいしいね、織斑君たちは。」

イヤ、ジョウホウヲウルノハイケナイトオモイマスヨ。

「あれ、じゃあ何で零斗は代表になっていないんですか？」

「聞かなかったのか一夏…」

僕は先生方の配慮により、特例で、エキシビジョンマッチという扱いになつたまでだ。

授業中言つてたぞ」

「あ、やべ、聞いてなかった…」

「かかったな一夏。実は授業では言われてない。よって、お前は授業を聞いていなかったただけって事だ。」

おおくと感嘆の声

「僕は誘導も得意だ。」

白状させるときも、一夏のフラグを立てるときも。

パン！

お決まりの出席簿だ。

「いいか、織斑、今度授業を聞いてなかったら…
分かってるな」

「は、はい」

これでクラス代表は一夏となったのである。

Story 009 (後書き)

彼は、自分に立ちかかったフラグを、折って他人に押し付ける
というチート能力があります。あしからず。

ご意見・ご感想などをお待ちしております。

Story 010

代表決定から数日後

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。
織斑、オルコット、長峰。ために飛んで見せる」

……一夏、もう少し早くしようよ。

「早くしろ、熟練したIS操縦者は一秒とかからないぞ。」
まあ、そうですね、うん。
僕とセシリアは展開済み。

……代表決定から仲良くなったのである。一夏と僕に
「セシリアと呼んでくださいな」だそうぞ。一夏へは恋心も
あるんだろうケド。

僕とセシリアはコンマ25秒で展開。

一方の一夏は…コンマ7秒だ。

「よし、飛べ」

言われて僕とセシリアは飛び立つ…が一夏が遅い。
セシリアのほうが当然早い。だって、こっちは性能が打鉄なんだから。
ん。

しかし一夏、遅いなあ。

「何をやっている。スペック上の出力は白式のほうが上だぞ」

そりゃあ、打鉄と同スペックな「降雨」より遅いから、洒落にならないんだよなあ。

「一夏さん、イメージは所詮はイメージ。」

自分がやりやすい方法を模索するほうが建設的ですよ。」

「そういわれてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚がまだあやふやなんだよなあ。」

何で浮いているんだ、これ？」

「何なら教えてやろうか？」と僕は続ける。

「頼む」

「反重力力翼と流動波干渉って話だが、理解できるか？」

「…やめとく」

「そうか」

と此処でセシリアからの開放通信オープン・チャンネルの通信が入る。

「一夏さん、よろしければまた放課後に指導して差し上げますわ。」

そのときは二人きり………

「一夏、いつまでそんな所にいる！早く降りて来い！」

篤、山田先生困ってるぞ。

そんなことお構いなしな一夏への発言

「ちなみに、これでも機能制限がかかっているのですよ。」

もともとISは宇宙空間での活動を想定したもの。何万キロと離れた星の光で自分の

位置を把握するためですから、この程度の距離は見えて当たり前ですわ」

「織斑、オルコット、長峰、急降下と完全停止をやって見せる。

目標は地表から100？だ。まずは長嶺、お前からだ。」

了解と

急降下、開始

ふう〜

気持ちいいな、この風は。

と思っっているうちに、警告が出ていた。

そろそろつと。

「逆噴射、開始」

10cm、5m、2m50cmと近づいてくる。

50cm、20cm、12cm、11cm…と遅くなっ

ていき
10cm丁度で停止。砂埃が舞う。

「良くやった。」

「どうも。」

「次はオルコットだ」

セシリアも普通に到着。

最後の一夏だ。

加速していく。どんどん、どんどん。

一夏は止まらない気がよ…

ドオオオオオオオーン

はい、簡単なクレーターの作り方、おしまい…

じゃなくて、クレーター作るなよ、一夏。

その後、筈とセシリアのけんかになったのは言うまでもない。

Story 010 (後書き)

次は多分鈴がくるでしょう。それでは…

ご意見・ご感想などをお待ちしております。

起床。食堂でいつものゼリー飲料を飲み干し、一夏と教室に向かう。

「お早う御座います。」

「あ、長峰君、おはよう。所で、転校生のうわさ聞いた？」

「転校生？今の時期に？なあ零斗、聞いたことあるか？」

「ああ。今の時期というのも不自然だが…」

消去法で行くと、代表候補生の可能性が一番高い。」

「そうそう、中国の代表候補生なんだってさ。」

「へえ〜」

「ほう」

代表候補生といえばこのクラスにも…

「あら、私の存在を危ぶんでの転入でかしら」

お決まりなポーズで。そして、

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？
騒ぐほどのことでもあるまい」

筈だ。まあそうだが、なんか気にかかるんだよなあ。

「どんな方（奴）なんでしょうね（なんだろうな）」

「む…気になるのか？」

「ああ、すこしは」

「僕は結構。友人かも知れませんが。」

「零斗、お前、まさか…」

「ええ、その”まさか”で合ってるけど？」

だが、今はクラス対抗戦があるんじゃないのか？」

「零斗の言う通りだ。一夏、今のお前に気にしてる余裕なんてあるのか？」

「そう！そうですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実践的な訓練をしましょう。」

ああ、相手ならわたくし、セシリア・オルコットが務めさせていただけますわ。」

何せ、専用機を持っているのは一夏さんと長峰さん、そしてこのわたくしだけですから」

おい、嫉妬が丸分かりだぞ。後セシリア、台詞が長い。

クラス対抗戦について？文字通り。詳しくは原s(ry

「まあ、やれるだけやってみるか」

ふあゝ眠い。

「…ただだし…」

「その情報、古いよ」

ん？今の誰だ？どっかで聞いたことが、という事は…

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう感嘆には優勝で
きないから。」

「アレ、何でいるの…鈴？」

「そうよ、中国代表候補生、フアンリン鳳鈴音…って零斗、何でここに
いるわけ？」

「それはこっちの台詞、そして、いつも通りの方が似合う。さらに、
時間切れだ。」

「え？」

「後ろ。残念だよ、鈴。」

「パァン！」

ナイスタイミング
丁度いい時間だよ、千冬さん。

ショートホームルーム
「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん…」

「学校では織斑先生と呼べ。さつさと戻れ。そして入り口を塞ぐな、
邪魔だ」

「す、すみません…」

やっぱり千冬さん苦手なんだな、鈴。

「また後で来るから、逃げないでよ、零斗、それと一夏！」

「俺はおまけかよ…」

何でそこは鋭いんだよ！と突っ込む。

「さつさと戻れ」

「はっ、はい！」

「何であいつ、格好つけてきたんだ？」しまった、これは間違ミスいだ。
「さあ」

一夏、お前もミスメイクだ。

「ねえねえ、今の誰？」

「…一夏、今のは誰だ？知り合いか？えらく親しそうだったな？」
お、筈の質問攻めだ。まあ筈は知らなくてもしょうがないか。

「い、一夏さん！？あのことはどういう関係で……」
セシリア、動揺するな。

というか、僕には質問来てない。ラッキー

パン！×沢山。チート出席簿が悲鳴を上げる…
つていうか、何で壊れないんだ？

「席につけ、馬鹿共」

一夏と僕のせいって視線が痛い。うん、痛い。

授業中…

「篠ノ之、答えは？」

「は、はいっ!?!?」

一夏の事はっかりだからそうなるんだよ。箒。

「答えは？」

「…き、聞いていませんでした…」

いつもの出席簿アレのうなる音。

だが、これだけではすまなかった。

「オルコット」

「…たとえばデートに誘うとか。いえ、もっと効果的な…」

「……………」

本日何度目か分からない出席簿アレの唸りが聞こえたのは言うまでもない。

そして、お昼

「お前のせいだ！」

「貴方のせいですわ！」

一夏、お疲れ…

「一夏、ご飯へ行こう。二人とも、ご飯を食べながらもいいんじゃない？」

「分かった。」

「分かりました」

「Okみたいだし…行くぞ」

「あ、ああ」

女子数名がついてきたのは言うまでもない

みんな同じものなんだな…
いつも、お昼ご飯、みんな同じなんだもん。
ぼくは様々だが。

「待ってたわよ、零斗、それに一夏！」

鳳 鈴音
話題の転校生だ。

「ちょっと待ってくれ、通行の邪魔だし、食券も出せない。
それに、ラーメンが伸びると思うが？あと俺おまけ？」

「うるさいわね〜」

「久し振りだな。丁度一年になるのか。元気にしてたか？」

「僕は5年ぶりだが…久し振りだな、鈴。」

ちなみに僕と一夏は略して

「リン鈴」と呼んでいる。

「僕たちは食券出したりしてるから…ちょっと待ってて。」

数分経過。

僕たちは昼食を食している。

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？おばさん元気か？いつ代表候補
生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ、あんたらこそ、何IS使ってるのよ。」

「ニュースで見たときびっくりしたじゃない」

「僕は、空白期間は気になると思うけど…」

「流石零斗、俺の言いたいこと同じだ。」

じゃあ箒も気になったてことか？

「一夏、それに零斗、そろそろどういう関係か教えて欲しいのだが」「そうですわ！一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってるの？」

皆さん興味心身なわけ。

「べ、べべ、別に零斗と付き合ってるわけじゃ…」

「そうだぞ、何でそんな話になるんだ？ただの幼馴染だよ。」

「僕にとっては、大切な存在だ。」

お決まりの耳栓スキル+15高級耳栓を装備

キヤアアアアアア—————

女子の叫び声。高級耳栓でまったく聞こえないが、ふう、どうやら収まったようだ。耳栓を外す。

「真っ赤だぞ、鈴」

そついう一夏。お前って、何でそんななんだ？

「…」鈴はオーバーヒートしたようだ。

「僕のご飯食べ終わったから。一夏、片付け頼む。」

「何で？」

「鈴を保健室に連れてく。あと、箒、セシリア。」

” 入れる枠は一人分 ” だから早くしたほうがいいぞ。 「

そういつて鈴を保健室へ。

「 気絶してます。様子見お願いします。 」
と保健室の先生に言っ て教室へ。

” 放課後は一夏との練習で第3アリーナにいるから ” と書置きを残し、

午後の授業へ向かった。

Story 011 (後書き)

ちょっと加減を間違えました。

ご意見・ご感想をお待ちしております。

Story 012 (前書き)

僕はコーヒーはブラック派ですが、

このお話は微糖となっております。

まあ、甘いかどうかは貴方次第です!!!

Story 012

.....第3アリーナの練習が終わった。

一夏と篤で話をしているが、僕は気にしない。

「零斗っ！」

ドアが横に移動し、現れたのは…予想通り鈴だった。

「お疲れ、はい、タオル。飲み物はスポーツドリンクでいいよね」

「ありがとう。それじゃあ、頂くよ。」

ふう、疲れた。

「アレ、一夏達はもう行くの？」

「ああ、少し、一夏に聞きたい事があるからな」

「そうか、じゃあな」

そして少しして

「零斗さあ、やっぱり私がいないと寂しかった？」

「ああ」

「それと…」ちよっと待った。話をするなら部屋のほうがよくないか？

ええっ、突然何？」

「いや、いつまでもいたら体冷えるし…」

多分一夏は今頃篤にいろいろ聞かれてるだろうから
部屋の問題はない。」

「あんだねえ…まあ、いくわ。待っててね」

経過…10分ほど

「鈴」

「うん？」

「何故ポストンバックを持ってきているんだ？」

「引越し」

「はい？」

最近シーズン9が終わったドラマの真似だ。

「そういうことじゃないの？」

「いや、僕は話はこちらのところの方が…あ、ちなみに引っ越しなら一夏に相談しろよ。」

「へ？」

「いや、相部屋だから…って、話すことないのかよ。」

「あるけど…」

「じゃあ話して。」

「わ、分かったわよ…」

アンタ、転校するときなんて約束したか覚えてる？」

「まあ……」

「どんな？」

「何故俺に聞く？」

「本当に覚えてるか分からないじゃない？」

「えーと……『料理が上手くなったら毎日酢豚を作ってくれる』だっけ？」

「それに対する……」

あ、なんかスイッチ入ってる。そして救世主、織斑一夏朴念仁登場！
一気に場が冷めた……もとい、僕は助かった。

そして、鈴のスイッチがオフになった。

「アレ？戻ってたのか、零斗」

「ああ……それと、鈴からお願いがあるんだって」

「ん、何だ？鈴？」

「ええーつと、部屋変わって、一夏」

アレ？またスイッチ入った？

「ああ、いいぜ」

そうかそうか流石一夏……え？お前イマナンテイッタ？

「ありがとう」

「ちよっ…おま…部屋どうするんだよ？」

「千冬姉に相談してみる」

よしっ、切り札キターーーーーー

「うん、分かった。ありがとう。」

……5分後

どうしてこうなった…

鈴…準備中

一夏…千冬さんの部屋に引っ越し準備中

読めたぞ、奴は千冬さんブラコンだった……

ってわけで。

……さらに5分後

「さっきの話だけどさ。それに対する返事って聞いてなかったよね

…」

「あ、ああ」

やばい、間違いなく動揺してる僕。

「でその返事を今聞くけどさ、どうなの？」

（…^^…答えるしか、ないよね。だって僕…

「いいよ」

鈴が真っ赤になってる。多分僕も。

「意味分かって言ってる？」

「うん。元で言うとお味噌汁…」てことだろ
「う、うん」

やばい、これではどちらともダウンしてしまっ。

ポーっとしていると…

唇になんか…ん？唇？意識を戻すと…

！？

だって…鈴が…僕に…
キスしてるんだもん…

やばい…はやくダイヤグラム運行計画を非常用から戻さないと…

「ねえ、鈴…」

「何？」

「僕のこと、好き？僕は好きだよ…」
こうなってしまうたら、言うしかない。それに、僕の本心だからだ。
これを言ったからか、僕は普通に再起動復帰。

「う、うん。私も…零斗のこと…好き」

鈴も復帰

「だから…付き合ってねっ！…」

「あ
あ」

そのあと…

晩御飯に遅れそうになったのは言つまでもない。

Story 012 (後書き)

暴走はしません、ほどほどにしか。

鈴書きづらいです。ものすごく純愛ですが、きっと薄れるでしょう。
何故って、それが作者クオリティだからです。
信じるか信じないかは、貴方次第！

Story 013

そんなこんなで五月。
いろいろあったなあ。すべて割愛してるけど。

で、当日。何って、クラス対抗戦リーグマッチに決まっている。

「がんばれよ、一夏。」

「わかってるって」

甲龍シホンロンか、まあがんばれ、一夏。

「それでは両者、試合を開始してください」

クロス・グリッド・ターン
三次元躍動旋回を教えた甲斐があった。

アレがなければ、今のはあたっていただろう。

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど……」

距離をとろうとする一夏。まずいぞ、うん、まずい。

「甘い！」

やっぱりか……

あれは、衝撃砲だ。簡単に言うと、
ダンボールの空気砲があるとするだろ？

それがダンボールごと見えなくなったって言うようなものだ。
尤も、威力は桁違いだが。

「よくかわすじゃない。衝撃砲龍砲は砲身も砲弾も目に見えないのが特徴なのに」

技術がすごいな。空間の歪みなんか調べても後にしか分からないかな…

「鈴」

「なによ？」

「本気で行くからな」

「なによ…そんなこと、当たり前じゃない…。兎に角、格の違いつてのを見せてあげるわよ！」

そういうことが、一夏。イグニッション・ブースト瞬間加速の使い時か…間違っではない。が、油断はするなよ。

「うおおおっ！」

いける、と誰もが思った瞬間、会場に轟音が響いた。

所属不明のIS、否、無人機。

そんなの一瞬で見抜ける。

「お前はどっするんだよ!？」

「あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ！」

「逃げるって…女をおいてそんなことが出来るか!」

「馬鹿!あんたのほうが弱いんだからしょうがないでしょうが!」

一夏、言われ放題だな。

「別に、あたしも最後までやりあつつもりはない……!?!」
言いかけて、鈴が避ける。

急ぐぞ、早くあいつらを助けないと……

「ビーム兵器かよ……しかもセシリアのISより出力が上だ」

僕は、気がつくとシールドの前にいた。

ISを起動し、壁を破ろうと「隼」を振る。
シールド

どうして、どうして、破れないんだよ!

そして、僕の脳内にあの光景が甦フラッシュバックしたった。

もう大切な人を無くすだなんて、嫌だ……

-
-
-

そのとき、ISが再構築されていく。セカンド・シフト第二形態だ。
初めて僕は、この機体に、期待に、感謝した。

Story 013 (後書き)

次はフラッシュバックした光景を書きたいと思います。

ご意見・ご感想などお待ちしております。

Extra 002 (前書き)

皆さんありがとうございます。

お気に入り小説登録者が、こんなにも増えるなんて…

と作者はなっております。

それでは番外編、あの光景とは？

それでは、どうぞ！

それは、僕がまだ長峰姓でなかった頃。

両親がまだ生きていた頃の出来事。

3歳の頃。

毎日に、退屈を感じていた頃。

それが、事の発端。人生の分かれ目。^{ターニング・ポイント}270度転換。
もし退屈を感じていなかったら、こんなことにはならなかったのかもしれない。

だが、退屈を感じていた。だからこそ、必然だったのかもしれない。

.....

「おとうさん、おかあさん、りょこうつれてって」

あまりに暇だった僕、純粹だったあの頃。

.....そのときは、まだ記憶が戻っていなかった。
が、もともと学習能力が高かったらしい。

「はい、零斗君はいい子だからね」

「どこに行きたい？零斗」

両親はそんな僕を溺愛していた。

「ん〜とね、デイズ ーラ ドがいいな」

だって、此処に来る前は北海道に住んでいた。

「じゃあ、ゴールデンウィークのときな」

そして、5月。

某ねずみの国のホテル。

楽しかった。嬉しかった。だが、神は悲惨だ。

事件は、起こった。

覆面の人が両親を刺し、金を盗んでいった。
世間では、強盗殺人というが、そのときの僕は理解できなかった。
そして、シヨックで意識が薄れていく中、いったい、何故、僕の家
族を… そう思った。

「う、うわあああああああ
跳ね起きた僕。」

僕は気絶していたらしい。

そして、転生までの記憶もよみがえった。

「お父さんは、お母さんは？」
焦る僕。

横には……
心拍数0の父と母。

僕は盛大に泣いた。そして、守れなかったのは僕のせい、と痛感した。

僕が、僕が、何か出来れば……

そして、孤児院へ。さらに重なったのが、長峰さんであったことだ。

「僕を養子にしてください……」

と言った。

「でもぼつち…」

と言った。ディズニールンドの件は長峰さんに伝わっているらしい。

「良いんです、それにこのまま引きずっていても、なんともなりません」

とか何とか説得した。

そして、僕は長峰零斗になった。

幸せだった。

だが、「長峰」になっても、心の傷は消えなかった…

突然、蘇った光景から引き戻された僕。

「汝、強さをどうして欲す」

「…」

大分昔の僕であつたら上記の様になるだろう。だが、今は違つ。

「大切な人を守りたいからだ」

「なぜだ。力でもいいのではないか？」

その彼に、僕はこう答えた。

「力と強さは違つ。力だけではただ暴れるだけ。
大切な人を守るだけの”強さ”が欲しい」

そして…

「もう大切な人を無くすだなんて、嫌だ - - - - -」

そう言つた。そして、彼は…

「良い志になつたな、零斗」

そういわれて、現実に引き戻された。

丁度そのとき、ISが再構築されていく。セカンド・シフト第二形態だ。
初めて僕は、この機体に、期待に、感謝した。

Extra 002 (後書き)

そんな過去があったのか…と自分で書いて思いました。

気にしないでください。

ご意見・ご感想お待ちしております！

Story 014

「……この遮断シールドを破って、二人を助けに行く！
僕には、そんなことしか頭になかった。」

展開可能装備は…7種類か。多いな、案外。じゃあまずは…コレだ。

「時雨」展開してみたがかなり軽い。ので左手で扱う…っと

(理由はStory 008を参照に…)

斬る…その刹那

シールドが崩壊した。

「さて、いこうか」

「っ…！速度が白式並みだ。が、さらに、瞬間加速イグニッション・ブーストじゃなくても、
かなり高速に移動できるらしい能力がある。」

「…換装。「地雨」を展開。」

アサルトライフル。これも軽い。高速戦闘用かよ。

バババババババババババババツ！！

弾幕をはる。それで二人はようやく気づいたようだ。

「お待たせしました。後は僕に任せて。二人はダメージがひどいので
戻ったほうがいい」

「お前一人で大丈夫なのか？」

「大丈夫。代表決定戦のときのアレを見たたる？」

「そうだな。分かった」

「ちょっと！何二人で話し進めてんのよ！」

それは後で説明しよう。

「一夏、危険だから鈴木」

「OK！」

その後「ちょっと、あたしも戦わせなさい」と聞こえた気がするが、誰も気にしない。

その後、アサルトライフルの出番が終わった。

「換装。」「「わかあめ」「俄雨」を展開」

今度はスナイパーライフルだ。お決まりのように軽い。大丈夫なのか？

そんな事を思っているうちに、レーザーが命中。シールドエネルギー15。

やばい…もろで食らった…

どうしようもないし、さて…高速移動、使ってみますか！

周囲が驚いている。

消えたように見えるらしい。

が、航続距離が2kmって、少なすぎじゃないか？

だが、攪乱には丁度いいらしい。

だから、スナイパーライフルを撃った。

そして、命中。

一夏達によって、ダメージを食らっていたその機体を、止めた。

.....物事を、表面で判断してはいけない

誰もが勝った、そう思っていた。

だから、僕も「俄雨」を収納。

だが、その瞬間.....

.....

無人機その機体は、レーザーを放っていた。

もう回避のしようがない距離...ではないが、避けたら観客が被害にあう。

しょうがない。高速移動で前に行く。

僕は、レーザーがあたるまで時が遅くなったように感じた。

残り10m…5m…2m…

これを使つしかない！そうひらめいた僕は、

残り1m

「雷雨」を展開した。

残り10cm

届け、雷雨の攻撃………

残り0cm。

そのとき、雷雨の攻撃は無人機を貫く。
だが、それと同時に、自分もレーザーに当たる。
シールドエネルギーはほぼ0。

それに、レーザーが当たったら…
その瞬間、僕の意識は、吹き飛んだ。

……ここで、大切な人を、他の人たちも、守
れたかな、と思いながら

「うう…」

そうか、僕は、無茶してほぼ0のシールドエネルギーで突っ込んだ
から、また死んだのか…

シャー、とカーテンの開く音。 ってことは…

「気がついたか」

あれ、死んでなかった。良かった！

「体の損傷は余り見られないが、全身に火傷の症状がある。よく生きていたもんだ」

「それはどうも…いたたたた…」

「だから、1週間安静にすごせ」

「はい…」

苦笑いしながら答える僕。そういえば…

「織斑先生、あの機体、どうだったんですか？」

ただの機械無人機だったんですか？」

「ああ、コアも未登録のものだった」

「そう…ですか…」

「では後片付けがあるので仕事に戻る。無理はするな」

「はい」

あれ、これって一夏の役割じゃなかった？

まあいいか。寝よう。安静にしているのが暇だし…

。 。 。 。 。

「 」

なんか人の気配を感じるが、あえて寝ているふりだ。気づかれて大変なことになったら困るし…

「零斗…」

あれ、鈴だった。でももうちょっと偽装しよう。

まだ眠いし…

その瞬間って言うか瞬間が多いな、この回。

唇に何かが重なった。

恐る恐る目を開けると…

まあ、そういうことだろうと思ったわ！！

脳内補完をお奨めします。この数分は黒歴史となりました。

「…そのせいなんだよね」

スキル「スキップ読み飛ばし」の発動に成功。

「そうだったのか…」

「一応、母さんのほうの親権なのよ。ほら、今ってどこでも女の子のほうで立場が上だし、

待遇もいいしね。だから…」

声のトーンは上昇、だがすぐに下降。

「父さんとは一年あってないの。多分、元気だとは思っけど…」

僕は、どう声を掛ければいいのか。選択肢すらなく、ただ、重い空気が漂う。

「家族って、難しいよね」

「…ねえ、鈴」

「ん、何?」

「今度どこかに行く?」

「え!?それってデート!?!」

「まあ、そうなるね」

鈴、はしゃぎすぎ。

そこへ、すごいタイミングで入ってくる人が2名。

一夏
朴念仁とお嬢様だ。セシリア

「どうだ、零斗、具合は?」

「長峰さん、具合はいかがですか?」

「まあまあといったところ」

まあ見舞いに来てくれた様だ。そして鈴、顔真っ赤。

嫌な予感しかしない。うん。

が、運よく的中しなかった。

そして、談話をした。

クラス対抗戦、中止になったそう。

その暫く後、一夏、セシリア、鈴が去った。

Story 014 (後書き)

次回、ISを紹介します。

ご意見やご感想などをお待ちしております！

Story 015 (前書き)

どうもおはこん わ。Silent Voidです。

主人公の人格崩壊が本格化しています。

軌道修正は難しそうなので、この方向で行きます。

小説2巻目、アニメ5話突入です。

さて、実験でサイドも書いてみますか！

6月頭。

僕は、歩いていた。鈴と一緒に。

え、なぜかって？それは…

「どうしたの、零斗？」

「え？ああ、大丈夫だよ。で、どこに行くか決めたの？」

俗に言う、「デート」って奴だ。

で、外に行くのはいいものの、行き先を決めていなかったことに由来する。

「ええと…ショッピング！」

「了解つと」

やっぱり鈴も女子だ。そういう所にも行きたいのだろう。

「早く早くっ！」

「はいはい」

で、やっぱりこんな場面には尾行がつき物で。みんな興味本位だろう、多分。

一夏は中学の友人のところへ行くって行ってたし。

そして、駅に到着。尾行を追い払うにはどうしたら良いだろうか…諦めるか。じゃあ切符を買って、っと。

「はい、鈴」

「ありがとう」

「じゃあ、行こうか」

「うんっ!」

そういつて、モノレールに乗る。

・尾行者視点・

「よし、切符は買った」

「こちらですわ」

「じゃあ、行くぞ!」

「分かりましたわ!」

そういつて二人を尾行する篇とセシリア。

バレバレなのを気づいていない。

何で尾行しているかというと、零斗に

一夏に誘ってもらえない、と相談に行こうとした二人。

そして、鉢合わせ。

しかも零斗はいなかった。他人によると、デートらしい。

そして、尾行し今へといたる。

そう、ただ単に羨ましさからの尾行である。恋する乙女とは恐ろしい。

・視点を通常へ・

そして、ショッピングモールへと到着。そこで、鈴に聞いてみる。

「尾行されてると思わない？」

「え、零斗も？」

「どうやらどちらも怪しんでいたらしい。

どうまけばいいのかが分からない。」

「で、どうする？手段は逃げて撒く。気づいている、と言っ。

「夏を引きずり出して逃げる、それと…の3つ。」

「それと？何よ？」

「完全無視。逆に見せ付ける。その後言う」

「あたしは可哀想だから言ってあげた方がいいと思っけど」

「じゃあ言いに行く？付いて来る可能性もあるけど。」

「じゃあ無視で」

「了解つと。じゃあ、まず何買っ？」

「え〜と…み、水着」

「へ？」

あ、やばい、声が裏返った。

「あ、ごめん。じゃあ行こうか」

「う、うん／＼／」

すたすたと歩く鈴。離れても知らないぞ？

アレ、止まった。何でだろう？

「あ、あの…手、つ、つないでくれる？」

「え？あ、うん、いいよ。」

多分他人から見たらどっちも（／＼／＼／＼／＼）な顔をしているだ
ろう。

どう見たってバカップルにしか見えない、うん。

ただ純粹すぎるかも。うん。

- 尾行者視点へ -

「「なんなんだ（ですの）、あの二人は！？私は一夏と手を握ったこともないのに…」」

篠ノ之箒、セシリア・オルコットは憤慨、もといあのバカップルに嫉妬していた。

ただ単に羨ましかっただけ、ともいえるが。

一夏に誘ってもらえないからって可哀想だ。それほど、恋する乙女は暴走しやすいのである。

周囲の人たちは避けた。

彼女たちの嫉妬、もとい八つ当たりのオーラで溢れていたからだ。

- 視点を通常へ -

やばい。視線が怖くなった。だが此処は無視だ、耐えろ、耐えるんだ僕。

そうこうしているうちに、買い物も終了し、喫茶店へ。

2人で今日の感想を。だが、尾行については触れない。

「どうだった、鈴。楽しかった？」

「うん。零斗とも一緒にいられたし…」

「あ、ありがとう」

やばいな。どつちも恋愛に関するの耐性がないな。

「そろそろ帰ろうか？」

「うん…」

そして、僕たちは帰った。

勿論、あの二人を呼んで、元から気付いていたといったが。

「ねえ零斗、ご飯いこ」

「うん」

外を見る。

「夏は布仏妹に悪戦苦闘してるようだし、行くなら今のうちか。」

.....

「ねえ、聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「え、何の話？」

「だから、あの織斑君の話よ」

「いい話？悪い話？」

「最上級にいい話」

「聞く！」

「まあまあ落ち着きなさい。いい？絶対これは女子にしか教えちゃ駄目よ？」

女子だけの.....」

2人で食べている中、謎の噂話。僕が入っていないのでどうでもいいが。

「なんだろうっか？」

「さあ？」

そんな返答が帰ってきて、その後。

「えええっ！それ、マジで？」

「マジで！」

「うそ！キヤー、どうしようー！」

大変だな、うわさに惑わせられる女子も。情報ソースをちゃんと確認してからじゃなきゃ。

「あんだ、なんか噂話は本当に確認しないと駄目だなと思ったでしよ。」

「あれ？なんで分かったの？」

「まあ、いつつもそうだったからね」

「そう…」

「ご飯も食べ終わったし、といってもゼリー入りの以外のアレだが。」

「先行ってるね」

「零斗、あんた早すぎよ！」

「しょうがないじゃないか。カリーメトなんだから。」

「よく損だけで大丈夫か、といわれるが、ぜんぜん大丈夫だ。」

次の日。

寝坊したが、鈴が起こしてくれた。

「が、読書していたら遅れかけた。」

「ふう、間に合った。」

「諸君、おはよう」

「おはようございます！」

間に合わなかったらどうなっていた事か。

「今日からは本格的な実践訓練を開始する。」

「訓練機ではあるがISを使用するので授業になるので各人気を引き締めるように。」

「各人のISスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないように。」

「忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。」

「それもないものは、まあ下着で構わんだろう」

「…最後おかしいよね、うん。」

「では山田先生、ホームルームを」
「は、はいっ」

「ええとですね、今日は転校生を紹介します！しかも2名です！」

「「ええええええええええっ！？」」

え…ソレツテバランスワルスギナイカ？

2 h風に言うつと3組涙目ww…となる。
本当に3組がかわいそうだ。

「失礼します」

「……………」

1組は、静寂に包まれる。

だって、男子が入ってきたから。

Story 015 (後書き)

僕は多分サイドを書きます。多分。

書き方がずれているかもしれないが…

なお、日曜はどつ多くても2話のみ掲載です。

Story 016

…IS学園、恐るべし。

何故って、男装者と軍人氣質が入ってきたんだもん。

男装者は見抜くのは簡単だ。とは言わないが、観察眼、推理力があれば誰でも…

分かりはしないか。だが、確信がない。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも

多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

「お、男…?」

誰かが呟く。

「はい。こちらに僕と同じ境遇のかたがいて聞いて本国より転入を…」

「ねえ一夏、耳栓つけて。さっき渡した奴。」

「何でだ?」

「いいから。早く!」

プライベート・チャンネル
と個人通信で会話。

「きゃ…」

「はい?」

「きゃあああああああ————」

「ね、言ったでしょ、一夏」

「ああ……」

耳栓をして良かった。うん、良かった。

「男子！3人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれてよかった~~~~~」

最後おかしいよね、うん。

面倒見るのは……一夏だろう。

ブラコンの姉といえるのはあれだろうし、近……

すいません、織斑先生。

いや、あのブラコ……織斑先生だから、僕って可能性もある。

鈴が引越してわけた。

「あー騒ぐな、静かにしろ」

さっきの僕への怖い視線のような感情ではなかった。

ただうっとおしいだけだろう。うん。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから」

軍人氣質じゃなくて軍人だ。間違ってた。

「……………」

何か話さないのか……って軍人じゃ話すことはないか。

「……挨拶をしる、ラウラ」

「はい、教官」

「此处ではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、此处ではお前も

一般生徒だ。

私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

ビンゴ 見事に軍人。ドイツ人か。いや、ドイツ軍か。

「ラウラ・ボーデビッツだ」

「……………」

見事な空白…もとい沈黙、または静寂。

だが、僕は、はつきりと分かった。

シュヴァルツエア・ハーゼ。通称黒ウサギ隊…だったかな？
ラウラ・ボーデヴィッツは…少佐だったっけ？

「あ、あの、以上…ですか？」

「以上だ」

残念、山田先生

そりゃ、笑顔で聞いて、無感情で返すとかされたらねえ。

「！貴様が……………」

一応止めにいくか。

聞こえたのはパシン！という音ではなく、パシッ！

とつかまれた音が響く。

「！？」

「やめといたほうがいいと思いますよ。

シュヴァルツエア・ハーゼの少佐さん…であっていますか？」

「！！」

「…チツ」

ただただ呆然とするクラス。

「あー…ゴホンゴホン！ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第2グラウンドに集合。」

今日は2組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」
とその悪い流れを断ち切るかのように、千冬さんから言葉が紡ぎ出される。

さて、と…

「一夏、先に行ってる」

- 一夏視点 -

「おい織斑、デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

「何で俺なんですか？零斗だって…」

おそらく俺ははめられたのだろう。

「そういうことだ」

あの零斗め…

- 視点、通常へ -

「遅いよ、一夏。お先に」

「ちよつと待てよ…」

「遅れるのは嫌だからね」

友を裏切る僕。なんとかなるよね、多分。

そして、楽しそうな2人、遅れて到着。

箒とセシリアが睨んでる、うん。

「ごだごだ話している一夏、そしてセシリア。さらに鈴も加わる。」

よく聞こえないが、最後に千冬さんが発した言葉なら聞こえた。

「・・・安心しろ。馬鹿は私の目の前にも2名いる」

鈴とセシリアに出席簿（純器）が襲い掛かる。

自爆だよね。一夏のせいにはいけない。」

「では、本日から格闘および射撃を含む実践訓練を開始する」

「はい！」

人数は56人ほど。倍。

なんか鈴とセシリアが言っているが、自爆d（ry

「今日は戦闘を実演してもらおう。丁度活力があふれんばかりの十代女子

もいることだしな。まずは・・・鳳！・・・オルコット！」

「何故わたくしまで!?!」

諦めな、セシリア…:

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。いいから前に入る」

鈴とセシリアがまた言っているが、自b(ry

千冬さんがなんか言っているの、耳を澄ますと、

「……いいところを見せられるぞ?」

そついうことか。恋心を利用するとは。流石:といつても簡単に釣られるほうもつられるほうだが。

「仕方ありませんわね。このイギリス代表候補生、セシリア・オルコットの出番ですわね!」

「まあ実力の違いを見せてあげるいい機会よね!専用機持ちの!」

着火:ですか。

キイイイン、と金属音。

一夏は1人に殺されかけるが、それはまた別のはなsh(ry

ちなみに2人は原作どおり敗戦。

「次は長峰、お前がやれ」

「…はい」

「五月雨、起動」

山田先生との勝負だ。あ、東さんに言っただけじゃなかった。

第二形態「五月雨」は白式と同じ形だが、機体色は紺。銀のライン

が入っている。
さらに非固定浮遊部位アンロック・ユニットがない。独特だ。

「開始！」

「まずはお先に……」

そういつて、スナイパーライフル「俄雨」を展開、狙撃。
だが、流石は元代表候補生。全弾回避。
そして反撃。アレ、やばい……
何故かって？

IS学園はまだ「五月雨」の武装のデータを取っていない。

「俄雨」が破損。軽量化のため特殊機構なのでデータがないと直せない……

そう、頭の良い皆さんならお分かりだろう。

「俄雨」は完全に使えなくなりました。

武装の破損を防ぐため、太刀「時雨」を展開。

-----50分経過-----

「時雨」一本で戦う僕。弾切れを起こした「ラファール・リバイブ」の銃

そう、結果はお分かりだろう。

先生は防御に徹することしか出来ずに、僕に負けた。

「お疲れ様でした。山田先生」

「ど、どうも……」

もう授業が終わっていたし。

なんで？

「ねえ千冬さん、何で授業終わっているんですか？」

「織斑先生だ。だが、いいだろう。長すぎるため授業にシフトした」
「なるほど…。ありがとございます」

急いで着替え、鈴に屋上に来て、といわれた僕は急ぐのであった。

Story 016 (後書き)

昼食までにしました。あと、「俄雨」は使用不能に。

ご意見などお待ちしております

Story 017 (前書き)

この回からサブタイトルが通番のみとなります。
後、雷雨も犠牲になったのだ…

「どういうことだ…」

「ん？」

残念、箒。他の皆様も。とそのとき、バコツ！と、鈍い音が響く。

「いたたたた…なんで殴ったの、箒？」

そう、殴られたのは僕。殴ったのは箒。

「余計な考えを持つからだ」

はい？読まれてました？シャルルは苦笑い。

「とりあえず、屋上で食べるって話だったたる？」

「そうではなくてだな…」

そこには箒、セシリア、鈴、シャルル、一夏、と皆さんいる様で。

「折角の昼飯だし、大勢で食った方が……」

シャルルの方を向いてみる。目線があつた。

が、やっぱりシャルルも一夏の朴念仁鈍感ぶりにあきれていた。

「そ、それはそうだが…」

まあ、先に失礼しますか。

「ねえ鈴。僕らはあっち行ってようか。放って置いた方が、面白そ

うだし……」

「ア、アンタねえ……」

「まあそう呆れないで。僕たちが介入したって無駄だから。」

そうして、僕らは少し離れ昼食を取る。

・視点、一夏へ・

「まあそう呆れないで。僕たちが介入したって無駄だから。」

離れていく零斗たち。おーいと声を掛けようとしたが2人に阻止された。何で？

「コホンコホン……一夏さん、わたくし今朝はたまたま……」

こうして、一夏の災難は続く

・視点、通常へ・

「災難だね、一夏。」

サンドイッチをすすめられる一夏を見ながら言った。戦略的撤退とは非常に役に立つ。うん。

「あいつもあいつだから……」

鈴、呆れるなよ。

「しょうがない、ってか？」

「それより、零斗の分」

「酢豚だね。ご飯用意しといて正解だった。」
「だって原作ではね…詳しくは原作2巻119ページを…って誰に言
ってるんだろう？」

「今朝作ったのよ。アンタが前に食べたいって言ってたでしょ」

「じゃあ、頂きます」

うん…メシマズではない。というかうまい。

「うん、おいしい」

とかなんとかで、戦略的撤退が功を奏した僕は幸せだったのである。
あと、「あ〜ん」してといわれたが^{オーバーヒート}過熱は防げたのである。
一夏？多分犠牲になったのでしょうか。

放課後。東さんに連絡。

『ハロ〜みんなのアイドル東さんだよ〜
いつも通りだ。』

『で、何の用かな〜れ〜くん？』

「ISが第二形態になったので。あと、データのバックアップを頼
みたくて」

そう、それが連絡した理由だ。だって、対山田先生で「俄雨」は使

用不能、

さらに後で気づいたのが「雷雨」の使用不能だ。

このIS、武装の修復をしないからだ。何故か2つの武装のみは、
ちなみに

（注 作者は武器を壊したかっただけです。
後付武器イコライザが登場します。あしからず。）

そのことを東さんに伝える。

『そうかそうか、で、破損しても使えるように、バックアップを天災天才
東さんに頼むんだねえ』

「そうですね。後、実弾以外にも欲しいですね。まあ、自分で設計し
ますが。」

『れ〜くんは流石だね、流石天災天才東さんが見込んだことはあるね』

「それほどでも。では設計したら作ってもらいます。よろしいです
か？

改良も加えてもらいます」

『天才東さんには簡単なことなのだよ、れ〜くん』

「そろそろ切りますね。他にありますか？」

『なにもないよ〜』

「では」といって電話を切る。

さて、そろそろだから一夏の練習を見に行きますか！

Story 017 (後書き)

東さん、書きづらいです。

でもまあ、がんばって書きたいと思います。

それでは失礼します

まあ、多分、きつと後付武器はエネルギー系でしょう。
さらに、ペースが1日1回で落ち着きそうです。

Story 018 (前書き)

総計ユニーク8000突破！PV70000突破！（PM5時まで）

何故かは知らないがユニークが上昇したため

（まあ皆様のおかげですが）

作者としてもやる気がさらに…

というわけで18話、番外含め25部目、投稿です！！

次の日…

「ええとね、一夏がオルコットさんや鳳さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ」

「そ、そうなのか？一応分かってるつもりだったんだが…」

「つもりじゃ駄目だよ。知識としてあっても応用が出来なきゃ」と言う僕。

何故って…シャルルと僕で一夏に射撃武器とは、について教えることになってるんだもん。

実際に言つと、IS戦闘のレクチャーだが。

「うっ…確かに。『イグニッション・ブースト瞬時加速』も読まれてたしな…」

「一夏のISは近接格闘のみ。だから、射撃武器の特性を理解しなければ

実力向上は望めないかもよ？」

まあまあグサツときそような言葉をチヨイス。

「零斗が言ってることに加えて、瞬時加速は直線的だから反応できなくても

軌道を予測して攻撃出来ちゃうからね…」

此処で言わなきゃ駄目だよな、うん。

「だけど、軌道の変更の仕方によっちゃ、骨折するから、無理に曲げないこと」

こつ釘を刺さないと後々大変そうだし。

「…なるほど」

・視点、一夏へ・

「…なるほど」

シャルルと零斗の教え方は分かりやすい。

他の3人は、擬音、感覚、計算で説明してるから。

「あ、僕は一応、角度を割り出して動いてるけどね」

「…零斗も？」

「うん。一夏には無理だろうけど」

何も言い返せない…どうすれば零斗に勝てるんだ？

「無理だと思うよ、僕、読心術と読唇術出来るから。

あと、千冬さんに教えたの僕」

打ち碎かれた一夏であった。

・視点、通常へ・

「まあまあ、大丈夫だよ」

「一夏の、「白式」って後付装備イコシイザがないんだよね」

「ああ。何回か調べてもらったけど、拡張領域バースロットが空いてないらしい。だから量子変換は無理だって言われた」

「たぶんだけど、それってワンオフ・アビリティーの方に容量を使っているからだよ」

「多分、ではなくほぼ単一仕様能力の方だけだね」

「ワンオフ……」

ボーっとしてきた。なんか嫌な予感するんだよなあ。つと、いけない。意識を戻してつと

「……奴の装備って使えないんじゃないのか？」

「普通は。所有者が使用許諾アンロックすれば、登録者は全員使えるけど」
だが、僕のアサルトライフルは構造が違うから慣れると大変だから貸さないが。

「そういうこと。今一夏と白式に使用許諾を発行したから、ために撃ってみて」

「さて、ここからはシャルルの出番なので、退散つと」
眠いので休みたかった。それだけである。

ゆっくりと戻っていると、そこへ現れたのは……

「おい」

「…なんだよ」

面倒くさいときに入ってくるなあ。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

「嫌だ。理由がねえよ」

「貴様にはなくても私にはある」

繋がった。一夏を叩こうとしたのはそういうわけか。

詳しくは2巻p138を参sy(ry)

「貴様がいなければ教官が大会2連覇の偉業をなしえただろうということは

容易に想像できる。だから、私は貴様を...貴様の存在を認めない」

凄いい事いうんだね。だって一夏が誘拐されなければ、ドイツで教官をすることも無かったと思うけど...

つまり、矛盾しているのだ。彼女に言っても無駄だろうが。軍人って戦闘能力だけがものを言うのか、初耳だ。

と自己解釈を済ませた後、言い争いは収まっていた。脳内補充

そして、何事も無かったようなので、僕はその場を後にした。

Story 018 (後書き)

こんな駄文にお付き合いいただきうれしい限りです。
今後とも、よろしく願います。

「意見・感想・評価などお待ちしております。」

あの後。

「あの〜、長峰君いますか〜？」

山田先生の声。

「いますよ。着替えとかは終わっているので大丈夫です」

「そうですか〜、それじゃあ失礼します〜」

「え〜と、織斑くんには説明したんですが、今月下旬から大浴場が使えるようになります。」

時間別ではなくて、週に2日の使用日を設けることにしました」

「そうですか。有難う御座います」

難なく答える僕。先生は反応が薄いとでも考えているのだろうか

「あ、うれしいので大丈夫ですよ。有難う御座います」

フォローを入れておく。一応ね。

「連絡も終わったので、それじゃあ失礼します」

「分かりました」

風呂…か。

.....

夕食。一夏を誘いに行く。

コンコン

セシリアがノックする。

「一夏さん、いらっしゃいます？夕食を食べていないようですが、体の具合でも悪いのですか？」

「お〜い一夏、夕食食べに行こう」

「早くしなさいよ〜」

とセシリア、僕、鈴の順。

「よ、よみんな！どうした？」

「どうしたって、聞いてなかった？夕食食べようって言ってたんだけど...」

・視点、一夏へ・

コンコン

「「...？」」

これはまずい...

「一夏さん、いらっしゃいます？夕食を食べていないようですが、体の具合でも悪いのですか？」

「お〜い一夏、夕食食べに行こう」

「早くしなさいよ」

「一夏、入るよ?」

「ど、どうしよう」

「と、とりあえず隠れる」

この2人、どう見ても焦っています。

「わ、わかったよ。とりあえず身を潜めて」

「だあつ!何でクローゼットなんだよつ。ベッドベッド!布団の中で大丈夫だ!」

「あ、ああつ、そっか!」

大忙し、というか、冷や汗ものだ。

ガチャッ

ドアが、開けられた

「何してるの、一夏?」

・視点、通常入・

「何してるの、一夏?」

あ、これは明らかに男装がばれたんだな、うん。

「い、いやシャルルがなんだか風邪っぽいって言うから、布団を掛けてやったんだ

それだけだぞ、ははは」

まあ、明らかにばれたんだろうな。
風呂の何かが切れてるのを思い出して、渡そうとしたら大変な状態に……
って事か。

「……。日本では病人の上に覆いかぶさる治療法でもあるのかしら（あつたつけ）？」
二人で攻めるって……卑怯だろ。
仕方ない、フォローしてやるか

「布団を掛けなおしてたら丁度僕たちが来て焦った……ってとこじゃないの？」

「「長峰さん（零斗）がおっしゃるの（言つの）なら……そうかもしれませんね（しれないわね）」

ふう、何とか成功。

「じゃあ2人は先行ってて。僕は2人からどんな病状か聞いてから行くから……」

「分かったわよ、先に言ってるね、零斗」

「分かりました……先に言ってます、一夏さんも必ず来てくださいね」

そういつて2人は去った。もとい、夕食へ言った。

「ねえ、シャルル君、いや、シャルルさん、何があったの？」
僕はシャルルにそう話した……

・視点、一夏へ・

「ねえ、シャルル君、いや、シャルルさん、何があったの？」

零斗はシャルルにそう話した……って言うか、何で分かるの？

シャルルもそう思ったらしいが、しらを切って、

「何のこと？」

と聞いた。

しかし零斗は見抜いていたようだ

「そりゃあ、一夏に男装をばれたことだよ」

しかも、完全に。

「あ、理由は話さなくてもいいよ。大体分かるから。後、一夏からではないよ」

「何で？何で分かったの？」

そう聞くシャルル。誰だってそう思う。

「その1、一夏の裸への表情、というか感情。普通、顔を赤くしないからね。」

その2、一緒に着替えたがらないこと。これは確定要素でなかったけど。

そして最後。体つきが違う。そんなとこ。まあ、上のほうへ言うつもりは無いけどね」

っして、俺の方を向いて

「じゃあ一夏、夕食食べに行こう。早くしないと食べれないよ」

次に、シャルルの方を向いて

「そしてシャルル。一夏が夕食持ってくるって〜」

はい？とりあえず聞いてみよう。零斗に。

「なんで持ってくるの？俺が？」

「うん、だって、僕が気付いてなくても持ってくる気だったろ？」

「そうだけど…」

「ならそれでいいじゃん」

そくだよな、持ってくればいいんじゃない。

・視点、通常へ・

「ならそれでいいじゃん」

こう言い切って、僕は一夏に言った。

「シャルルのためにも、ご飯食べに行こう。というか、先行ってて」

「分かった」

そして、シャルルにこう問う

「一夏に惚れた？」

「え、あ、うん…」

「まあ、アイツを振り向かせるのは大変だけど、がんばってね。」

僕はご飯に行くから」

夕食中、シャルルはどうだったか聞かれたが、

「ただ体調不良だから、大丈夫」

と答えた。

そして夜。

武器のアイデアを考えている僕…

現在、皆さんは就寝中です。基本的には、
さて…どうするか。

実弾系ばかりなのもアレだし…
かといってエネルギー系ばかりにすると制限がかかるし…

ん、シールドエネルギーからの供給じゃ無くて、別系統からの供給だったら？

そうだ、その案で行こう。

新「雷雨」として。

新「雷雨」は作らないため、バススロット拡張領域が結構残った。
だから、実弾や供給用電力バッテリーやら弓矢やらを装備っと。

それでは、「雷雨」早速設計っと…

PM24:00 AM0:00
時がリセットされ、日付が変わった瞬間。

そこに、一つの武器の構想が出来た。

新「雷雨」

荷電家電子砲が犠牲になったが、

この時代の天災天才篠ノ之東さんなら作れるだろうと思ひ、

プラズマ砲を設計。仕組み？東さんに期待。

おそらく、減衰があるので、零距离用…って旧「雷雨」の改良版みたいになつてる…

そして、充電式「雷雨」供給専用バッテリーという物も構想に入る。多分バッテリーを搭載できるのは10個が限界だろう。

あと、充電は勝手にしてくれます。っていうのも、東さんなら作ってくれるだろう。

ちなみに、バッテリー2個で発射するのは1発である。電力を凄く食べるが、誰も気にしない。

東さんに、「雷雨」プロトタイプごと初期装備として入れてもらおう、うん。

そして、就寝。メールを送信してからね。

「おきなさいよ、零斗…」

そんな声で目が覚める僕。もう朝ですAM7:00ね。

「あ、おはよう、鈴」

間違いなんて起こっちゃいませんよ、間違いなく。

「それよりさ、何でアンタ遅くまで起きてたの？」

何故ばれている？っていうか、気付かれてないよね、設計図…

「ん、ちょっと纏める事があったから…」

とっさな言い訳だ。一夏ならこれで十分。

「ふ〜ん…」

まだ怪しまれてる。

「ところで、朝食は取らなくていいの？」

「あっ、忘れてた…！」

どっちらつまく撒いたようだ。

いつものアレを飲み干し、教室へ向かった。

Story 019 (後書き)

楯無さんと同年代のオリ主の物語って言うのも
アリだろうか？

とふと思ったのであった。

(ちなみに書かれるのであれば「自由にどうぞ」)

「ご意見などをお待ちしております！」

Story 020

「そ、それは本当ですよ!?!」

「ウ、ウソついてないでしょうね!?!」

動揺してる。あのうわさだよね、きっと。

「何だ?」

「さあ?」

二人して知らない…って言うかシャルルは気付けるんじゃないか…

「本当だつてば!この噂、学園中で持ちきりなのよ?

月末の学年別トーナメントで優勝か準優勝できれば織斑くんか長峰君と…」

タグ理解…じゃなくて噂の大方は分かった。

って言うか、いつの間に僕も付加させられてるの?

…そこへ、空気を読まない質問が

「俺と零斗がどうしたって?」

一夏、分からないからって聞いちゃ駄目だよ…

「「「きゃああっ!?!」」」

驚く女子も女子だ。

「で、何の話だったんだ？」

一夏…

「う、うん？ そうだったけ？」

「さ、さあ、どうだったかしら？」

2人とも、焦りすぎ。まあ面白いからいいけど。

「じゃ、じゃああたし自分のクラスに戻るから！」

「そ、そうですね！ わたくしも自分の席につきませんと」

2人とも、焦り（ry

おそらく筈からすれば何でこのようなことにな…となっていたことでしょう。

…とある休み時間

千冬さんと話しているところ、丁度ラウラが現れた。

「教官は何故こんなところで教師など！」

「はあ〜」

珍しく重なるため息。勿論、千冬さんと僕の。

「コーチは何故この様な所で生徒など！」

「「やれやれ……」
あ、また重なった。」

皆さんには説明していませんが、ドイツにいったこともあります。
千冬さんの手伝い、主に軍隊での模擬戦、だったが。

・視点、一夏へ・

「教官は何故こんなところで教師など！」

「「はあ」」「

はい？曲がり角の先から声が聞こえた。いるのは千冬姉、零斗、そ
してラウラだ。

「コーチは何故このような所で生徒など！」

はいい？っていうか零斗ってコーチだったの？

「「やれやれ……」」

二人とも、お疲れのようで。

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」
「上に同じ」

「こんな極東の地で何の役目があるというのですか！」
こんなに声を荒げているのは千冬姉、零斗の現在の立場への不満、
思いの丈を
ぶつけているようだった。

「お願いです、教官、コーチ。我がドイツで再びご指導を。此処では貴方方の能力の半分も生かされません」

「ほう」「へえ」

「大体、この学園の生徒など教官が教えるに足る人間ではありません。ん。」

「コーチは、このような場で教えるを受ける人間ではありません」

「何故だ？」「どうして？」

「意識が甘く、危機感に疎く、ISをファッションか何かと勘違いしている。」

「そのような程度の低いものたちに教官とコーチが時間を割かれるなど……」

「「そこまでしておけよ、小娘（ラウラ）」」

「っ……！！」

凄みのある千冬姉の声。というか、零斗ってあんな雰囲気だった？流石のラウラも、凄味にすくんだらしい。言葉は途切れたまま、続きは出てこない。

「「少し見ない間に偉くなったな。15歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」」

「わ、私は……」

その声が震えているのが此処からでも分かる。恐怖と威圧感、なのだろう。

圧倒的な力の前に感じる恐怖と、かけがえのない相手に嫌われるという恐怖が

千冬姉に向いている。

プレッシャー

零斗に対しては、重圧を感じているようだ。

というか、威圧感でプレッシャーって…

「さて、授業が始まるな。さっさと教室に戻れよ」

「遅れない様にね」

声色を戻した二人。というか、零斗はなんだったの…？

「さて、一夏、盗み聞きという名の異常性癖を持っていたとは知らなかったよ」

「な、何でそうなるんだよ、零斗！」

「まあ、長峰の言うとおりだな」

「ああっ、千冬ね……………」

バツシーーーーン!!!!

・視点、通常へ・

バツシーーーーン!!!!

一夏、ご愁傷様。といわんばかりに合掌を試みる。

「学校では織斑先生と呼べ」

「は、はい…」

一夏、乙。

「そら、走れ劣等性。このままじゃお前は月末のトーナメントで初戦敗退だぞ。勤勉さを忘れるな」

「分かってるって…え、零斗は？」

「僕は、先生の手伝いだから…」

事実だ。うん、事実だ。

「じゃあ、教室に先に戻ってるぞ、零斗」

「了解」

「ああ、織斑」

「はい？」

どうしたんだろう、千冬さん。

「廊下は走るな…とは言わん。ばれないように走れ」

先生がそれ言っちゃ駄目なんじゃ…

……そして、時は過ぎ、放課後。

「「あ」「

2人そろって抜けた声を出す。

練習するみたいなので尾行したが、気付かれていないようだ。

スネ クから教えてもらったスニーキングスキルが…ってそんなわけない。きつと。

「奇遇ね。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど…」

「奇遇ですわね。わたくしもまったく同じですわ」

目指すは優勝、ですか。ありもしない噂に振り回されるのも大変そうだ。

しかし、この2人がその後災難に見舞われるのを、誰が予想したか。だが、今の段階では、誰も知らない事である。そう、ラウラ以外は…

「「!?!?」「

2人は緊急回避。これは…まずい。

左腕の部分と「時雨」のみを展開し、いそいで向かう。

間に合ってくれ!

- 視点、一夏へ -

「一夏、今日も放課後特訓するよね?」

「ああ、勿論だ。今日使えるのは、ええと…」

「第3アリーナだ」

「わあっ!?!」

シャルルと歩いていたら突然、予想外の声が飛び込んできたので驚いた。

「…そんなに驚くほどのことか。失礼だぞ」

「お、おう、すまん」

「ごめんなさい。いきなりなことではびつくりしちゃって…」

「あ、いや、別に責めてる訳ではないが…」

折り目正しくぺこぺこ頭を下げるシャルル。冪もその氣勢をそがれる。

「ともかく、だ。第3アリーナへ行くぞ。今日は使用人数が少ないと聞いている。

空間が当ていれば模擬戦も出来るだろう」

それは非常に助かる。なんだかんだでISの実力は稼働時間に正比例するのだから、

わずかな時間でも実戦同様の訓練を行えるのはありがたい。

しかし、なんだかあわただしい。

どうやら騒ぎは第3アリーナで起こっているようだ。

「何だ?」

「何があったのかな?こつちで先に様子を見て行く?」

シャルルは観客席のゲートを指差す。

「誰かが模擬戦をしているみたいだね。でもそれにしても様子が
.....」

そのとき。

ドゴオオン！

爆発音が響く。

「零斗！鈴！セシリア！」

しかし3人には聞こえない。

(詳しくは2巻p195を参s(ry))

そう、それは左腕と太刀を展開した零斗が切った弾が爆発した音だった。

零斗の体はボロボロ。だが、彼は迫り来る実弾を次々に斬っていた。

そう、それが必然であるかのように。

「何故邪魔をするんですか！コーチ！」

「一夏に恨みがあったって、この2人は何もしていない。
それでも攻撃するのかわ？」

「...」

「さて、さっさと終わりにしよう。かかって来いよ、ラウラ。」

そういう零斗は、ボロボロながらも、すさまじい威圧感を放つ。

「う、うわあああああああ!!」

そういつて攻撃を仕掛けるラウラ。

その瞬間、

ひそかに零斗が笑った。いや、微笑んだ。

ガギンッ!!

・視点、通常へ・

「計算通り」

「…やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「お待ちしておりました。千ふ…織斑先生」

ふう、正直言つて左腕と「時雨」だけでよく耐えたな、うん。

「模擬戦をやるのは構わん。

…が、アリーナのバリアーまで破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。

この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそう仰るのなら」

「僕は依存はありません」

そう答えた。

「オルコット、鳳、お前たちもそれでいいか？」

「え、ええ……」

どうやら惚けていたようだ。

「教師には、「はい」と答える」

「はい」

「わたくしもそれで構いません」

「では、学年別トーナメントまで一切の私闘を禁ずる。解散！」

その声を聞いたとたん、僕は、緊張の糸が切れたように意識が途絶えていった……

Story 020 (後書き)

長々とすいません。

まあ、バランスを考えるとそうになりました。

貴重なご意見等お待ちしております。

Story 021 (前書き)

評価人数が1人って：orz
となっておりますが気にしないでください。

Story 021

僕は起きた。勿論言う事は…

「知らない天井だ」

これに限る…？

「ネタがいえるまで回復したか」と千冬さん。

「いえいえ、ただ集中を切らしただけです。ご心配なく」

「そうか…なら、学年別トーナメントは出場できるな」

「ええ」

「私は失礼する。授業があるのでな。今日はゆっくり休め」

「はい」

眠い…寝よう。うん、寝よう。

・視点、一夏へ・

あれから、零斗は突然倒れた。

「「「「「「「零斗」コーチ」！」「」「」「」

みんな驚いている。だって、ぜんぜん平気そうだった奴が、倒れたんだから。

あのラウラも心配している。

そして、一番辛そうな、鈴。
泣き崩れている。

零斗は病院……IS学園内だが……に搬送され、手当てを受けていたが、医師からは
「過労によるものなので、大丈夫でしょう」と返ってきた。

俺らは戻り、授業を受けることになったが、案の定上の空。過労といったって、みんな心配に思っているらしい。

そして、放課後。

千冬姉から、零斗の意識が戻った、と聞き、みんなで零斗のところへ。

そして、零斗と会う。

コンコン

・視点、通常へ・

少し前に目を覚ました僕。気絶からではなく、眠りからの。

コンコン、とノックの音だ。

「どうぞ」と軽く返事をし、入ってくる人たちを迎える。

ドアが開いて次の瞬間、

鈴が飛び込んできた。

「会いたかったよ…グスツ…零斗」

鈴は泣きじゃくっている。心配掛けたんだなと、痛感しつつ、

「ごめんな鈴、心配掛けて」

鈴を優しく抱きしめ、頭を撫でる。

・視点、一夏たちへ・

鈴を優しく抱きしめ、頭を撫でる零斗。

しかしこのとき、残りの女子3人はこう思っていた。

「「「（一夏は朴念仁むかしらなのに、零斗はちゃんと分かっているなあ

「「「

これを世間では嫉妬というのである。というか、心配をしましょう、皆さん。

ぜったい誰かがそう思いそうな状況の中、

3人は羨ましさを2人に向けていた。当の一夏は何で妙なところは鈍感なのだろうか。

神は不公平である。

・視点、通常へ・

「もう大丈夫か、鈴？」

「あ、ありがとう…／／／」

そして皆さんへ。

「すみません、お見苦しいところをお見せしまして…」
で、用件は？

「……え」と、大丈夫？」「……」

「うん、平気だよ。そろそろ部屋に戻らないとね」

「……！？」」「……」

「ただの過労だから、大丈夫。」

いや、そんなに唾然としなくてもいいんじゃない…

「さ、戻ろう…って、どうしたの、鈴？」

「ア…アタシと学年別トーナメント…く、組みなさいよ」
ソレナンテツンデレ？

「いいよ…ていうか、そんなに跳ねなくていいから」

「で、他にある？」

無い様だったので、部屋に戻る。

…夕食後

「ね、ねえ零斗」

なんか動揺してる。理由は知らないが。

「どうしたの、動揺して」

「え〜とね、その… / / /」

「何？」

この後の鈴の行動が、引き金になる。

唇を重ねてきた。が、重ねるだけではない、大人のキスだ。

というわけで、このあとは、「検閲により削除」となりました。

脳内補完^{妄想}で埋めてください。

… 翌日、朝。

どうしてこうなった

状況を整理中…

なんかとある一線を越えた気がする。まあ気がするでは済まされな
いが。

今日が休日でもよかった。うん、休日でもよかった。

鈴、落ち着こうよ、とりあえず。

「れ、零斗」

「ん？何？」

「ア、アタシなんかでもよかったの？」

なんか期待されてる気がする。というか、期待されてる。

「むしろ鈴じゃないと駄目、かな」

「あ、ありがとう／＼／」

「どういたしまして。じゃあ、朝食行こうか」

「うんっ！」

時は過ぎ、朝食中。

「あら、鈴さんはどうしてそんな上機嫌で？」
「ん、なんかまずい気がする、というか、絶対に。」

僕は、朝食中は皆との会話の時間だ。
だって、ウーダーだもん。朝食。

「秘密」

まずいよね、気がするどころか絶対。

「長峰さん、何かありましたか？」

「い、いえ、なにも」

やばい、冷や汗が出てきた…

「そんなことないだろ」

What? ナンデイチカガソコデツツコムノ…

「鈴にきいて」

ごめん、鈴、君を犠牲にした気がする。

「「「「ねえ鈴、何があったの?」「「「「

此処は、もう防ぎようがない! 鈴、説明を頼む!

「へ? あの…その…//」

皆、というか一夏たち、目線が怖い。教えると言わんばかりに…
鈴もその視線がわかったかのように、

「わ、分かったわよ…じゃあ言うから」

そして僕、どさくさに紛れて逃走…しようとしたら、とめられた。

「一線を…ね 後は分かるでしょっ／＼／」

「「「「「「「「「「「」

沈黙、というか、その後、セシリアたちの目が燃え上がってるし…何を言ったんだろう？

……そして、大変だった1日とその翌日は過ぎてゆくのだ
った。

Story 021 (後書き)

R15より上に上げたくない作者の最終防衛ライン…
それが、「検閲により削除」という奥の手です。

シリアス回です。後まずい回です。

誰得？というのは禁則事項です。

アクセス数が謎なんだよな。

何故5500行くんだろう？しかも週間で。

Story 022 (前書き)

3巻に突入したいですが…

まだ2巻の途中ですね、はい。

そして時は過ぎ、6月末。

おそらく、有りもしないうわさに振り回されてる奴らは、女子優勝しようと頑張っているのだろう。

多分、一夏だと『買い物に付き合っぜ』って、オチだけど。

「3年にはスカウト、2年には1年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね……」

眠い、実に眠い。

何故かって？それは勿論、

【学年別トーナメント】の当日だから。

一夏はラウラとの対戦が気になるようだが、誰も気…いや、シャルルは気にしてるか。

そして、今。

トーナメントの組み合わせが決定したようだ。

ちなみに、僕はAブロック1回戦第1試合。作戦を練る時間が短くて大変だった。

対する組み合わせは…

布仏・谷本ペア

である。原作で言えば、「モブなのに名前があった人たち」といえるだろう。

まあ、本気を出さなくても勝てるよね、うん。

Aブロック1回戦第1試合、開始。

そして、結果はすぐというか2分弱、でついた。

勿論、勝ち。

2人は、

「「なんで長峰君（れいれい）は手加減してくれないの（しないの）」」

だそうで。というか、れいれいって、何かの霊みたいじゃないか…

Aブロック、1回戦。第2試合。

世の中には信じられない偶然があります。

織斑・デユノアペアvsボーデヴィツヒ・篠ノ之ペア

なんという偶然？仕組まれたよね、きつと。

まあ、結果は本人たち次第だし、情報収集に専念しよう、うん。

ラウラはアクティブ・イナードナル・キヤンセラを使った巧みな戦い方をしているが、協力しようとしていない。

「自分だけで勝てる」とでも思っているんだろうな。

一夏たちは一見、協力していないようにも見えなくはないが、
籌を倒した後に合流：と考えるのが妥当だろう。

2回戦は、対一夏達、を想定した方がいいだろう。

よし、ちょっと休憩寝しよう

・ ・ ・ ・ ・ 暫くは皆さんご存知の通りに進んでゆきます ・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・

「ああああああっ！」

跳ね起きた。というか、寝てる描写が多い…

何が起こっている？

暫くぼうつとしていた脳をフル稼働させると、1つの答えが浮かぶ。

僕は立ち上がり、急いで千冬さんのところへ向かう ・ ・ ・ ・ ・

着いた。

「織斑先生。失礼します」

「何だ？邪魔に来たのか？長峰」

「いえ、ヴァルキリー・トレースVTシステムの件で」

「！？…まあ入れ」

「分かりました」

さて、あれをどう説明するか…

「とりあえず説明しますが、まずあれは天才東さんが作ったものではありません」

「何故そう言い切れる、長峰」

「はい、天才は束さんこのような不完全なものは作らないでしょう。おそらく電話を掛けても、完全なものしか作らない、とか何とかいわれるだけでしょう。」

「そうか…じゃあ誰が？」

「そのようなこと、僕に聞かれても分からない、としか言いようがないですね。」

まあ、今は一夏達が抑えるのを信じて待っているだけです。

あ、ブラックのコーヒーいただけます？」

「しょうがない奴だな…」

「どうも。じゃあ、頂きます」

飲んでいる間に、決着はついたようだ。

「では、問題も解決したようなので、失礼します」

- 視点、ラウラへ -

「一つ忠告しておくぞ。あいつに会うことがあれば、心を強く持て。あれは未熟者の癖にどうしてか、妙に女を刺激するのだ。油断していると惚れてしまつぞ?」

「いや、貴方もその一人でしょう?」
とコーチ。

うれしそうな教官、楽しそうに笑うコーチに、私はただ嫉妬していただけだった。
だが、その当時は気付けなかった。だから、あんなことを聞いてしまった。

「教官も弟に惚れているのですか?」

「姉が弟に惚れるものか、馬鹿者め」

「そうそう、そんな近親s…ゴホンゴホン、そんなことはないですよ」

楽しそうに笑う教官と、コーチ。

教官たちをこんな顔をさせるその男が…羨ましい。

そして、出会って分かった。戦って、理解した。

強さとは…何なのか。その答えは無数にあるだろう。けれど、その答えの1つに、強烈に出会ってしまった。

『強さつーのは心の在り処。己の拠り所。

自分がどうありたいかを常におもつことじゃあないかと、俺は思つ』
…そう、なのか?

『そりゃそーだろ。自分がどうしたいかも分からねー奴は、強い弱い以前に歩き方を知らないもんだろ』
…歩き、方…。

『どこに向かうか。どうして向かうか、さ』
…どうして向かうか…。

『つまり、やりたいことはやったもん勝ち。つまんねー遠慮とか我慢とか、損するぞ？』

そして、そいつは…その男は…ニヤリとしていった。

『やりたい様にやらなきゃ、人生じゃねーよ』

…では、お前は…？ お前は何故強くあろうとする…？ どうして強い？

『強くねえよ。俺は、まったく、強くねえ』

断言。その言葉に私はぼかんとする。

あれほどまでの力をもってなお、強くないという。それが理解できない。

『けれど、もし俺が強いつて言うのなら、それは…』
…それは…？

『強くなりたいたから、強いしさ』

…

『それに、強くなつたらやってみたいことがあるんだよ』
…やってみたいこと…？

『誰かを守ってみたい。自分の全てを使って、ただ誰かのために戦

つてみたい』

・・・それは、まるで…あの人たちのようだ。

『そうだな。だから、お前も守ってやるよ。ラウラ・ボーデヴィッ
ト』

いわれて、私の胸は初めての衝撃に強く揺さぶられる。

『守ってやるよ』

そう言われて、私は・・・ああ、そうか。これが…そうなのか。

ときめいて、しまったのだ。

そして、早鐘を打つ心臓が言っている。こいつの前では、私はただの15歳なのだと。
ただの『女』なのだと。

そこで、コーチの言った言葉が、蘇って来る・・・

「あ、そうそう、ラウラ」

「何ですか？」

「アイツに惚れたら、いろいろ大変だからな」

その言葉の意味を私はまだ理解できない。

・・・が、織斑、一夏。

ああ、これは、たしかに。

惚れてしまいそうだ。

・視点、通常入・

「う、あ」

どつやらラウラが目を覚ましたようだ。

「気がついたか」

と声をかける千冬さん。

「私…は…?」

「全身に無理がかかったことで筋肉疲労と打撲がある。暫くは動けないだろう。無理をするな」

「何が…起きたのですか…?」

「そこは、僕が説明するよ、千冬さん。誘導に乗ってくれなかったからね。」

そしてラウラの方向を向き、

「重要事項、機密事項だから口外はしないでね。VTシステム。聞いたことある?」

「はい…。正式名称はヴァルキリー・トレース・システム…。過去の
のモンド・グロツソの
ヴァルキリー
部門受賞者の動きを複製するシステムで…確かあれは…」

「その通り。IS条約で現在どの国家・組織・企業においても
研究・開発・使用のすべてが禁止になっている。それがラウラのI
Sに積まれてた」

「…」

「巧妙に隠されてたけど。操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、
そして操縦者の意思、
いや願望がそろつと発動するようになっていたみたいだ。

今学園がドイツに問い合わせているらしい。
そのうち、委員会からの強制調査が入るだろうけど」

「私が…望んだからですか？」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

突然千冬さんの声、驚いた。

「は、はい！」

「お前は誰だ？」

「わ、私は…。私…は、…」

しょうがない、助けてやるか。

「誰でもないのだったら、ラウラ・ボーデヴィツヒになればいいん

じゃない？」

「長峰の言うとおりだ。お前はこれからラウラ・ボーデヴィットになるがいい。

何、時間は山のようにあるぞ。何せ3年間はこの学園に在籍しなければいけないからな。

その後も、まあ死ぬまで時間はある。たっぷり悩めよ、小娘」

「あ…」

千冬さん殻出てきた言葉に驚いているのだろう。

励ましの言葉。返し方に困っているラウラ。

「ああ、それから」

ん？何を言っただろう。

「お前は私にはなれないぞ。アイツの姉は、こつ見えて心労が絶えないのさ」

「じゃあ、僕も失礼するよ」

そういって部屋を出て行った。

鈴に追いかけられたのは言っまでもない。

Story 022 (後書き)

あとがきの内容がない。

きつと、Section3は次の話で最後でしょう。

Story 023 (前書き)

50000文字、100000PV、ユニーク10000突破。

『トーナメントとは事故により中止となりました。

ただし、今後の個人データ指標と関係するため、すべての1回戦は行います。

場所と日時の変更は各自個人端末で確認の上……』

誰かがテレビを消す。僕、一夏、シャルルで少し遅めの夕食を摂取していた。

「やっぱり、というか必然的に中止になったか……」

「そうだねえ。あ、一夏、七味とって」

「はいよ」

「ありがとう」

「仲が良いね、お2人さん」

そういったのは僕だ。勿論、なんとなくの揺さぶりだが。

ちなみに今までは事情聴取。生憎だが、僕は聴取する側、だった。

…織斑先生と。

釈放、もとい開放されたのが一夏達と一緒にだったから食堂終了ギリギリだった。

そして、先ほどのトーナメント中止という連絡。

「…優勝…チャンス…消え…」

「交際…無効」

「…うわあああんっ！」

数十名が去る。よほどあのうわさが事実だと思っていたのだろう。

「ご愁傷様。合掌。」

「どうしたの、零斗？」

シャルルが話しかけてくる。

ありのままに話そう。うん、それがいい。

「実は、優勝か準優勝すれば僕が一夏と付き合える、

ってことになっていたらいいんだよ。根も葉もない噂話だけだね」

「そうなんだ…あははは…」

シャルルの苦笑い。

そんな噂話ありもしないに付き合わされる方も付き合わされる方だけだね。

呆然と立ち尽くしている2名の女子。篝と鈴だ。一夏曰く、

『どちらも幼馴染』という厄介なところ。ボクシヨウ

ひとまず篝の元に移動する一夏に続いて、鈴の所へ。

「ねえ鈴」

「なに？」

「今更だけど付き合っよ」

「そ、そう／＼／」

鈴は去っていった。

一方、一夏のほうを見ると、

「付き合ってもいいぞ」

「……。……、何？」

「だから、付き合ってもいいって……おわっ!？」

「ほ、ほ、本当か？本当に、本当に、本当なのだな!？」

「お、おう」

「な、何故だ？理由を聞こうではないか」

「そりゃ幼馴染の頼みだからな。付き合っせ」

「そ、そうか！」

「買い物くらい」

「一夏は地雷を踏んだ。間違いなく。」

「……………だろっつと……」

「お、おうっ？」

さようなら、一夏。天罰が下るようだ。

「そんなことだろうと思ったわ！」

どげしっ！！！！！

「グハッ！」

わざとの様なゲームで見そうな呻き声。まだ篝の怒りは収まらない。

「ふん！」

ドゴオオオ！

見事に一夏につま先が直撃。帰らぬ人と…はならなかった。

「一夏つてわざとやってるんじゃないかと思うときがあるよね」

「それが一夏だからね」

「な、なに？どういう意味だ？シャルル、零斗」

「さあね」

「一回死んだ方がいいんじゃないの？」

決まった。

というわけで復活したのは原作の倍のきっかり30分後だった。言葉がよほど効いたのだろうか？

「なあ零斗、そういえばちょっと聞きたいんだが」

「何？」

「ISで会話って出来るのか？プライベート・チャンネルとは違う、2人だけの空間って」

「あるよ。クロッシング・アクセス相互意識干渉って言って、操縦者同士の波長が合うとそうなるとか。」

「おお、多分それだ。しかし、波長ねえ…。なんか良く分からんって感じだな」

「面倒だから僕と東さんは調べないけどね」

「東さんらしいって言えば東さんらしいけどな…」

そこへ、シャルが、口を挟む。

「…一夏、二人だけの空間で会話って、もしかしてボーデヴィッヒさん？」

「ああ、そうだが」

なんだよこいつ。殴りたい…

「ふうん。そう」

ほら、拗ねちゃったじゃん…

なんかスイッチが入った。うん、入った。

「ねえ一夏、1回、いや5回ぐらい殴らせて」

ソノアト、イチカノヒメイガキコエタトカ。

「殴ってから言うのもなんだけど、もう少し人の気持ちを尊重しようよ」

「あ、織斑さんにデユノア君、それから長峰君。ここにいましたか。さっきはお疲れ様でした。」

「山田先生こそ。ずっと書記で疲れませんでしたか？」

「いえいえ、私は昔からああいっただ地味な活動がすきなんです。心配には及びませんよ。なにせ先生ですから」

胸を張る先生。一夏は目のやり場に困ったとばかりに顔を背ける。僕？ちゃんと顔を見ていたので大丈夫。問題ない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「一夏のスケベ」

シャルルの眩きが、決まった！

効果は抜群のようだ。

「な、なにっ？ちょっと待てシャルル、それは誤解だ！」

「ふん、どうだか」

「そうそう。正直に認めなよ。一夏」

「零斗も誤解だあー」
そういう叫びは無視が一番。

「で、山田先生。用件は……」

「は、はい！朗報です。なんとですね！ついについて今日から男子の大浴場使用が解禁です！」

「おお！そんなんですか！？てつきり来月からになるものとはかり

「それがですねー。今日は大浴場のボイラー点検があったので、もともと生徒達が使えない日なんです。

でも点検自体はもう終わったので、それなら男子の3人に使ってもらおうって言う計らいなんですよ」

眠いからシャワーだけで寝よう。僕は。

「夏とシャルル
”2人”には入ってもらおうけど。」

「すみませんが山田先生。僕はよほどの疲労はないのでシャワーで済ませていただきます。

2人は入った方がいいと思いますけど」

「そんなんですか？じゃあ2人に使ってもらいましょう！」

仲間を売ったな、という目で見てくる一夏。

「一夏、君達の方が疲れていそうだから、ゆっくりはいつてなよ」

やんわりと、シャルルと入れ、と一夏に言った僕。

「とうわけで、2人を大浴場への案内よろしくお願いします、山田先生。」

あ、一夏とシャルル。先に帰ってる」

・・・その後、大浴場で何があったのかは、一夏とシャルルを除いて、誰も知らない・・・

・・・翌日・・・

シャルルの姿、なし。

「み、みなさんおはようございます...」

山田先生、お疲れ様です。

「織斑くん、何を考えているかは分かりませんが、

私を子ども扱いしようとしているのは分かりますよ。先生、怒りません。はあ……」

「一夏はどうして心が読まれるんだろうか？」

「今日は、ですね……皆さんに転校生を紹介します。」

「転校生といいますが、もう紹介が済んでいるといいますが、ええと……」

「この時期に転校生って……3組に入れましょうよ、先生。1組に戦力が集中しているんだから……」

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

「なんだ、そういうことか。」

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしく願います」

「みんなはともかく、一夏が驚く必要ってないよね、絶対。」

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。ということですが……また寮の部屋割りを組み立てなおす作業が始まります……」

「山田先生、お疲れ様です。」

「え？デュノア君って女……？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「って織斑君、同室だから知らないって事は……」
「ちよつと待って！昨日って確か、男子が大浴場を使ったわよね！」
「？」

不味い、非常に不味い。

教室のドアが開いた。勢いよく。

「零斗おっ!!！」

やっぱり。

「あ、言っておくけど昨日風呂入ってないよ。
2人は入ったみたいだけど」

「じゃあ一夏は……」

「多分シャルロットと一緒に風呂に入ってたよ」

爆弾、投下

「一夏あっ!!！」

「死ね!!！」

龍砲、発射。

さよならなら、一夏。いままで楽しかったよ。
が、しかし

一夏は死んでいなかったのである。

何故って、ラウラがAICでとめたから。

「あれ、一夏が死んでないや」

「零斗、勝手に殺すな！」

…ラウラ、助かったぜ、サンキョ。…ていつかお前のESも直ったのか？すげえな」

「コアは無事だったからな。予備パーツで組みなおした」

「へーそうなん……むぐっ!?!?」

おそらく、この瞬間、教室は凍りついただろう。

間違いなく、

ラウラと一夏がキスをしているから。

「お、お前は私の嫁にする！決定事項だ！異論は認めん！」

「よ、嫁？婿じゃなくて？」

「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしと聞いた。

故に、お前を私の嫁にする」

僕には教えた奴に心当たりがある。

おい、何を教えているんだクラリツサ。

4人の人が、爆発しそうだ。

誰かは、考えればすぐに思いつくだろう。

僕、箒、セシリア、シャルロットだ。

僕は朴念仁に呆れて制裁を加えるだけである。

後の3人は、直接的な恨みだろう。

その理由？だって…

そりゃ好きな人が目の前でキスをしてたらキレるだろう。

その思いを知っている奴も。

このとき、僕は《霧雨》を、箒は日本刀を、セシリアは《スターライトmk?》を、

シャルロットはISを展開していた。

日本刀は、展開ではなく取り出した、の方が合っているだろうが。

「さて、恨みは無いが3人ほど可哀想な友達がいるからね。死んでもらおう」

「はい！？ 待て、俺は悪くない！どちらかというと被害者サイドだ！」

「そう言う奴に限って加害者側なんだよ、一夏。諦めようね」

そっぴいながら他の生徒に当たらないように弓をぶっ放す。

一夏は後ろ側から逃げようとするが、鼻先をレーザーが掠める。

「あらら、一夏さん？どこかにおでかけですか？わたくし、実はどうしてもお話しなくてはならないことがあります。ええ、突然ですが急を要しますの。おほほほ…」

BTを展開するセシリア。それに気付き窓側へ逃げる一夏。
残念ながら、そこは箒の立ち位置だ。
僕はISを装着。ひっそりプラズマ砲となった新《雷雨》を展開し、
窓際へと向かう。

「…一夏、貴様どういつつもりか説明してもらおうか」
箒のすさまじい剣幕。

「待て待て待て！説明を求めたいのは俺のほうで……おわあっ！」

日本刀を振り下ろす箒。よくやった！

そして、避けようと後ろに下がる。

そこに、僕とシャルロットは待機していた。

ぼすっ！と2つの武器があたる音がした。

「ほへ？」

「……………」

「にこっ」

とシャルロットの笑み。天使の笑みとはこのことだ。一夏も、
「に、にこっ」と返す。

「僕は呆れたよ、一夏…。朴念仁にもほどがある」
「零斗、お前まで!？」

「一夏って他の女の子の前でキスしちゃうんだね。僕、びっくりしたな」

「あのー…シャルロット？俺はされたんであって、したわけではないし、

そして何故2人ともISを起動しているのか」

「なんでだろうね」

「多分お星様になれば分かるよ。きっと」

シャルロットは『ラビエ下・スイッチ高速切替』は不要らしい。

左腕の盾が分離され、『グレー・スケール灰色の鱗殻』、通称、『シールド・ピアース盾殺し』が姿を現した。

一方の僕は雷雨はもう展開済みな為、問題ない。バッテリー接続完了。

発射準備開始。

「あは、ははは…」

笑うことしか出来なくなってしまった一夏。

バチッ！バチバチッ！と静電気のような音が響く。

- 出力20%までのチャージ完了。発射可能 -

「一夏。今まで楽しかったよ。だから20%の出力にしておいてあげよう」

最大の1/5だから、大丈夫だろう。

バチイイイイイイイイ!!

ドガアアアアアアアアアア!!

その日のHRは轟音と爆音、そして放電音と、
さらに絶え間ない衝撃で文字通りクラスが揺れたとか。

Story 023 (後書き)

歯科医で治療を受けた今日この頃。

麻酔が1時間ぐらいで切れると言われたけど
3時間位して麻酔が切れた今日この頃。

3組って本当に可哀想だよな。

誰か文才をください。

P.S

7巻買ったら小説別の書こう…

期待しないで待っていてください。

あ、もちろんこの小説と両立させますよ。

Story 024 (前書き)

第3巻ですね、分かります。

と、自分で書いてみる今日の頃。

Story 024

現在、24時間形式で4時。

一夏は寝ている。鈴が引越し、一夏が来たからだ。

が、気にせずにパソコンをいじる。

カタカタカタカタ・・・・・・・・・・

ひたすらキーボードを叩く音と、2つの寝息が聞こえる。

2つ？

恐る恐る一夏の布団を開けてみると……

そう、そこに、ラウラがいたのだ。

「・・・・・・・・・・」

そっだ、箒に

「一夏は昨日お楽しみだったみたいだよ」

とでも言っつてやろう。きつと驚くだろうが。

君は、少しばかり天罰を受けた方がいいんだ、一夏。

しょうがないからランニングでも行くか。

一夏がおきて、どんな状況だったのかはお察しください。

ランニングを終え、寮に戻ってきたところで偶然筭と会う。
実にラッキーだ。

「あ、おはよう、箒」

「ああ」

「あのさあ」

「何だ、零斗？」

「昨日一夏はお楽しみだったらしいよ」

というわけで今回も爆弾を投下。

「箒、確認に行ってみたら？」

「ああ、そうする」

どうやら箒はスイッチが入ったようだ。

というわけで一夏には天罰が下った。

というわけで時は過ぎ...

一夏たちが遅い。予鈴はもう鳴った。

今日は織斑先生のSHR。ショート・ホーム・ルーム

遅刻すると下手をすれば死亡フラグがついてくるといつ恐ろしい状態。

「到着っ！」

間に合ったのか。残念だ。

「おう、ご苦勞なことだ」

一夏、君は不幸だね。

「本学園はISの操縦者育成育成のために設立された育成機関だ。そのためこの国にも属さない。がしかし……」

「パァン！！」

出席簿 悲鳴
と兵器の音が響き渡る。

「敷地内でも許可されていないIS展開は禁止されている。意味は分かるな？」

「は、はい……。すみません」

そして箒とラウラは見事に逃げ切り、着席。

ISを使わなければきつとこんなことにはならなかったのに。

「デュノアと織斑は……」

千冬さんを怒らせたらどうしようもない。

そのことを僕は再認識した。

キーンコーンカーンコーン

本鈴が鳴る。

「今日は通常授業だったな。IS学園生とはいえお前達も扱いは高校生だ。」

赤点など取ってくれるなよ」

此処は一応高校。だからテストはある。とはいっても、期末のみだが。だから赤点を取ると補修が確定する。僕は赤点を取らない自信があるので問題は無いが。

「それと、来週始まる校外特別実習期間だが、全員忘れ物などするなよ。」

3日間だが、学園を離れることになる。自由時間では羽目はずし過ぎないように」

7月の校外実習、つまりは臨海学校だ。

僕と鈴は用意を済ませてしまったため、買い物に行くことはない。つまり、暇。何をしようか。

「では本日のショート・ホーム・ルームを終わる。各人、今日もしっかり勉強に励めよ」

「あの、織斑先生。今日は山田先生はお休みですか？」
そういったのは鷹月さん。モブで名前がついている人の1人だ。

「山田先生は校外実習の現地視察に行ってるので今日は不在だ。なので山田先生の仕事は私が今日1日代わりに担当する」

山田先生への様々な声。それを沈めたのは、

「あー、いちいち騒ぐな。鬱陶しい。山田先生は仕事で行ってるんだ。遊びではない」

ハイイ、とそろった返事を返す。1組女子。チームワークがすごい。

……時刻は経過し、放課後……

暇なため教室掃除をしている2人のところへ行く。
そこで、驚きの声か！！

「付き合ってくれ！」

What is this?

そこに入ってきたのは一夏の告白(?)だった。

「……え？」

シャルルも驚いたようだ。

だって、あの朴念仁との呼び声高い一夏が言ってるのだから。
驚かない奴は基本いない。

気付かれないように自室に戻る。そして、東さんに連絡。

「あ、もしもし、東さん。例のアレを2つ、用意してもらえる？」

その電話を聞いたものは誰もいないのであった。

……

『おー、よく晴れたなあ』

週末の日曜。天気、快晴。

そこでは……夢を砕かれたシャルルとそれに気付いてもなぜだかわからない一夏。

ちなみに『内は盗聴器で聞いた会話だ……って何を話しているのだ

ろうか？

そして尾行は5人。

ちなみに僕は気付かれない変装をしている。

そして単独行動で尾行している。

一夏の制服に発信機と盗聴器を入れたから問題なし。

他の4人は普通に周囲から避けられるように尾行している。
というか、絶対気付かれるでしょ。

『…僕は夢が砕け散る音を聞いたよ…』

一夏、やっぱり君は1回死んだ方がいいね。

『どうした、シャル？今日はやっぱり具合が悪かったのか？
何故そうなる？よく考えようよ。』

『シャル、あのー』

アレ？いつの間に愛称になったの？

『一夏』

『お、おうっ。』

『乙女の純情をもてあそぶ奴は馬に蹴られて死ぬと良いよ』

『そうだな、そんな奴は死んでしまえばいい』

君だよ、一夏。

『鏡を見なよ』

ごもつとぞ。

『はあ…。どうせ、どうせね…。買い物に付き合ってくれ、だと思っ
たよ。』

ああっん、先月もなんか似たような事言ってたもんね、一夏…。はあぁ〜…」
なんか聞いてるこっちまで可哀想になってきた。

『いや、その、悪い。でもアレだぞ、そんなに無理しなくても良いぞ？』

なんだっいたら帰って休んでも良いから、体のことを第一に考えてくれ』
こうなってるのは一夏、君のせいだ。

『え、えーと、お礼に駅前の専門店でパフェをおごる』
あ、どうしようもない言い訳に転じた。

『パフェだけ？』
着眼点はそこですか？

『ケーキもつけよう。ドリンクも』
一夏、ヒトノキモチモカンガエヨウヨ

『ん、あと、はい』
シャルロットは手を差し出した。なるほど、体調不良のふりをしてそうするのか。

『手をつないでくれたら良いよ』
予想通り。

『ああ、なんだ、そんなことか。ほい』
おそらく今、尾行部隊の4人中3人が怒り、いや嫉妬を覚えたことでしょう。

『大丈夫か？』

『ひゃあっ！？な、な、なにがっ！？』

シャルロットが顔を赤くしたのは君のせいだよ、一夏。

『いや、シャルが。やっぱり帰って休むか？』

『う、ううんっ！いいっ、平気っ、大丈夫っ！い、行こっ！』

さらに嫉妬を増した尾行部隊。さて、どうなることやら。

Story 024 (後書き)

なんかタイトルと本文があわなくなってきた（脱線傾向）なので、
改題に至らせていただきました。

尾行中。逃げるのでもなくハンターでもなく探偵風なヤツ。

ちなみに潜伏モード、変装で追いかける。

位置情報偽装装置を束さんに借りたので、ばれる心配はなし。

『えーと、水着売り場は此処だな』

おそらくシャルロットは気付いているだろう。

尾行部隊の4人に。

潜伏モードにしてあつたら、逆に気付かれるよね。

『ところでシャルも水着買うのか？』

『そ、そうだね…あの、一夏はさ、その…僕の水着姿、見たい？』

『そうだなあ。折角だし泳ごうぜ。俺も海は久し振りだからさ。結構楽しみなんだよ』

残念、シャルル。一夏はアタックには気付かない。というか、一夏は気付くのだろうか？

『そ、そうなんだ。じゃ、じゃあ、折角だし新しい水着買おうかな』

『じゃあ、男と女は売り場が違うし、いったん此処で別れるか』

一夏の方へ付いて行くしかないな。

といたいだが、ばれる可能性を考慮して、過ぎ去る。

まあ発信機もあるだろうから、後から追いかけるのも可能だし。

『えーと、どうかしたか？』

『あっ、ううん、なんでもないよ』

『そっか。じゃあ、とりあえず30分後にまた此処で』
『うん、わかった』

そんな会話が聞こえてくる中、突然、

「零斗、どうした？」

「はい？」

誰かの声。振り返ってみると、そこには…

千冬さんがいた。

「どうしたんだ、そんな格好で？」

「実は、買い物しようと思ったんですけど、静かに買い物がしたかったので、

気付かれないように…といっても、千冬さんにはばれましたけどね」

「そうか。で、何を買って来るんだ？」

「マウスです。壊れてしまったので、買い替えに来たんです」

「そうか。じゃあ早く行って来い」

「分かりました」

ちなみにマウスを買うと言うのは本当だ。

難なく(?)回避しビクカ ラへと向かう。

その途中、こんな会話が聞こえたのは言うまでもない。

『ごめんね一夏。やな思いさせちゃって』

『ん?別にいいって。それよりかばってくれてサンキューな。助かった』

『そんなの当然だよ。じゃあ、えっと、水着見てくれるかな?』

『おう』

突然走り出したような音。現在位置確認をすると…

更衣室の中にいた。と言う訳で、怒られるのは確定しただろう。

『ほ、ほら、水着って実際に着てみないとわかんないし、ね?』
なんてヤツだ。

『す、すぐ着替えるから待っててっ』
いや、待っててっ外で待たせようよ。

『えーと、それなら1回外に……』
『ダ、ダメ!』

What? それでも恋心に気付けない一夏って…
頭を抱えたくなる。

『だ、大丈夫。時間はかからないから』
大丈夫じゃないです。問題大有りです。

『おわあっ!?!?』
もう何も言いたくない。

『あー…シヤ、シヤル?』

『な、なに?』

『えーと…』

.....

『ん…』

もうヤダ.....

『い、いっせよ…』

『お、おう…』

何この沈黙…

『あ、あの一応もう一つもあって…』

『い、いや！それが似合うんじゃないか！？うん、それがいいぞ、シャル！』

焦るなよ、一夏。

『じゃ、じゃあこれにするねっ』

『お、おう。それじゃあ俺は出てるから』

『え？』

『えっ？』

『ええっ！』

どうやら先生達と遭遇したようだ。一夏の悪運は尽きたようだ。

丁度ビ クカ ラに到着。

よし、これでマウスが買える！

- - - - -

マウスを無事購入。マ クロ フトのZJA - 00017だ。
知りたい人は検索。

また会話を聞いてみる。^{盗聴し}

先生と遭遇したはずだし、何も言いたくない様な状況にはならない
だろう。

『……教育的にもダメです』
そりゃあ先生だって困りますよね。

『す、すみません……』

『所で山田先生と千冬ね……織斑先生はどうしてここに？』
『私達も水着を買いに着たんですよ。あ、それと今は職務中ではないので、』

無理に先生って呼ばなくても大丈夫ですよ』

さて、そろそろ買い物から帰るようにして合流するか。
後ちよつとだし。

『そろそろ出てきた方が良くんじゃないか？』
あれ、ばれてた？

『そ、そろそろ出て行こうかと思ってたのよ』
『え、ええ。タイミングを計っていたのですわ』
とか何とか。あ、僕のことじゃなくて良かった。
でもばれる可能性も考慮して普通に帰ろう。それがいいね、うん。

『何をこそそしているのかと思って、ずっと気になっていたんだ
がな』

『女子には男子に知られたくない買い物があんの！』

『そ、そうですね！まったく、』

一夏さんのデリカシーの無さにはいつも呆れてしまいますわね』
朴念仁振りにもでしょうが。

『さっさと買い物済ませて退散するでしょう』
思いつきり正論を述べる千冬さん。

『あ、あー。私ちょっと買い忘れがあったのでいってきます。えーと、場所が

分らないので鳳さんとオルコットさん、付いてきて下さい。それにデュノアさんも』

はあ、そろそろ帰るか。

- - - - -

そして、時は流れるように進んでいく。

1日、2日、3日と...

そして、今日。

臨海学校の幕があけたのであった。

しかし、そのとき起こり得る事は、誰にも予想は出来ない。

Story 025 (後書き)

Google Chromeがフリーズして一回書き直した25話。

何を思ったのか最初は弾が出てくる話だった…
って言うもとの25話。

位置情報偽装装置は捏造です。あしからず。

文才が欲しいですな。

Story 026 (前書き)

ご都合主義なので注意…といっても最初だけですが、
それではどうぞ

車のMTって…なんか良いよね。

みんなはバスの中。僕は車の中。ちなみに運転している。
免許を貰いましたから。

日本政府に頼んだらちゃんと講習を受ければOKの様なので講習を
受け取得したものだ。

問題は無いだろう…免許があるから。

と言う訳で乗っているのはト タとスバ での開発をしていたFT
- 86である。

さて、先に行きますか！

明らかに切符を切られる速度で走行^{100km/h}。

.....

…飛ばしすぎました。はい。

9時ですね、分かります。とは言えない。
さて、みんなが来るまで何をしてようか.....(TT)

まだまだこの苦悩は続く…

.....
- 視点、一夏へ -

丁度バスが止まる。
車も止まっていた。

すっかり暗くなっている零斗もいた。

- 視点、通常へ -

ようやくバスが来たようだ。
大人しく、バスの後ろにつけばよかったかもしれない。

「早すぎだ、馬鹿者」

「お陰ですつと待つのも疲れましたよ」

それはおまえのせいだ、と千冬さんが言った後
「早く並べ」

といわれた。切り替えが早い人っていいなあ。

「それでは、此処が今日からお世話になる花月荘だ。
全員、従業員の仕事を増やさないよう注意しろ」

「.....よろしく願いしまーす.....」

そういった後、一夏に話しかけられた。

「なあ零斗、バスに乗ってなかったけどどうやってきたんだ？」

「一夏、途中すごい速さで追い抜いて行くスポーツカーがあったでしょ？」

「それできたんだ」

「はあ？」

「まあ心配しないで良いよ。ちゃんと帰れるんだから」

「そうか……」

「……片方はしっかりしていますが、もう片方は感じがるだけですよ。」

挨拶しろ、馬鹿者」

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

「長峰零斗です。これから3日間、ご迷惑をお掛けする事があるでしょうが、

よろしくお願いします」

「うふふ、ご丁寧にも。清洲景子です」

「不出来の弟でご迷惑をおかけします」

よし、僕は不出来じゃないのだな。

「あらあら。織斑先生ったら、弟さんにはずいぶん厳しいんですね」

「もう1人とは違って、いつも手を焼かされてますので」
「夏が思いつめたような顔をする。まあそこは頑張って欲しいところだ。」

「それじゃあ皆さん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で
着替えられるようになってますから、そちらをご利用なさってくださいな。」

「場所が分からなければいつでも従業員に訊いてくださいまし」
自由時間だが、部屋ってどこになるんだろうか？

「織斑、長峰、お前らの部屋はこっちだ。付いて来い」

「えーっと、織斑先生。俺の部屋ってどこになるんでしょうか？」

「黙って付いて来い」

あはは…千冬さん恐るべし！

「織斑は此処、長峰は此処の隣だ」

「此処って…」

「織斑先生、女子が押しかけられるを防ぐため、ですか？」

「そうだ。私と同室、又は隣だと、おいそれとは近づかないだろう」

「さて、後は出来ない弟さんに説明すれば終わりのようなので、
お先に行かせて貰います」

「わかった」

と言つ訳で一夏を置き去りにし海へと行くつ。

と思つたがウサミミを発見してしまった。

どうすべきか迷うよね、そりゃあ。

しかもご丁寧に「ひっばってください」と。

「どうしたのだ、零斗？」

「これって、抜かない方が良いよね……」

「知らん、私に聞くな。関係ない」

さいですか。

丁度一夏も来たようだ。

「なあ、これって……」

「知らん、私に聞くな。関係ない」

「一夏、先に行ってるね……」

と言つ訳で此処も回避。

と言つ訳で一夏を置きs)ry

.....

「れ、い、と~~~~~っ!」
いきなり叫ばれました。何故に？

「泳ぐわよ」
え、イキナリソレデスカ？

水着については原作と同じなので割愛

「鈴、準備運動は一応した方がよいよ。溺れても何も言えないよ」
「あたしが溺れた事なんて無いわよ。きつと前世は人魚ね、たぶん
さいですか。っていうか、どんどん思考が暗くなってゆく…
朝の出来事が発端だったんだろう、うん。」

「そついえばさあ、零斗だけ別のところにいたよね、何で？」
いま、精神が終わりそつになりました。orz

「とりあえず、自分の車で来た」

「へえ〜。帰り、あたしも乗せてってよ!」

「先生の許可が取れたらね」
そついつてる途中に、鈴がしゅるりと僕の体を駆け上がり肩車とな
った。

「おー、高い高い。遠くまで良く見えて良いわ」
苦笑、苦笑、苦笑。

「何故僕に乗った？というか、何をしてるの、僕たち」

「ん〜、移動監視塔」

「じっじっして…」

「そりゃそうでしょ。あたし、ライフセーバーの資格持ってないし」

「じゃあ違うんじゃないの？」

「でも、溺れてる子がいたら助けるけどね」

微笑。やばい、最近思考がネガティブになってきてる…

「とりあえず、泳がない？誘ったのは鈴だし」

突然鈴が走り出す。何事だろうか？

「じゃあ零斗、向こうのブイまで競争ね。負けたら駅前の

『@クルーズ』でパフェおごんなさいよ。・・・よい、どん」

あ、卑怯だ

「ずるいよ、鈴」

「あははっ、ぼーっとしてるのが悪いのよ…」

完全に虚を突かれた。

@クルーズのパフェは1500〜からという値段なので負けられない。

必死の形相で途中まで追いかけた。

が、鈴がない。

辺りを見回すと、鈴が溺れそうになってるところを見つけた。

「鈴！」

急いで潜り、鈴を助け出す。

「…零、斗…」

まだ息があるのを確認し、急いで近くの海岸へ向かった。

S t o r y 0 2 6 (後書き)

文才が欲しい。ただそれだけです。

Story 027 (前書き)

昨日は投稿できませんでした、はい。

(宿題やっていたなんて、言えない！ 26話が昨日投稿予定だったなんて、言えない！)

お気に入りが100件突破しました。はい。

それではすたーとです！

「鈴、大丈夫!？」

「ごほっ!だ…大丈夫」

鈴はどうやら大丈夫だった様だ。

「準備運動しないからそうなるんだよ…」

「……………」

鈴の返事が無い。ただの……というと絶対怒るので言わない。

とりあえず、海岸に着く。

「一応休もうか?どうせなら僕も一緒に休むけど…」

「う…うん／＼」

と言うわけで、鈴と旅館へ戻る。

「休みに来たけど…何する?」

「じゃ、じゃあ…」

……………

『検閲により削除』と言うか寝て過ごしたのであった。注、添い

寝です。

一瞬本能が勝りそうになったが、なんとか理性は保てました。

- - - - -

と言うわけで7時。夕食となりました。

ちなみに僕も寝ていたらしい。

正座なんて暫くしてなかったから、テーブル席だZ E

何故か此処での食事中は浴衣着用らしい。

どうでも良いけど。

とりあえず、何故こんな高級料理があるのか？

税金で賄われてる、と言われるのが普通だろう。

このようなところに使われて良いものなのだろうか？

ちなみに、鈴は正座しているのでいない。

そんな時、相川さんが叫ぶ。

「ああああーっ！！セシリアずるい！！」と。

続けて他の人も抗議する。

どうやら一夏がセシリアに食べさせたらしい。

テーブル席の人の目線が怖いです。はい。

そんな時、救済があった。

「お前達は静かに食事することが出来んのか」

みんなが驚愕とする中で、僕だけは黙々と食べ続けていた。

「どうにも、体力が有り余ってるようだな。良からう。」

それでは今から砂浜ランニングしてこい。距離は…：そうだな。50 kmもあれば十分だろう」

どうやら救済ではなかった様だ。

何故かセシリアが喜んでいたが大丈夫だろう。

露天風呂から上がる。

大分優遇だが、税金のことを考えると悲しくなるのである。

一夏と会話をしながら部屋まで行く。

「ああ一夏、もう寝るね」

「ああ…って早くないか？」

「眠いから」

「そうか。お休み」

「ああ」

そして部屋に入る。

まあ設備が設備なので、1人で使うのはもったいないと思うが、税金nry

さて、寝よう

.....

どうしてこうなった。

状況を整理しよう。

就寝

隣が騒々しい

目が覚める

隣の部屋に行く

マッサージをしている一夏

皆さんの正座 今此処

e t c .

「飲ん」

「あれ、みんな何してるの？」

僕の言葉がさえぎる。

「寝てたのか、長峰」

「はい。眠かったもので。それと缶コーヒー頂けますか？」

「あ、ああ……」

そういつて千冬さんは缶コーヒーを僕に渡す。

「ありがとうございます。で、みんなに飲ませたのは口止め料ですか」

「ああ」

「じゃあ暇だから座談会でも見えますよ」

「」

「おっと……その前にもう一本缶コーヒー買ってきます」

そういつて僕は去る。

さてと…コーヒーコーヒーっと

後はおつまみでも買っていくか。

と言いたい所だが、大事な用事を忘れていた。うん、忘れていた。

というわけで、ちょっと出かけよう。

.....

いざ、友人の結婚式へ！

詳しくは『IS〜インフィニット・ストラトス〜 不屈の翼』を参照に。

.....

と言つわけで平行世界へ飛んでいけました。

と言つわけで帰ってきました。

暴走してしまっただが。

.....

「ふうー、疲れた。平行世界パラレルワールドでもみんな変わりなかつたなあ」

とりあえず鉄拳制裁を食らってしまった頭が痛い。

とりあえず、もう寝よう。

そう思いながら、僕は瞳を閉じた。

Story 027 (後書き)

クオリティが沈んでいますね。

ぜひ、『ISS〜インフィニット・ストラトス〜 不屈の翼』
の方も見ていってくださいね。

結婚式 『幸せにしてくれよ』 by太陽の方に出張しています。

翌日。

頭がまだ痛い誰も気にしない。今日は各種装備試験運用やら何やらで忙しい。

「早く行くか」

僕はそう言った後、集合場所へ向かった。

.....

「ようやく全員集まったか。おい、遅刻者」

「はっ、はいっ!」

いつもは遅れないラウラが、珍しく遅刻した。

「ISのコア・ネットワークについて説明してみる」

「は、はい。ISのコアは相互情報交換のためのデータ通信ネットワークを持っていきます。」

これは元々広大な宇宙空間における相互位置情報交換のために設けられたもので、

現在はオープン・チャンネル、プライベート・チャンネルによる縦者会話など、

通信に使われています。それ以外にも、『シエアリンク非限定情報共有』をコア同士が

各自で行うことで、様々な情報を自己進化の糧として吸収している

ことが近年の研究で
分かりました。これらは製作者の篠ノ之東が自己発達の一環として
無制限発展を
許可したため、現在も進化の途中であり、全容はつかめていないと
のことです」

「流石に優秀だな。遅刻の件はこれで許してやるう」

「さて、それでは…

早速僕は思考と言う名の深い海にもぐりこんだ。

「(さて…武器はどうすれば良いだろうか?)」

パアアアアン!

「痛った〜!!!」

「お前が自分の世界に浸ってるのが悪い。さっさと用意しろ」

「はい」

みんなは驚いている。何故なら、いつもは叩かれそうになっても喰
らっていないかった

僕が、出席簿を喰らっていたから。

「ちーちゃんとねーく〜〜〜〜〜ん!!!」

はぁ、と溜息をつき、頭を抱える。

と言っか、やっぱり居たんだ。

「「…束（さん）」

嫌な予感がするから、用意しておくか。

「やあやあ、会いたかったよ。まずはちーちゃん！さあハグハグしよう！愛を…ぶっへっ！」

千冬さんの容赦なきアイアンクロー。後ろからは僕がISの腕部と『地雨』を展開し、

束さんの背後に突きつけていた。

「「うるさいぞ（うるさいよ）、束（さん）」

「ぐぬ…相変わらずのアイアンクローと展開速度だねっ」

だが前のアイアンクローと背後から突きつける銃から抜け出す束さんもただ者ではない。

「やあ！」

僕がISを解除している内に束さんは筭の方へ向かったようだ。

「…どうも」

「えへへ、久し振りだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。おつきくなつたねえ。

筭ちゃん。特におっぱいが」

がぁん！

「殴りますよ」

「な、殴ってから言ったあ…。しかも、日本刀の鞘で叩いた！ひどい！篝ちゃんひどい！」

「まあ良いじゃないですか。突撃銃アサルトライフルで撃たれるよりはずいぶん良いんじゃないですか？」

「それもそうだけど、れーくんは撃たないでしょ？」

見破られてたか。しょうがないか。

「あ、あの、この合宿では関係者以外……」

「んん？珍妙奇天烈なこというね。ISの関係者と言うのなら、1番はこの私を置いて他にいないよ？」

「えっ、あつ、はい。そ、そうですね…」

これだから大変なんだ。対処法：放置がもっとも効率がいい。

「おい束。自己紹介ぐらいしろ。うちの生徒達が困っている」

「えー、めんどくさいなあ。私が天才の束さんだよ、はろー。終わり」

自称天才だが本物の天才。天才は本当に奇人でした。

「はあ…。もう少ししまともに来れんのか、お前は。そら1年、手が

とまってるぞ。

こいつの事は無視してテストを続ける」

「こいつとはひどいなあ、らぶりい東さんと呼んで良いよ。ねーくんも」

「うるさい(ので)、黙れ(黙ってもらえます?)」

今日は千冬さんと良くハモる。

「えっと…あの、この場合はどうしたら…」

「ああ、こいつはさっきもいったように無視してかまわない。

山田先生は各班のサポートをお願いします」

「わ、わかりました」

「むむ…ちーちゃんが優しい…。東さんは激しくじらしい。

このおっぱい魔人め、たぶらかしたなあ」

駄目だこりゃ。千冬さんのほうを向くと、呆れた様子で立っている。

そして、東さんのほうはジェラシーがどうでも良くなってるし。

「東さん。いい加減にしないと怒りますよ。用件があるんでしょう？早くしないと、もしかしたら見つかったらつかっちゃうかもしれないよ？」

「ああ、そうだった」

「篝ちゃん。頼まれていたものは用意済みだよ！さあ、大空をこら

んあれ！」

ドオオオオオン！！

「「「！？」」」

「じゃじゃーん！これぞ篝ちゃん専用機こと『赤椿』！
全スペックが現行ISを上回る束さんお手製ISだよ！」

「じゃあ束さん、フィッティングなどの手伝いはしますから、さっさと始めましょう」

「そうだね。さあ！篝ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズを始めようか！」

私とれーくんが補佐するからすぐに終わるよん！」

「で、僕はどれくらい手伝えば？」

「50%ぐらいでたのむよ、れーくん！」

「了解。じゃあ篝、始めるよ」

「あ、ああ。頼む」

「始めよう、れーくん！」

「じゃあ束さんが先に開始してください。後から始めますので」

「篝ちゃんのデータはある程度先行して置いてあるから、後は最新データに更新するだけだね。さ、ピ、ポ、パ」

「じゃあ僕はそれ以外の場所を担当しよう」

「……………すごい……………」

それもそのはず。東さんでさえ6枚のディスプレイで動かしているが、僕は倍の12枚。

しかも、1つ1つがコンマ5秒ほどで切り替わっているためだ。

何も聞こえない、そのような錯覚が僕を襲う。

ふと、COMPLETEと画面に浮かぶ。

「終わりました。で、後はありますか、東さん？」

「超早いね。さすがれーくと私」

「そんなことはありませんよ」

そんな時。

「あの専用機つて篠ノ之さんがもらえるの…？身内ってだけで」
「だよねえ。なんかずるいよねえ」

おっと、そんなことが。

「あ、みなさん。身内贖買は世の常ですからね。世界は平等じゃないんだよ」

女子は気まずそうに戻ってゆく。

実に面白い。

「後は任せておけばパーソナライズも終わるから、放っついていいと思いますよ、東さん」

「そうだね。あ、いっくんとれーくん。白式と五月雨見せて。東さんは興味津々なのだよ」

じゃあ、展開するのでしょうか。

「データ見せてね。うりゃー」

白式と五月雨にコードを刺す東さん。

空中にまた現れた画面^{ディスプレイ}をみて、東さんが言う。

「ん〜…白式は不思議なフラグメントマップを構築してるね。そして五月雨は複雑なフラグメントマップを構築してるね。なんだろう？

どっちも見たことも無いパターン。いっくんとれーくんが男の子だからかなあ？」

「そのことに関してなんですが、どうして男の俺がISを使えるんですか？」

そういったのは一夏だ。そして、東さんはこう返す。

「ん？んー…どうしてだろうね。わたしにもさっぱりぱりだよ。

ナノ単位まで分解すれば分かるだろうけど」

恐ろしい返答である。そして一夏はこう返した。

「良い訳無いでしょ…」

ごもつともだ。

「にやはは、そう言うと思ったよん。んー、まあわかんないならわかんないでいいけどねー。そもそもISって自己進化するようにつくつたし、

こういうこともあるよ。あっはっはー」

残念、一夏。根本的な解決にはならなかったようだ。

「じゃあ東さん、1つ質問します。白式に後付装備が無いのは何故ですか？」

「それは、私がそう設定したからだよん」

「あ、もういいです。機密事項とか言いそうなので」

「えー、もつと詳しく話したかったのに…」

「機密事項をバラそうとするな」

パアアン！

近接武器
コンティンション
今日も出席簿の様子は絶好調のようだ。

Story 028 (後書き)

ラウラの説明が長い…今までで一番疲れた気がしなくも無い。

新小説が現実的に無理な気がする今日この頃

この小説に専念しようと思った今日この頃

おそらく、福音戦はオリジナルISが出てくるでしょう。

Story 029 (前書き)

28話からは、おおよそ3日ほど、最大1週間間隔で更新してまいります。

簪がどストライクだったぜ…

「いたた。は、ちーちゃんの愛情表現は今も昔も過激だね」
「やかましい」

もう1回来た短距離用武器ショートレンジとも取れる出席簿による攻撃。

そして、かわいそうなことに東さんに話しかけてしまった女子がいるようだ。

名前はまだ…じゃなくてセシリア。

「あ、あのっ！篠ノ之博士のご高名はかねがね承っておりますっ。もしよろしければ私のISを見て頂けないでしょうか!？」

「はあ？誰だよ君は。金髪は私の知り合いにはいないんだよ。そもそも今は篝ちゃんとかれーくんとちーちゃんといっくんと数年ぶりの再開なんだよ？
そういうシーンなんだよ。どういっつ見で君はしゃしゃり出て来るのか理解不能だよ。
っつて言うか誰だよ君は」

残念、セシリア。東さんはこういう人です。

「え、あの…」
「うるさいなあ。あっちいきなよ」
「っ…」

セシリアの心は確実に折れたのであった。
きつと、多分、殆どの可能性で。

「ふー、変な金髪だった。外国人は凶々しいから嫌いだよ。やっぱり日本人だよな。」

日本人。でも、日本人でもどうでもいいんだけどね。

箒ちゃんとかれーくんとちーちゃんといっくん、あと、あの子以外は」

「!?!」

「そうそうれーくん。あの子がそろそろISS学園に行くから、よろしく」

あいつが来るのか?...

まずいですね、はい。

K W S k ? そんなのは言いたくない...

「それは置いていて、いっくんさー、白式改造してあげようか?」

ただいま放心中の為、返せません。

「え。えーと、どんな改造ですか?」

ただいま放心中の為、k (r y

「うむ。執事の格好になる、ってどうかな? いっくんには前から燕尾服が似合うと思っていたんだよ。あるいはメイド服」

ただいま放心中のた m (r y

「いいです」

ただいま放sh(ry)

「いいです！おお、許可が下りたよ！じゃあ早速……」

ただいま(ry)

「だあつ！わざと意味を間違えないでください！ノーです。ノー！ノーサンキュー！」

t(ry)もう略しすぎだった。(

「む！私はノーザンライツだ！」

復活。と言うかノーだけしか共通点の無い返し方しちゃ駄目でしょ。

「じゃあ、じゃあ！いっくんが女の子の姿になるってどうかな？」

「何なんですか、それ！」

一夏と珍しく同じことを思っていたようだ……

女装案を適用すると化 語の神 駿河とかに似ていたりするとか。その 原さん、一瞬だけ一夏と同じ趣味じゃないか、と思ったよ。(by作者の友人)

ん、何か変な電波を受信したよ。気のせい……と思いたい。

とか脳内で電波を受信しているうちに話は進んでいたようだ。

「……レベル・A、現時刻より対策をはじめられたし……」

「そ、それが、その、ハワイ沖で試験稼動していた……」

「しつ。機密事項を口にするな。生徒達に聞こえる」

聞こえてますよ。

「織斑先生、それに山田先生」

「何だ、長峰？」

「何ですか、長峰君？」

「此処からは手話で」

(で、僕たちに銀の福音シルバリオ・ユゴスベルともう1機の青銅の鎖ブロンズ・チェーンを迎撃しろと)

(何故それを知っている?)

(……)

千冬さんは表面上、平然としているが、驚いているようだ。

山田先生は驚いて言葉が何も出ない状況のようだ。

(簡単ですよ。内部にも僕の関係者はいるので、情報提供を……とい
いたいところですが、

ハッキングで情報を掴みました)

(ほっ……)

(ここは教員は特殊任務行動へと移行。IS学園生徒は安全確保の
ため旅館への避難。

専用機持ちは迎撃へと向かうことでいいんじゃないですか?)

(でも生徒がこの事を指示するのって…)

山田先生はこのようなことでいいのか、と思っているらしい。

(だが山田君。この指示は尤も的確だ。従おう)

(じゃあ山田先生は他の先生に伝達を、織斑先生は此処の生徒へ伝達を)

(分かった)

(分かりました…)

実際、まだ山田先生は動揺しているようだ。

ちなみに()内は完全に暗号化された手話だ。無論、教員と僕しか知らない…筈である。

「じゃあ、私、他の先生に連絡してきますのでっ」

「了解………全員、注目！」

「現時刻よりIS学園教員と長峰は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼動は中止。
各班、ISを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自自室待機すること。以上だ！」

え…特殊任務行動って、僕も入ってるんですか!?

「当たり前だ、長峰。作戦を組み立ててもらおう」

.....
僕の参戦は？

「してもらうが、どちらかに単体でアプローチ、だな」

.....
さいですか。

「中止？何で？それと特殊任務行動って……」

「状況がぜんぜんわかんないんだけど」

「とつとと戻れ！以後、許可無く室外に出た生徒は我々で身柄を拘束する！いいな！！」

「……はっ、はいつ……！！」「……」

「専用機持ちは全員集合しろ、織斑、長峰、オルコット、デュノア、ポードヴィツヒ、鳳！」

「……それと、篠ノ之も来い」

「はい！」

返事したのは篤だ。

……ちよつと不味いよね。もし作戦に抜擢したら一番危険だ。慎重に決めないとな。

.....

「じゃあ、現状を説明したいと思う」

とりあえずほぼ僕担当らしい。指示は千冬さんが決めるようだが。

「2時間前、ハワイ沖で試験稼動にあったアメリカ・イスラエル共同開発の

第3世代、軍用IS、シルバリオ・ゴスヘル『銀の福音』通称福音と、ブロンズ・チエーン『青銅の鎖』通称青銅が

制御化を離れて暴走。監視空域より離脱したと連絡が入った」

「……………」

一夏を除いて全員が真剣な表情で望んでいる。一夏、もうちょいし
っかりしようよ。

「その後に、衛星での追跡の結果、

福音は青銅を抱えた状態で2km先の空域を通過することが判明。
時間で約50分。学園上層部からの通達によって、

僕たちがこの非常事態に対応することになった。

で、教員は訓練機を使用して空域、海域の封鎖を行っている。

なので、専用機持ちで作戦の要、福音と青銅の迎撃を行う」

一夏、僕たちでとめるんだよ。

「と言うわけで、作戦会議を実施する。意見のある人は拳手をして」

「はい」

「セシリア、何ですか？」

「目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「了解。ただ、これは両国の最重要機密。口外はしない事。情報の漏洩が発覚した場合、僕たちには査問委員会による裁判、最低でも2年間の監視がつけられる」

「福音は広域殲滅を目的とした特殊射撃形…わたくしのISと同じく、全距離攻撃がオールレンジ行えるようですね」

「攻撃と機動の両方に特化した機体ね。厄介だわ。しかも、スペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから、向こうの方が有利…」

「一方の青銅は近接武器で連続攻撃の短期決戦形…厄介だね」

「攻撃、防御に特化した機体だな。そして、このデータではどちらも格闘性能は未知数だ。

持っているスキルも分からん。偵察は行えないのですか？」

「無理。青銅も福音に抱えられている状況なので超音速飛行と同じ。最高速度は計算して叩き出しても420km/h。アプローチは1回だけ。

それより多くは無理。ただし、福音と青銅を引き離したら話は別だけど」

「福音に関しては1回きりのチャンス…と言うことはやはり、一撃必殺の攻撃力を持った

機体であたるしかありませんね」

と山田先生。

「……」
全員が一夏の方を向く。

「……へ？」
当の本人は素っ頓狂な声を上げている。

「一夏。零落白夜がこのメンバーの中では最高出力だ。僕のプラズマ砲も高威力だが、チャージに時間がかかり、有効距離が限りなく短く、ゼロレンジ零距離じゃ無いと通用しない。だから、一夏しか今のところはいない」

「え？俺が行くの？」

「……当然」

「一夏。これは実戦であって、訓練じゃない。降りたいのなら、無理強いはいしない」

「やるよ、零斗。織斑先生。やって見せます！」

「じゃあ、具体的な作戦内容に移動する。この中で、最高速度を出せるのは僕だが、航続距離が2kmと短い。だから、僕を抜きで最高速度を出せるのは？」

「それなら、わたくしのブルー・ティアーズが。丁度イギリスから強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られてきていますし、超高感度ハイパーセンサーもついています」

「で、超音速下での戦闘訓練時間は？」

「20時間です」

「よし、適任だ…と言いたい所だけど、東さん、何か別の案があるんでしょ？」

「……………!？」

僕と千冬さんを除くすべての人が驚く。当然の反応だ。

「そのとーりー！」

そういつて現れたのは、予想が付くが篠ノ之束だった。

Story 029 (後書き)

皆様にアンケートをとりたいたっている作者。

その1

とりあえず新キャラは機体名とか多分決定しているでしょう。だが名字は決めたが名前が決まっていない。

と言っわけで、名前を募集いたします。

あ、勿論女子名ですよ。

その2

更識姉妹、どう加えていこうか？

簪は作者がドストライクだったためオリ主フラグにしよう。うん。ということに。

それで楯無さんの方はどうするか？

- 1 . 簪同様にオリ主フラグで行こう。
- 2 . いや、一夏の方へ…
- 3 . その他

3 の場合はどのような展開がいいか、をお願いします。

期限は4巻突入直前の話が終わってから3時間が締め切りです。

ご協力、お願い致します。

Story 030 (前書き)

アンケート実施中…

その1

新キャラの名前。名字は決定済み。

あ、勿論女子名ですよ。日本人でも外人でもかまいません。

その2

更識楯無さんのフラグはどうするか？

- 1 ・オリ主フラグで行こう。
- 2 ・一夏がフラグを…
- 3 ・その他

3の場合はどのような展開がいいか、をお願いします。

ちなみに、現在の集計結果(その2のみの集計)

- | | |
|---|----|
| 1 | 1票 |
| 2 | 1票 |
| 3 | 0票 |

となっております。ご協力、お願い致します。

「…山田先生、室外への強制退去を」

「えっ！？は、はいっ！あの、篠ノ之博士、とりあえず降りてきてください」

「とっっ」

て言うか今思うと一夏の周辺の間違って人間離れた技しか持っていないよね。

「ちーちゃん、れーくんの言う通りもっといいい作戦がナウ・プリンディング！」

「…とりあえず出て行け」

そして、東さんは予想できた気がする衝撃の言葉を口にした。

「聞いて聞いて！此処は断・然！赤椿の出番なんだよ！」

「何？」

なんだか面倒になってきた。

しかも福音撃墜組は浮かれている幕と一夏で確定になりそうだ。どうしようもないよね、うん。

．．．．．原作通りに進めたいから

そう感慨に耽っていると、話は進んでいたようだ。

「．．．．．倍プッシュだ」

おいこら何をした東さん。

「それと…れーくんのISは第4世代試作機なのだ」

「「「「はい？」「「「「」

「この様子だと、まだアレは見せてないんだ？」

「まあ…使う場面も無いので」

「そうかそうか。東さんはこの期待がフルに使ってもらえなくて残念なのだよ、れーくん」

「その内使うときが来るでしょうけどね…でも、

．．．．．まだ使うべきでない

「

その言葉が、他の全員に重くのしかかる。

おや、電波を受信中…何々？

(7巻風に、1度やってみただけだよ！)

ゴホンゴホン、無かったことにしよう。

その静寂が、千冬さんと僕によって掻き消される。

「「やりすぎるな」

この時ばかりは、どうしようも無い。

「そういえば、海で暴走とい言つのは、『白騎士事件』を思い出すよね」

東さん、そのことを此処で言つなよ。

どうやら千冬さんも、困惑した表情のようだ。

………詳しくは、原作を！orアニメを！

と言つわけだ。

眠い…と言う訳で寝よう、うん。

ZZZ…と気持ちよい眠りにつける…はずは無い。

新型兵器
情報端末によって起こされた。

「作戦参謀が寝てどうする、馬鹿者が」

「そ…ですね」

いいも風に返したらまた叩かれたのは余談だ。

「大丈夫です。白式の運搬役を赤椿に指定。セシリアは高速戦闘を一夏に指導。」

ちなみに赤椿の調整は東さんのみで7分、僕が加入すれば丁度半分。
ブルー・ティアーズ
青い雲のパッケージは量子変換インストールされていなければ僕が補助して15分、つて所

です。で、セシリア、量子変換インストールは済んでいますか？」

「それは…まだですが…」

じゃあ決定。

「と言う訳で、さっきの案で行く。もう一体の『青銅』は、僕が単機撃墜に向かう。以上！」

「はい？」

…さいですか。

「単機撃墜の件は私から長峰に頼んだ」

「でも、1人じゃ危険です！だから私を…」

そういったのは鈴。協力を申し出たのは嬉しいが…

「長峰はそれに見合う技量を持つ。だから頼んだ。いいな？」

恐ろしい。視線は大分ダメージを与えたようだ。

そして単機撃墜の方が気を使わなくて済みそうだから僕もそのほうが都合がいい。

「はい…」

鈴は引き下がった。

「よし。では本作戦は織斑・篠ノ之の両名による福音の追跡および撃墜、

長峰による青銅の単機撃墜を目的とする。作戦開始は30分後。全員、直ちに準備にかかれ」

「手が空いている人は運搬など無理の無い程度に手伝いを。作戦要員はISの調整。もたもたしないでね」

さて、僕も準備に入るか。

「東さん」

「なんだいれーくん？」

「アレを使うときのようですね」

「おー、れーくん。やっと分かったか。使わないとこの子が可哀想だからね」

「出来る範囲は、使わないで行きます」

「……………そうかい」

「でも、その内使うことになると思うので、いずれは使います」

「おー、れーくん。その意気だ！」

絶対に他の人には分からない会話だろう。そもそも、アレのことを教えていないし。

束さんと話したり期待の調整をしたりしているうちに、30分が経過した。

「こい、白式」

「行くぞ、赤椿」

「降り注げ、五月雨」

やばいじえい。よく考えたら僕だけ中二病設定じゃないか。

だが、そのような事は言えない。言ったら千冬さんに叩かれるのがお決まりだ。

「現在 11:30 より作戦を決行する！」

何時もよりたくましく聞こえる千冬さんの声が聞こえた。

Story 030 (後書き)

この小説、どこに向かっているのだろうか？

……の……フラグ、脳内では構築が完了しました。という恐ろしい電波を受信しました。

まあ、ご都合主義なのでご勘弁ください。

Story 031 (前書き)

アンケート実施中…もうテンプレートになりつつも。

その1

新キャラの名前。名字は決定済み。

あ、勿論女子名ですよ。日本人でも外人でもかまいません。

その2

更識楯無さんのフラグはどうするか？

- 1 ・オリ主フラグで行こう。
- 2 ・一夏がフラグを…
- 3 ・その他

3の場合はどのような展開がいいか、をお願いします。

ちなみに、現在の集計結果(その2のみの集計)

- | | |
|---|-----|
| 1 | 1 票 |
| 2 | 2 票 |
| 3 | 0 票 |

となっております。ご協力、お願い致します。

「現在11:30より作戦を決行する！」

「じゃあ、籌。よろしく頼む」

「本来なら女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが、今回は特別だぞ」

声が上がっている。

恐らく、一夏と同じ場に立てた事により浮かれているようだ。

さて、どう青銅ブロンズ・チエーンの鎖を落とすか…

一つ、機動により翻弄し、連打によって撃墜…駄目だ、相手の防御が固い。

次の案、『雷雨』を最大限駆使して、フルチャージで…時間がかかる。

じゃあいつそ、大型発電機でも…無理か。

と言うか、何で今作戦を考えているのだろうか？

答えがあるならば「単機撃墜」としか命令が出ていないからだろう。

何故考えなかったか？ 籌への意識の割り振りが高かったから。だって、作戦前にもしも何かが起こったら大変じゃないか。

と言う訳で、現在考察中…

よし、これだ。

『雷雨』の供給エネルギーをISのシールドエネルギーとバッテリーに変更し、チャージ。

これが最大限生かされればきっとバッテリー2つでの充電より半分で済むだろう。

下手をすれば、敗北は目に見えている。

というか、この状態の『雷雨』を、『サンダーストーム』と僕は呼んでいる。

その『雷雨』のときは、『雷雨』の時の最大が100%なのに対して、

フルチャージ
最大充電750%と言う恐ろしい領域に達する。150%位までで

撃つのは大丈夫だが、

それ以上の出力で撃つと、発射の反動を打ち消すのにシールドエネルギーを使い、

絶対に戦闘不能になる。このときの計算をしてみるとざっと1000程度は消費する計算となる。

なんというか、無茶苦茶だ。

おそらく、誰もが、そう言っただろう。

零落白夜の3倍である。出力面では。

だが、それでは福音には勝てない。

機動が遅い青銅にこそ有効な攻撃である。

だからこそ、一撃では無い物の、確実に青銅は仕留める。

『長峰、長峰！』

「はい？」

『聞いていたか？』

「いいえ。すみません」

『そうか。一夏と篠ノ之は出発したぞ』

「本当ですか!?!」

やばい。そんなに長かったか。

『そつだ。お前も早く行け!』

「了解。ではこれより、『五月雨』は青銅を撃墜する」

行かなくては。ハイスピードシステム HSS、起動。

ネーミングセンスが無いよ、東さん。

撃墜したら、名前を変更しよう。

そう思いながら、僕はその砂浜から、姿を消した。

実際には、そう見えるだけ。

急激なGをISが緩和しながらも、凄まじい衝撃が僕を襲つ。
最高速7200km/h。ふざけてる。

が、その瞬間は、1秒で終わる。

移動距離、2km/h。HSSチャージ率 0%

この距離しか移動が出来ない。いや、通常時なら話は別だが。
1度止まれば航続距離がリセットされるが、HSS（仮）は再チャ
ージに2分要する。

作者談：電話レ ジ（仮）のパクリではないよ、うん。

つまり、イクゼンション・ブースト瞬間加速とほぼ同じだ。イクゼンション・ブーストが、規模が違う。

もしも、HSS（仮）の時に瞬間加速が行えたら、凄まじいものと

チャージ90%

ただ、もう1つ鎖の利点を挙げると、リーチが長いことだ。

95%

だから、撃つ瞬間のみしか、奴には近づけない。
取り回しの長さが影響し、締上げられる可能性があるからだ。
さらに、もう1つの近接武器により、恐ろしい負傷を食らってしまう
うことが予想されるのだ。

100%

今だ。

HSS、起動。

そして、相手の背後へ向かう。

「『雷雨』まずは1発目っ！」

初弾命中。シールドエネルギーが減少する。

.....『五月雨』シールドエネルギー 残量500

経過を観察し、2発目のチャンスを伺う。

しかし、煙がはれた先には、ほぼダメージを受けていない様子の『青銅の鎖』が佇んでいた。

まるで、『これだけか？』とでも問いかけるように。

どうすれば、どうすればいいのか？

こうなれば、1極を集中して狙うほか無い。

そして、そこに、そこに、必ず、雷雨の弾丸を撃ち込むっ！

Story 031 (後書き)

若干のペースアップ!

まあ今週いっぱいのみのペースアップでしょうが。

頑張りたいですな。

Story 032 (前書き)

いえーい！

結局ペース上がらなかったZE

と言う訳で、投稿が3日に1回の状態が続きそうな今日この頃。

アンケート実施中！！

その1

新キャラの名前。名字は決定済み。

あ、勿論女子名ですよ。日本人でも外人でもかまいません。

その2

更識楯無さんのフラグはどうするか？

- 1・オリ主フラグで行こう。(姉妹d…ゲフンゲフン…)
- 2・一夏がフラグを…(楯無さん積極的に)
- 3・その他(知らんがな！)

3の場合はどのような展開がいいか、をお願いします。

ちなみに、現在の集計結果(その2のみの集計)

1 2票
2 2票
3 0票
となっております。

4票しかないよ……と言つ訳で、頑張つていこう！

Story 032

- 戦闘中 -

1発目を打ち込んでから、かなりの時間が経過した。

残り発射可能なのは1発。

「クソッ……」

心で発した筈の聲が表に出る。

僕はそれほど焦っていた。

どうすればいい？ 奴を倒す方法……

さっきから同じところに撃ち込んで、まったく破損する気配が無いのだ。

これじゃあ、埒が明かない。

どうすればいいんだ？ 僕は、負けたく無いっ！

そう思った刹那、ディスプレイに表示が浮かぶ。
どうやら、神は味方のようだ。

- ワンオフ・アビリティ
単一仕様能力 薄明 使用可 -

このワンオフ・アビリティの攻撃方法は、軍事衛星で、レーザーを発射します。

これ以上の説明は聞き飛ばした。どうやら、この単一仕様能力は、ワンオフ・アビリティ第3世代平気の様だ。束さんが単一使用と表示されるように仕組んだものだろう。

だから、これは一時的に単一仕様となっているものだと思う。

恐らく、束さんなりな励まし方なのだろう。

だが、今は丁度いい。薄明により、ターゲット標的を消去する。

「薄明、始動」

僕がそう呟くと、薄明発射まで00:02:00と表示される。

そこまでどう粘るか。それが問題だ。

こう考えている途中にも青銅は攻撃を続ける。

ガキイーン！！

鎖と時雨がぶつかる音。

時雨と雷雨を展開しているためどちらかを収納クローズしないと他の武器は使えない。

雷雨はチャージ中、時雨は防戦に仕様のため切り替えが出来ない。

HSSは使用したら接近し捕捉するしかない。ロックオン さっきの説明には、『500m以内のみ射程として迎撃できます。』
とのこと。

結構欠陥が…といたいのがISには欠陥も何も無い。

完成していないのだから。

ガンッ!

「ゴハアッ!」

血を吐いた。そして、鎖に捕らえられた。
丁度だ。道連れにしてやるうじゃないか。

そう思う彼の視覚には、発射まで00:00:01と表示されていた…

- Side Ichika -
一夏

「ぐあああつ!」

俺が箒を抱きしめるようにかばった瞬間、あの光弾が襲ってきた。

ダダダダダダッ!

(ああ…無事か…よかつ、た…。はは、何を、なきそくな、かおを…)

遠くでドオオオオオオオオオと大きな音が聞こえたのを最後に、俺は気を失った。

「一夏、一夏！」

筭のそんな叫ぶような、それでいて問いかけているような声は、
夏に聞こえることは無かった。

- Side Out -

残り時間^無00:00:00

じゃあ、サヨナラだ、青銅。

僕の命を掛けた戦いの、道連れにさせて貰うよ…

レーザーが空を切り裂く音が聞こえる。

「千冬さん、僕と青銅の搭乗者パイロットの回収、お願いします」

『おい、何を考えている！』

その質問には答えなかった。いや、答えられなかった。

ドオオオオオオオオン！！

この音は、ISに極太レーザーが当たった音だろう。
そんなことを考えながら、僕は意識を手放していった。

- Side Chifuyu etc. -

『じゃあ、サヨナラだ。青銅。』

青銅に話しかける零斗。そして、千冬さんたちに話しかける。

『千冬さん、僕と青銅の搭乗者の回収バイロット、お願いします』

「おい、何を考えている！」

千冬のそんな返答の返事は返ってこなかった。

「うそ…なんで、なんでええ！」

鈴の悲鳴。これを聞いたものは少なからず心に痛みを覚えるような悲痛な叫び。

「落ち着け、鈴」

「そつだよ鈴。零斗が落とされたのが悔しいのは分かるけど、落ち着こう、ねえ」

「そつですわよ鈴さん。」

ラウラさんやシャルロットさんの言う通りに、気を静めたほうがよろしいかと」

そんな3人の言葉を、鈴はあっさりと切り払った。

「何！大切な人が目の前で落とされるのを見て悲しむなどでも？
そんなの無理に決まってるじゃない！」

そうして泣き出す鈴。

「放っておけ」

千冬さんの言葉だ。

「ですが先生！」

食いついたのはシャルロットだった。

「鳳は放って置け。溜め込んでおいても、何も良い事等あるまい」

その声は一番はつきりと、そして一番説得できるような言葉だった。

「大変です！織斑先生！」

「何だ？」

「織斑君の位置情報、喪失しました！」

「何だと！」

「どうしますか、お、織斑先生」

「教員部隊で織斑、篠ノ之、長峰…それと、青銅のパイロットの救出を！」

「わ、わかりました」

- Side Out -
- Side ??? -

この搜索は、この4人が浜辺に打ち上げられるまで進む。

その時まで、搜索は続けられた。

そして、物語は、確実に、齒車が狂い始める。

これは、転生者がじゃばった罰か？それとも、他の何かか。

今は誰にも、分かりはしない…

- Side Out -
- Side Rin -

4人は浜辺に打ち上げられた。

全員の生存が確認されたが、一夏、零斗が昏睡状態だ。

「零斗、どうしてっ！どうしてっ！」

傍で泣いている少女。そして、何かを決意したようだ。

「あたしが、零斗達の代わりに…福音を落とす…」

恐らく、一夏か零斗が聞いていようものなら、確実に止めたであろう行動。

だが、少女は決意した。

あたしには、零斗を道連れへと導いた福音が許せない。

零斗は気付いていなかったようだけど、後ろから福音が押していた。

それで、道連れを選ぶしかなかった。

だから、あたしは、福音に復讐、いや、報復をする。

そして、行動に移した。

- Side Out -
- Side ラウラ Laura -

私は、何も出来ないのか？

私を救った一夏が、落ちていくのを見ることしか出来ないのか？

そんなのは嫌だ。だからこそ、奴には復讐せざるを得まい。

丁度そう思っていたそのとき、声がかけられる。

「福音に、反撃に行かない？」と。

- Side Out -
- Side シャルロット Charlotte -

僕は、ただ一夏が落ちていくのを見ることしか出来なかった。

どうすれば、見ているだけじゃなくて済む？

その答えが導き出されようとしたとき、声をかけられた。

「反撃、行かない？」と。

「シャルロット、一夏の仇を打つぞ」と。

- Side Out -

- Side Cecilia -
セシリア

わたくしは、何をできるといいますの？

ただ、一夏さんに協力が出来なかったのが悔しいですわ。

高速戦闘のレクチャーだけでは、役に立ててはいないでしょう。

だから、わたくしは……

そんなとき、突然、

「ねえ、仇、撃たない？」と、

「セシリア、奴を落とすぞ」と。

「セシリア、一夏の仇を打つんだよ」と。

聞こえてきました。

わたくしには、それは……

- Side Out -
- Side Houki -

私のせいだ…

所々に、包帯の巻かれた一夏。

私が、しっかりとしないから、一夏がこんな目に…
- - -

『作戦は失敗だ。以降、状況に変化があれば召集する。それまで各自現状待機しろ』

織斑先生から言われた、その言葉が、頭をよぎる。

私は、どうして…いつも…

力に流されてしまうのだろうか？

暴力への衝動を、抑えられなくなるのだろうか？

何のために修行をして…

枷^{リミッター}として、抑止力として、剣術で己を鍛えていた。

…はずだった。しかし、それは、薄氷のようにいとも簡単に割れてしまう。

私はもう…ISには…

決心をつけようとしていた頃だった。

- Side Out -

バアアン！

ドアが開く。

「あー、あー、分かりやすいわね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あのさあ」

「零斗はともかく、一夏がこうなったのって、アンタのせいなんですよ？」

「一夏は絶対防御により一命は取り留めた、だが昏睡状態だ。しかりそれは零斗も同じ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「で、落ち込んでますってポーズ？っざけんじゃないわよ！」

篝の胸倉をつかみ、鈴は言葉を紡ぎ出す。

「やるべきことがあんでしょうが！今！戦わなくてどうすんのよ！」

「わ、私は.....もうISを.....使わない.....」

「ッ……！」

パシィン！

「甘ったれてんじゃないわよ！専用機持ちっつーのはねえ、そんなわがママが

許されるような立場じゃないのよ。それともアンタは……」

鈴の瞳には、闘志しか移っていないように見える。

「戦うべきときに戦えない、臆病者なの？」

箒に、闘志に火がついたようだ。

「ど……どうしろと言うんだ！もう敵の居場所も分からない！戦えるなら、私も戦う！」

「やっとやる気になったわね。……あーあ、めんどくさかった」

「な、なに？」

「場所なら分かるわ。今ラウラが……」

その言葉をさえぎり、ラウラが扉を開け入ってくる。

「出たぞ。此処から30km離れた沖合上空に目標を確認した。ステルスモードに入っているが、

どうも光学迷彩を持っていない様だ。衛星による目視で発見したぞ」

「さすがドイツ軍特殊部隊。やるわね」

「ふん…。お前の方はどうなんだ？準備はできているのか？」

「当然。甲龍の強化パッケージはインストール済みよ。シャルロットとセシリアの方はどうなのよ」

「ああ、それなら……………」

ドアがまた開かれ、入ってきたのはシャルロット、セシリアだった。

「たった今完了しましたわ」

「準備オツケーだよ。いつでもいける」

専用機持ちが全員揃い、篝へと視線を移す。

「で、アンタはどうするの？」

「私は……………」

そうして少しの沈黙の後、篝はこう言い放った。

「戦う…戦って、勝つ！今度こそ、負けはしない！」

「決まりね」

そういって、腕を組む鈴。その顔は、不敵な笑みを浮かべていた。

「じゃあ、作戦会議よ。今度こそ確実に落とすわよ」

「ああ！」

篤がそういった後、作戦会議は開かれた。

Story 032 (後書き)

3巻3話と4話をつなげた希ガス。いつもより長かったZE
そして文字数が変わらなかったZE

なんか疲れたよ…

全員のサイドを作ったのは初めてだった…

緋弾のアリアが始まりましたな。

なんかHSSって被りましたね。ヒステリック・サ（ry

と言う訳で、名称変更の伏線を張っておいて良かったと思う今日この頃。

戦闘描写が難しい…

嗚呼、文才が欲しい、と言ったって何も無い。

次回、19日投稿予定。

アンケート、お待ちしております。

Story 033 (前書き)

アンケート実施中!!ご協力をお願いします。

その1

新キャラの名前。名字は決定済み。
あ、勿論女子名ですよ。日本人でも外人でもかまいません。
こちらは書かなくても結構です。

その2

更識楯無さんのフラグはどうするか？

- 1 ・オリ主フラグで行こう。
- 2 ・一夏がフラグを…
- 3 ・その他

3の場合はどのような展開がいいか、をお願いします。

ちなみに、現在の集計結果(その2のみの集計)

- 1 2票
- 2 2票
- 3 0票

となっております。

4票しかないよ…!と言っ訳で、頑張っていこう!

P・S

頼むから投票を…

その2だけでいいから…

Story 033

チュン、チュン…

小鳥の鳴き声が聞こえる。

僕は、人に対して心を閉ざしていた。

何故か？それは…

”人に拒絶されるのが嫌だった”からであろう。

だが、1人の少年、いや、その当時は子供だったから。

織斑一夏。

その子供は、心を閉ざしていた僕に光を与えた……

僕は、長峰姓になり、一夏達のいる街へと引越してきた。

そのときから、人に対し心を閉ざしていた。

”哀れみの目で見ないでよ！だったら、どうして、どうして、犯人を見つけてくれなかったの！？”

他に僕のような人を出さないように努力してよ！”

無理だ。しかし僕は、そんなことしか考えていなかった。

そんなちっぽけだった僕を、変えてくれた、心を開けるようにしてくれたのが、織斑一夏だ。

彼は、最初、何も挨拶をしない僕に怒ったらしい。

『挨拶ぐらいしっかりしろよ！』

それでも無視し続けた。が、一夏はしつこく構ってきた。

僕なんて、どうでもいいのに。

そして、半年が過ぎた。

突然、悲劇は襲った。

誘拐されかけた。それが、あの事件を思い出して足が震えてしまった。

しかし、一夏は助けてくれた。

『お兄さん、格好悪いよ』

そうして怒った誘拐犯に一夏は一撃を食らわせ、僕は誘拐されずに済んだ。

そのとき、僕は、何でこんな弱々しい僕を助けたの？と聞いた。

この言葉が、僕の人生に非常に大きな影響を与えた。

『友達なら、お互いに助け合うのが常識だろうが』

トウツトウルー

この言葉がきっかけで、他人に徐々に心を開くようになった。

ん？シャルロットの声が聞こえた気が…ゴホンゴホン、変な電波を受信したようだ。

って言うか回想にまで電波って…実に恐ろしい。

(中の人と同じなだけです。気になさらずに)

言うまでも無いが某2010年夏の秋葉原が舞台のゲーム…だったと思う。

と、ボケは置いといて、

さらに時が過ぎ、小学5年。

箒は引っ越して行った。そして、入れ違いに鈴……鳳鈴音……が転入してくる。

鈴鈴ってパンダみたいな名前だよな、って言う言葉が許せなかった。

人は差別されるために存在してはいけない。

そう思った僕は、鈴の世話もした。
一夏と一緒に。

僕がこんなに世話をしようと思ったのが初めてだった。

何なのかは、分からなかった。

其の時は。

(強制的に)登校拒否となる直前、ささやかなお別れ回と言つものを開催してもらった。

嬉しかった。そして、鈴と会えなくなる事を思うと、何故か涙が出てきた。

でも、まだ、その気持ちが一体何なのかは、分からなかった。

当日。

土曜日だったこの日。飛行機で目指すのは…ロシアだ。

千冬さん曰く、

『自分の身は自分で守れるようにしろ』

とのこと。千冬さんらしいといえばそれまでだが。

鈴、一夏、千冬さんに見送りをしてもらい、出発しようとしたそのとき。

鈴に、耳打ちで

『料理が上手くなったら毎日酢豚を食べさせてあげる』

………とか。

当時を知る千冬さんに聞いたらどちらも顔が真っ赤だったとか。

そうして、ロシアへ飛び立つ。

鋼の、飛行機塊へ乗って。

そうして、僕は、心から何か欠けた感覚に陥り、初めて気付く。

ああ、僕は、鈴の事が…

.....

チュンチュン…

ざわざわ…カサカサ…

此処はどこかの森のようだ。

「ラ、ラー　ラララ」

そこにいたのは、紺色のワンピースを纏った、美しい女性だった。

貴方は、誰なんですか？

その問いかけに、彼女は答えなかった。

だが、彼は知らない。

暴走している福音がどうなっているかなど。

……だから、今は冷静に質問するだけだ。

ガサツ、ザワザワ…

木の葉のかすれる音、森のざわめきを聞きながら、ただじつと森の中で歌う少女を見つめていた。

その歌、その踊りは、僕には胸の何処かにぼっかりと穴が開いたような感じにさせる。

…アレ？

気付くと、もうすでに歌は終わっていた。

踊りもやめて、木と木の間から顔を出す太陽の方を唯まっすぐと向いている少女の様子が

気になって、木陰から出て少女の方へ向かう。

木漏れ日は、やさしい光のように降り注いでいる。

そんなことを思っていたら、突然少女の咳きが耳を通して脳に伝わる。

「呼んでる…行かなきゃ…」

ふと少女がいたところを見ると、もう少女はいなかった。

可笑しいな。残っているのは、木漏れ日と森のざわめき。

もう少しこの不思議な気持ちになれるこの木漏れ日に当たっていようとする、突然声が聞こえた。

貴方は覚悟ができたか、と。

その方向を向くと、プラズマのような物質が唯浮いていた。そして、

「貴方は覚悟ができたか？どんな事があっても、動じない覚悟が」

「難しいことを聞きますね」

そうして、息を吸い込んで言う。

「今すぐと言ったら無理かもしれない。だけど、覚悟ができれば、何もできない」

「何も…」

「そう、何も。どんなときでも覚悟は付きまとう。決断するときなんかがそう。力を振るうときだって、覚悟が無ければ強さは存在せずただ暴力になってしまう」

今喋ったのが、僕の価値観。

しかし、言葉をまだ紡ぎ出す。

「結局は、覚悟が無ければ、上手いかない。無難と言われている方法だって、結局は”覚悟”の上に成り立つ選択。だから、たとえ仲間を失ったとしても、動じない覚悟は……必要だ」

「そう…」

そして、最後の言葉が響く。その言葉に驚いた。

「だったら、行かなきゃ。どんな覚悟もあるのなら、尚更ね」

その言葉を紡ぎ出したのは、先ほどの少女だった。何処かで見覚えのある笑み。悲しさが若干浮かぶ笑み。

「ほら、ね？」

手を取られ、微笑まれる。そして僕は、はい、と頷いた。
すると、いきなり世界は変化した。

夜の、闇のような、真っ暗闇へと。

そしてすぐ、先ほどの森の風景に戻る。

意識の覚醒、とでも言つのが正しいのだろうか。

段々その風景と、ピントが合わなくなってくる。

そして、意識が、沈んで行った。

元の、在るべき場所へと。

Story 033 (後書き)

最近1話毎の尺が長くなってきている…

けどもつと長い人とかもいるから問題は無いと思っている今日この頃。

どちらかと言うと話数<文字数ですが。

そして今回Aパート、Bパート風に分離していると言う謎。

一夏改変回でしたな。

そして、予定より2日も早く更新してしまった…

Story 034 (前書き)

ユニーク20000おめでとう

と1人で思っているのがあった。

アンケート実施中です。

更識楯無さんのフラグはどうするか？

- 1．オリ主フラグで行こう。
- 2．一夏がフラグを…

その他は投票が無いので消滅。
もし意見があれば、復活するかもしれませんが。

ちなみに、現在の集計結果

- 1 7票
 - 2 2票
- となっております。

な…なんだって！
いつの間にか5票入っていたと…そして、
オリ主フラグに傾いているだ！

すいません、取り乱しました。

1日で5票、すべてがオリ主票だった…

これには驚いています。

ご協力、お願いいたします。

なお、明日いっぱいを締め切りと致します。
ユーザ登録していない方でも投票可能です。

Story 034

- Side Author -

まず言って置きます。

Story 021

21話で、なんかR指定が上がりそうな事が起きたと思います。

大丈夫だ、問題ない。

添い寝レベルの話です。

ご都合主義の二次創作は改変がしやすいのです。

何故そんなことになったかって？

そりゃあ…

- Side out -

ハア、ハア、ハア…

なんだっただらう、今のは？

著者って…誰？

まあいいか。

しかし、辺りを見回してみると、誰もいない。

隣の布団はまだ暖かい。

おそらく、原作だと…一夏が福音から箒をかばって落ちただっけ？

じゃあ、これは…おそらく、一夏が僕より先に起きて、先に行ったのだろう。

だとしたら、僕も行かなきゃね。

五月雨、起動。

恐らく、敵は第2形態。

だとしたら、アレを使うしかないのか。と、空を飛んで考えていた。

ディソナンス
不協和音。

それが、アレ特殊機構の名前だった。

まだ1度も実戦では使っていないから。

正しく言つと、使えないのだ。

これが原因で、味方同僚を何度重症にしたか。

まだ、不完全なのだ。

そう、それが、必然のように。

これにも、一次移行があるらしく、それが、まだ終わっていないからである。

だけど、奴を倒すためには、これが必要だ。

覚悟を決めないと。

- Side 幕 Houki -

「ぐっ…っ…」

福音は箒の首をしっかりと掴んでいて放さない。

そして、翼となった『シルバー・ベル銀の鐘』に捕捉されていた。

一斉射撃への時間が刻々と迫っていたが、箒は1つの事しか考えていなかった。

- - - 会いたい。

- - - 一夏に、会いたい。

- - - すぐに会いたい。今すぐに。

- - - ああ、ああ、会いたい…

「いち、か…」

「一夏…」

その声はしっかりとした物となっていた。

イイイイイイン!

『!?!』

突然、福音は箒を掴んでいた手を放す。

「俺の仲間、誰一人としてやらせねえ!」

箒の目には、白式を纏った、一夏しか映ってはいなかった。

- Side Out -

- Side Rin -

一夏が箒の元へ向かう少し前。

「キヤアアアアアア!」

あたしは、悲鳴を上げながら落ちていった。

もう、死んじゃうのかと思った。

「鈴—————!」

そういつて、助けてくれたのは一夏だった。

あたしは、胸の中に、なにかを感じてしまった。

それは、隠して、嚴重に封印したはずの思い。

そう、一夏が好きだったと言うこと。

そう、彼女も、一夏が好きだった。

しかし、無理だった。あたしなんて…

そんな思いが、先行していた。

だから、嚴重に封印した。

そして、時が過ぎ、零斗のことが好きと思う様になってきた。

そう、零斗に告白、さらには学園に来てからファーストキスをした
り。

だが、それは、所詮、ただの、気の紛らわしだった。

零斗には悪いけど…

封印されていた思いが、解き放たれたような気がする。

その瞬間、零斗の思惑も見えた気がした。

そう、彼は、あたしが封印した思いを取り戻すのを手伝ったまでだ、
と。

今思い返すと、あたしに自信をつけてくれた気がした。

涙が出てきた。

零斗は、こんなにも、人の意思を尊重できたなんて…

そして、出発前に、呟かれた一言。

『君は、自慢したって良いんだ。本当の気持ちを考えてごらん』

さっきは、なんだか分からなかった。

だが、この一言を思い出しただけで、さっきの推論が確信に変わった。

ありがとう、零斗。

「鈴、ここで待ってる！」

そんな思^{一夏}い人の声を聞きながら、あたしはそう心の中でつぶやいた。

- Side Out -

- Side Ichika -

「一夏、一夏なのだ！体は、傷は…」

あわてて声を詰まらせる筈の元へ向かって、

「おう、待たせたな」

「よ…良かった…本当に…」

「なんだよ、泣いているのか？」

「な、泣いてなどいないっ！」

目をぬぐう筈。俺はやさしく頭を撫でる。

「心配かけたな。もう大丈夫だ」

「し、心配してなど…」

「いないと言えるの？筈」

そこに現れたのは零斗だった。

- Side Out -

「いないと言えるの？筈」

僕はそういった後、付け加えた。

「イチヤイチャしているのは良いから、僕は福音を殺らせて貰うよ」

「おい零斗、漢字が違っぞー！」

「そもそも、1人では無理だから、俺が手伝う！」

「お願いだから、やめといて。だって…」

不協和音について説明した。

「…とはなりたくないでしょ？分かった？」

そして少しの沈黙の後、一夏が口を開く。

「それでも、俺は手伝う」

「頼むからやめてっつていつてるでしょうが！」

僕は取り乱す。このままだと雰囲気の不味いので付け加える。

「だけど、一夏達を道連れになんかしたくはないんだ。僕が一人で福音を、倒す」

「分かった。ピンチなら呼んでくれよ」

「それはわかった。だったら、早く避難しなよ」

もう銀の鐘は発射されていた。そして、一夏達が逃げる。

「福音、もう終わりにしよう。交響詩「不協和音」」

見る見るうちにパージしていく装甲。そう、これが、第4世代としての『展開装甲』だ。

装甲が組みあがる。

残っているのは、手の装甲、背中部位^{コニツト}、頭部位^{コニツト}と、そして新たに形成された非固定浮遊部位^{アンロック・コニツト}の右翼。翼を？がれた鳥のように見えなくも無いだろう。

そして、錆びている様にも見えた。

そう、僕は覚悟を決めた。
どんな結果であろうと、僕の生きるべき道を生きるのみだ。

バチィ、バチッ！

突然翼が分離を始めた。
もしかしたら、このまま…

ああ、そうか、僕は…

生きるべき道が、死ぬ事だったのか？

そんなのは、嫌だ。

だから、戦う。みんなのためにも。

翼の装甲は再形成され、肘から肩までが装甲に覆われる。

一体何が起こったんだ？

パキーン！

何かが割れるような音がしたと思ったら、突然装甲の錆の部分が分離した。もしかして、これは…

「不協和音、ファーストシフト一次移行が完了しました。これより、ルースレス『冷酷』として起動します。」

思った通りだ。

そして、ISにエネルギーの翼が生えてきた。

機体は青白く輝いている。その一方、羽は禍々しい。

この機体、天使か、それとも悪魔か。それは - - -

誰にも分からない。

弱者から見たら救世主に見えるかもしれない、が同時に、相手に加勢して来たのかも知れないと思うほどの禍々しさ。

そんな、そんな形をしたISなのだ。

.....

『敵機の情報を更新。総合対処Lv^{レベル}・Sで対処する』

福音の掃射攻撃が開始される。

「じゃあまず……『秋雨』展開つと！」

左手側に展開される。

軍用ISの福音にはすぐに撃墜されるであろうこのミサイルを使うのには意味がある。

ロックオンした状態で別方向に向かって発射すれば弾幕以上の効果はある筈だ。

ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！

即5発を打ち切り、『秋雨』を収納^{クロース}。『長雨』を展開。

.....

あ、充電池式にするのを忘れてた。
まだバスのロットもあるから、できるようにしておこう。

パシユ！パシユ！

うん、低騒音。便利だ。

とりあえず、片っ端から撃つていこうという作戦である。

実は、右手側には、『秋雨』を展開していたときから、『雷雨』を右手側に展開していた。

フルチャージで1発：その隙を、作るために。

おっと、危ない。

『長雨』クローズ。『地雨』展開。

ダダダダダッ！

弾幕である。これが一番。

弾数をひっそりと10倍にしていた甲斐があった。

ダダダダダダッ！

カチン！

弾切れた。こうなったら…そう思った瞬間、『雷雨』のチャージに変化が。

雷雨、フルチャージ完了。

『霧雨』へとエネルギーの転送ができ、ワンオフ・アビリティー単一仕様能力が使用できま
す。

はい？こんなときに？

じゃあためしに…

『霧雨』を、展開した。

『転送終了。転送率100%』

…早いな、随分と。

ワンオフ・アビリティーの使い時か…

『せいかりようげん星火燎原』

それが、単一使用の名前だった。

「星火燎原…これで、多少はダメージを与えられるだろう」

そういつて僕は、『霧雨』を天に向かって構える。

番^{つが}えたたった1本の弓矢が、エネルギーを纏い徐々に大きくなってゆく。

『星火燎原 使用可能』

今だ。

撃ったそのとき、何かが変われる気がした。

今は分からない、何かが。

そのまま弓矢は空に飛んでいった。

え？
.....

やばい、福音に攻撃される…え？

福音は動けないようだ。

そして、何本ものエネルギーと実体を持つ弓矢が大量に福音に降り注ぐ。

ザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザッ！！

福音に直撃した。

『ゲオオオオオオオ！』

福音は、そのまま動かない。やったのか？

安心感に浸っていると、突然、意識が途絶え始めた…

「いちか、もしてきがまた、うごきだし、た、ら、たのむよ……」

そう言い残して。

Story 034 (後書き)

あとがきでネタバラシ。何が起きたのかった？

NTRが発生。と言つか鈴、それでいいのか？
というか、主人公が謙虚すぎるだろ。
作者が言っても説得力が無いです。はい。

恐るべし、一夏。雪羅はまだです。

リア充爆発しろ…

弾君から見たら悲しいでしょうねえ。

次回、〳〳21日までに投稿予定。

Story 035 (前書き)

今回は長さが戻ってまいります。

短くと言つ意味で。

ううっ…

「大丈夫か、零斗！」

今は知らない天井だ、とでも言っていると明らかに殺戮されるのが目に見えているので言えない。

ちなみに今僕の視界に入っているのは一夏ラブーズのみなさん、千冬さん、山田先生だ。

「まあ、ね…。それより織斑先生、福音はどうしたんですか？」

そういつて千冬さんに話を振る。

「あれは、お前が気を失うと同時に再起動をした。そして、一夏が
雪隠第二形態

を発現させ、奴を倒した…と言いたいが、実質お前が落としたといつても良いほどだ」

「それはどうも。で、罰則はどうなるんですか？」

…それと、一夏達は、少し席を外して貰えますか？」

「なんでだよ、零斗」

真っ先に食いつくのは一夏。

だが、皆に、僕はもう大丈夫だから、一夏と一緒に遊んでくれば？
それと、もう夕食の時間が近くなってるし…、

というと、目の色を変え、一夏を連れ出す5人。分かりやすい。

「ふう…。これで、心置きなく話せる」

「で、なんだ、零斗」

千冬さんはプライベートの話と理解してくれたようだ。それを見かねたかのように、山田先生が席を外す。

「ちょっと、夜風に当たってきませんか？」

.....

「うわあああああああ！！」

悲鳴が聞こえる。一夏の悲鳴だ。

ちゃんと原作かアニメを見た皆さんならお分かりだろう。

…最近、電波をよく受信している気がする。

「まったく、あの馬鹿は…それよりお前は、女を作らないのか？」

「いえ、一夏に好意を誘導するので精一杯です…痛っ！」

兵器で比座薄一撃。

「ほう、で、お前は私の弟の鈍感振りを見て愉しんでいる訳か？」

「まあ…でも、最近はしていませんね。鳳ぐらいしか」

「なあ、もう一発逝つとくか？」

慌てて否定する。

「違いますよ。あいつは一夏に好意を元から寄せていた。だが、心の奥底に隠していた…」

それをこの戦闘をきっかけに引きずり出した、それだけです」

「そうか…お前は本当に悪魔と言われただけのことはあるな」

「まあ、学校の先生にですけどね」

そう言って、乾いた笑いを作り出す。

「それと…東さん、そろそろ何か喋ったら？」

「そうだね。白式は凄かったね、ちーちゃん、れーくん」

「そうですね」

「そうだな、生体再生まで可能…まるで、白騎士の様だな」

「もっとも最初に作り出されたコア、そして実戦投入機の、ね…
そして、白騎士のコアには解明できない何かが残っていた」

「さすがれーくん、ちーちゃん。ごもつとも。それが、本当だった
ら、

白騎士…白式が暮桜のワンオフ・アビリティを開発したとしても、

可笑しくないよねえ」

「そうだな…私も1つ例え話をしてやるう」

「奇遇です。僕も例え話でもしよう」と

「へえ、れーくん達が。珍しいねえ」

「じゃあ僕から。とある天才が、とある男子の遺伝子情報を書き換えたとする。

女とISに認識されるように。そして、男はISを使えるようになってしまった」

「へえ…」

「それでその男子は、身を潜めて生活することになった…
勿論、情報が漏れていない確証が無いから。そうすることによって、一夏に寄ってくる女子の3割を減らすことができる、と踏んだ」

束さんは感心そうに聞いている。

「そして、もう1人の武術の天才が、どこかの軍にその男の子を入れた。

自分の身は自分で守れ、と言って。そして、ロシア、時々ドイツへ行ったりしていた。

…1回だけ、日本に帰ったことがあったけど」

「でも、それじゃあ、どうして、その男の子はここに？」

「それも篠ノ之束の目論見。一夏に何かがあっても守ることが出来るように。」と

…そうして男の子は今IS学園にいる、と…これで僕の例え話はおしまい」

「それでは、私の番だな」

そういつて、千冬さんは話し始める。

「たとえば、とある天才が、1人の男子の高校受験場所を意図的に間違わせることが

できたとする。そこで使われるISを、そのときだけ男が使えるようにする。そして、

本来男が使えないはずのISを使ったと言っことになるな。

「でも、それだと継続的には動かないよね」

「そうだな。そのとある天才は、そこまで長い間同じものに手を加えないからな」

「えへへ、飽きるからねえ」

千冬さんは質問が出てくるように話をしているため、束さんが良く食いつく。

「………で、どうなんだ？とある天才束」

「どうなんだろうねえ。うふふ、実のところ、白式がどうして動くのかは、

私にも良くわからないんだよね。いっくんはIS開発には携わっていないはずなのに」

「ふん…。まあいい。次の例え話だ」

「多いねえ…」

「嬉しいだろう？」

「いや、そこは…」

「嬉しいと思うだろう？ 零斗」

気迫、恐るべし。

「え、ええ…まあ…」

そうだろ、東、と千冬さんが言い返すと、違うだね、と返事が返ってきた。

「とある天才が、大事な妹を晴れ舞台でデビューさせたいと考える。そこで用意するのは専用機と、そしてどこかのISの暴走事件だ」

東さんも僕も沈黙を通してている。

「暴走事件に関して、新型の高性能機を作戦に加える。そこで天才の妹は華々しく専用機持ちとしてデビューと言うわけだ」

「へえ、凄い例え話だねえ。凄い天才がいたものだねえ」

僕が口を挟む

「そう、24カ国の軍事コンピューターを相棒と同時にハッキングして

歴史的な大事件を自演する大天才がいたのですからね」

ちなみに相棒と言うのは僕。

「ねえ、ちーちゃん、れーくん、この世界は楽しい？」

「そこそこにな」

「まあまあ、と言ったところですね」

「そうなんだ」

そうして、東さんは言葉を続ける。

「.....」

しかし、その声は風にかき消されてしまった。

「.....」

数秒だけの沈黙、そして、千冬さんと僕は、同時に口を開いた。しかし、その声は、潮風に吞まれて消えた。

「さて、戻りましょうか。明日は、まず一夏の制裁からですかね？」

「ハハッ、そうだな...」

僕と千冬さんは旅館へ戻っていった。

- Side Ichika -

翌朝。

朝食を終えて、すぐISの及び専用装備の撤収作業となる。

10時を過ぎたところで作業は終了。全員が暮らす別のバスに乗り込む。

俺も乗ろうとしたとき、後ろから声をかけられる。

「ねえ一夏。ぼくの車乗って帰らない？」

「いいのか!？」

「うん、いいよ」

俺は助かった。なにせ、あの空間から少しでも逃げ出せるからだ。しかし、知らなかった。俺が、その時点で、地雷を踏んでいたなど…

- Side Out -

僕は、臨海学校のことを思い出していた。

ちなみに、後部座敷には一夏とナターシャさんがいる。

まず思い出してしまったのは、車で来たと言ったときだった。

ものすごい質問の波。なかには、

『もしかして、武偵?』とか、

『車輛課とか通ってたの?』とか、

『知り合いに武藤君っている?』だの大変だった…

一夏と一夏ラバーズ除くで大きなことはそれぐらいだった。うん、そう信じたい。

一夏とナターシャさんは何かを話しているようだ。
そして、SA到着。
サービスエリア

そこからの会話に耳を傾けてみよう。

「あ、そうそう、ありがとうね、白いナイトさん」
類にいきなりキスですか。いい映像が撮れたな。

じつはRECだった。昨日の事件も録画してたり。

「え、あ、う…？」

「じゃあ、またね、バイ」

「は、はあ…」

さて、録画を止めよう。

「一夏、飲み物買いに言ってくるね」

「ああ」

そういつて出て行き、1組と2組のバスに編集映像を渡す。
編集スキルを舐めてはいけないよ。

帰った当日、一夏の悲鳴が聞こえたとか。

Story 035 (後書き)

アンケートの結果発表!!

な、なんと、10票集まりました!!

5票行けば良い方、と思っていたので、だいぶ驚いています。

そして…アンケートの結果は…

1. 楯無さんはオリ主フラグ

となりました。

どうもです。内訳は、

1…8票

2…2票

でした。

以上、アンケートの結果報告でした。

ハッキングの腕が信じられないほど高性能だった主人公。

Story 036 開始 〜08月14日〜(前書き)

タイトル再び。

なんとなくですが。

原作4巻とも言っ。

さあ、少年少女たちのオムニバスの始まりだ。

夏休み。

多くの学校が7月下旬からと思われるその休み。

しかし、IS学園は8月から。

どの学校と比較しても、夏休みが遅い、短い部類だ。

「だるい…」

僕は何もやることは無かった。

今覚えているのは、鈴が、やたら張り切っていたこと。

一夏をデートにでも誘えたのだろう。

しかし、大抵の場合上手くいかない。それが一夏クオリティである。

純感の考えの先

そして、殆どの生徒が絶賛帰省中。

って言うか、僕はそもそもどこの所属なのか？気になるが、今考えなくてもどうしようもない。

何もすることが無い…トランプで切札を早々と切ってしまった気分だ。

これなら、早く夏休みがあげて欲しい。

切実な、願い。

しかし、それは願いにしか過ぎなかった。

「はあ……」

「零斗、いるか」

「うん…」

一夏は入ってくる。
さて、どうしようか？

「暇だな…」

「そうだね。って言うか、一夏は鈴と約束してるんじゃないの？」

「そうだった」

待たせたら怒るよ、きっと、と言おうとしていた所へ、
突然マナーモードにしていた携帯が震える。着信が入った。
というか、電話じゃなくてメールなのか…

それを見た僕は、目を大きく見開いた。

「一夏、外に行こう。僕は用事が出来た。それと、鈴は待たせたら怒るよ」

一夏は理解した。きっと。だって僕の”分かったつもりになれる”
教え方をしたものだ。

「そうだな、じゃあ行こう！」

一夏と僕は外へ出て行った。

- Side オルコット Alcott -

「さて、やっと戻って来れましたわ」

IS学園、正面玄関前。

白のロールスロイスから降りたわたくしは早速の熱気につんざりしながらも

気分は高揚していた。

織斑一夏。彼にやっと会えるのだから。

(やはり、思い人と同じ空の下に居たいですし…)

わたくしセシリア・オルコットは本国イギリスでの仕事を終えて、やっと今日日本へと戻ってこられた。

オルコット家での溜まった職務、国家代表候補生としての報告、専用機の再調整、

それ以外にもバイオリンのコンサート参加、旧友との親交、そして

- - - - - 両親の墓参り。

考えると、まだ胸が痛む。

- Side Out -

「今来た。3行で説明頼む。今北産業…となるとこうなる。」

作者が省略しました。
申し訳ありません。

以後、こういうことが無い様に注意します」

「メタ発言って実際にあつたんだな……」

メタ発言だ。たしかに。だけど気に留めずに、ゆっくり歩いている。それに、入学当初から、何かを忘れているような気がするんだけど……

…そろそろ正門前だな、うん。

そこにはセシリアがボーっとしていた。恐らく、妄想中…なのだろうが、

この一夏には熱中症に見えることだろう。だから、なんとなく行ってみる。

「大丈夫（です）か、セシリア」

…見事にハモったね。

「はっ!？」

「大丈夫か？ボーっとして、もしかして熱射病か？気をつけないと駄目だぞ。」

夏の熱射病は危ないんだ」

予想的中。

「いつ、いえっ！大丈夫です！その、さっきまで車の中でしたから、少し立ちくらみをしただけですっ！」

必死だね、セシリアも。

「そう、それなら良かった」

「ええ、まったくです」

…うすうす誰かの気配を感じていたのだが、やっぱり人だったか。

「ん？えーと、どちら様でしたっけ？」

「お初にお目にかかります。セシリア様にお仕えるメイドで、チエルシー・ブランケットと申します。以後、お見知りおきを」

「では此方も。始めまして、長峰零斗と申します。織斑一夏なら僕の右の男性です。」

特には何もありませんが、以後、お見知りおきを」

こうするのは基本。…と思いたい。

「ああ！前に1度、セシリアからお話は聞いていましたけど、貴方がそうだったんですか。」

はじめまして、零斗の紹介にもあったように織斑一夏です」

「はい。織斑様。長峰様。………ときに、ご無礼なことを承知でお尋ねしますが、

私の事をお嬢様はなんと？」

「ええ。とても気が利く方で、優秀で、優しくて………美人

だつて言っていました」

「上に同じ…いや、この場合は右に同じ、ですね」

何で僕はメタ発言が多くなっているのだろうか？

「まあ」

さて、このままだとセシリアの嫉妬の渦に巻き添えになって遅れそうだから、

先に撒こう。うん。

「私も織斑様のお話は良く伺っていますが、長峰様のことは初耳です」

「ああ、それは…恐らくセシリアが一夏の事…
つて、チエルシーさんなら分かりますよね。伺っていた話もそれかと」

それは…以降はチエルシーさんだけに聞こえるようにしたので問題なし。

「？ なんの話をしているんだ？」

「まあそれは秘密だよ、一夏。それよりも、用事があるって言ったよね？」

だからもう出かけなければいけないんだけど…」

「そうか、じゃあ気をつけて」

「ああ。じゃあ失礼します」

そうして、3人と別れた。

外出許可証、外泊許可証をもらい、愛車に乗り込む。
って言うか、車、誰が運んできたんだっけ？

…何かが頭に引っかかっているんだよねあ。

鍵を差し込み、回す。

エンジンが回りだし、そして発車。

どうしてこんな遠くまで行かなければならないんだ？

そんな疑問を抱えながらも、車は走っていく。

徐々に距離的に近づき、そして到着。

そこで待っていたのは、驚愕の事実と、
頭に引っかけたことを思い出したことによる衝撃だった。

Story 036 開始 ～08月14日～（後書き）

分かったつもりになれる教え方。

これは作者、いや、物書きの私がやっている教え方です。
あくまで、つもり、ですが。

…といいつつ先生じゃないし、学生だから問題は無し。

実は何故か消えていた（消していた）アンケートその1。

アンケートのハードルになると思って、そして2名の方から来たので
問題無しと思って消してみた。

問題大有りの可能性もあるが。

結果は…『シオン』に決定。機械屋様、採用と至らなくて申し訳ありません。

では、また次回。

S t o r y 0 3 7 驚愕 ～08月15日～(前書き)

8月14日も入りますね。 ええ。

そして7巻の新キャラとやらが出現します。

涼宮八 ヒトかは出ないからね。

Story 037 驚愕 ～08月15日～

8月14日

車を飛ばすこと早半日。

何故って…渋滞が酷かったからです。はい。

現在、17:00。まだまだ少年の車内での奮闘は続く…

なんか千冬さんからオルコットと鳳がやらかしたとか言っていたけど、

気に留めないでおこう。

.....

…21:00。

…お盆休みの渋滞と、さらに事故渋滞で4時間かけて進んだのは約50km。

ちなみに、ここら辺で渋滞することは日常茶飯事。

しかし、異常すぎる。誰かー、助けてー

おそらく、JCTを過ぎれば1時間で着くので、問題なし。
ジャンクション

ちなみにすいている状態で行くとIS学園から来て欲しいといわれた所までは4時間

…らしい。

鉄道で行ったとしても駅が遠いので車推奨…とか書かれていたので、車できているわけである。

しかし、混み様が酷い。ちなみにジャンクションまではあと25km。

…あれ、助けてー！

時間が無いよー

仕方ない、メールで伝えておこう。

『事故渋滞とお盆休みの渋滞で、今日には到着は無理そうです』
…つと。

.....

はい、無事到着。

現在8月15日。午前0時16分。

… 3時間で着くと言われたのに16時間とか何なの？

死ぬの？バカなの？

… ゴホンゴホン。

取り乱してしまったようだ。

と言う訳で、気を取り直して、と。

さて寝よう。

8月15日

父に、早く行け、と促され、向かった先には、何故かご立派な屋敷。どうしろと？、と聞きたいが生憎、誰も答える者は居ない。さらには、何故か護衛までもがついているし。

…とじつじつと。

.....

…屋敷に潜入、もとい、お邪魔する。

最近疲れてくるなあ…

護衛らしき人に、

ここで正座をして待っていてください、と言われ、きょとんとしている僕。

そして、おじいさんが入ってきた。誰だっけ…？

「ああっ！」

そこにいたのは日本を拠点としている

巨大P C・I Sメーカー『柳葉』社長の柳葉秋誠やなぎはあきまなさん、その人だった。

何で？W h a t？

そう思っていると、柳葉さんから説明を受けた。

ふむふむ。

なるほど。

へえ〜

…はい？

良く分からないまま返事をしていた。

なので、資料を見せてください、と言って見せてもらった。

驚愕の事実が。説明しよう。

その1・僕は長峰家の養子だが母が柳葉家のため柳葉家として生活。

なお、父親は柳葉の婿養子として生活する。

…なんだった？

その2・柳葉の試験操縦者テストパイロットとなること。

なお、自由国籍権も保持すること。

…はい？

その3・構成について説明する。柳葉家は更識家と非常に仲が良く、

互いに協力関係をとっている。

裏社会では表の柳葉、裏の更識と呼ばれていること。

…はい？更識家って、どこかで聞いたことがある気がするんだけど
なあ…

その4・最終的には就職先は柳葉で決定。

…これは良い。内定受けたZ E

その5・許婚など存在しない。自分でもぎ取れ

…その方がいいですよね、きっと。自分でも楽だし。

要約するとそのような感じだ。

(でも、更識家ってどこかで…)

思い出そうとしたところで、柳葉さんから声を掛けられる。

「零斗君、更識家の当主の方とその妹が来られるので、ご挨拶を」

「あ、はい」

そこで襖を開けて入ってきたのは、衝撃の人物だった。

- Side Secret ???? -

さて、柳葉家の子供と対面って言うけど、どんな子なのかしらね？

その少女は考えていた。

いったい、誰なのかを。その、柳葉家の、子を。

「お姉ちゃん…そろそろ…」

妹に言われ、襖を開ける少女。

そのときは、ものすごい驚愕の事実に襲われることは、彼女もまた知らない。

- Side Out -

「失礼します」

「失礼します…」

！？

入ってきたのは、当主の人と、その妹。当然だ。

だが、その容姿には見覚えがあつた。どちらにも。

一方を更識楯無。水色の髪、赤の瞳。ちなみにロシアでの同僚。

もう一方を…名前は知らないが、見覚えがあつた。

髪と瞳の色は同じ。ただ、癖毛が楯無は外側を向いているのに対し、この子の癖毛は内側を向いている。

・・・やばい、何か引つかかっていたのはこの人のことだったのか！
急に冷や汗が出てきた、うん。

「零斗君!？」

.....これは明らかに気付かれたようだ。

隠していても埒が明かないので、質問を。

「たつちゃん？」

「!？」

隣の妹さんが驚いている。

「あれ、君は確か……」

「さ、更識っ!……簪」

「知ってるの、零斗君？」

そりゃあ、ねえ。

「まあ、うん」

「じゃあ、零斗君が……」

「はい？」

何をしたって?と言うか、誰か助けて。

「久し振り、零斗君!」

抱き付かれました。はい。

妹さんの視線が痛い。痛い。
大事なこと〓2度います。

「あの…抱き付くの、やめていただけませんか？」

「え…嫌なの？」

「妹さんの視線が痛いです。あと、そういう関係じゃないので誤解を免れるためにも…」

回避は重要だよ。

「いやだ」

・・・はあ。なんか辛い。お母さん、何故今柳葉の人間ってことにしたんですか…？

「若いつて言うのはいいですねえ」

いや秋誠さん、そんな事仰らずに、助けてください。

「で、たっちゃんの妹さん。どう呼べばいいかな？」

「簪で…良い」

「そう、じゃあ…」

そういつて、僕は自己紹介をする。

「長峰…じゃなかった。柳葉零斗です。零斗でかまわないよ。よろしくお願いします」

「さて、私はこれで失礼しますね」

…あーっ、タスケテー、タスケテー

非常信号が発令されております。

.....

なんとかたつちゃんから開放される。

「で、簪ちゃんと仲直りできたんだけど、何で分かる？」

「……………」

たつちゃんは話しかけてくるが、簪は無言。

「簪、話しても良い？」

「…うん…」

「じゃあ、話すね…」

i -
- R e c o l l e c t i o n b y R e i t o K a n z a s h
リ「コレクション

ロシアから、日本に行っていた時の話。僕は過労で倒れた。

（作者注：主人公は過労が多いですが、仕様なので悪しからず）

迷って、しかも裏道だから人通りは無く、死ぬのかと思いながら意識を手放した…

はい、此处で簪にバトンタッチ」

「…えーと、そこに私が通りかかって…ぐうぜんね、零斗を見つけたの…」
そこで、看病した…」

「で、どうして仲直りに繋がったの？」

「それは、僕は起きて、昼食を貰い、こう言った。

『君は兄弟姉妹の事で何かあるようだね。』

もし君がコンプレックスを感じているんだったら、それは大きな間違い。

どんなにコンプレックスを感じていようが、弱かるうが、情けなかるうが、みっともなかるうが、結局人間なんだから『
ってね』

「へえ…で？」

質問が単刀直入なんです…

「叩かれた。で、何が、分かるの？って言われたから、こう言った

『昔、とある天才が居てね。その人はありえない発明をした。

現代兵器をすべて凌駕する代物を。そして、その妹は、姉を恨んでいた。

如何にかしたい。でも如何にも出来ない。

そんなままの人を、もう作りたくなかっただけ。』と。

そうしたら、どうしてその人と関係あるのかを聞かれたから、

『だって、君の目がその天才の妹と似た目をしているから』と。さらに、

『だから、君は、弱さとかを、受け入れると良い。受け入れたら、きっと何かが変わる
如何してか、それは…』と言ったら

人間、だから？ と聞き返され、そう、きっと兄弟姉妹はこう思っているよ。

……だって、私の自慢の妹だもの、とかね。

つて。それで、もう大丈夫って言って、その家を去っていった。
名前は聞かれたけど、また会う機会があったら、と言って

……

- Recollection END -

「へえ…そんなことが」

「……」

「ここまで話をして気付いたんだけど、たっちゃんも警はどっか通学してるの？」

∴この質問をして、後々後悔することになったのには気が付かなかった。

「IS学園だけど？」

「…IS学園…」

「はい？」

ほらね。もし聞かなければ、未来はどうなっていたことが。
だが、聞いてしまったので、大変そうだ。

そのことを考えて、うなだ項垂れる僕。

「で、零斗君はどっかに通ってるの？」

死刑判決が来たようです。

「あ、IS学園…」

2学期には、頭が痛くなりそうだ。

「…で、お姉ちゃんと零斗はどこで知り合ったの…?」

「ああ、それは…」

そういって、僕は楯無さんに出会いを話し始めた。

Story 037 驚愕 ～08月15日～(後書き)

ご都合主義。便利です。

そして、次回予告！

『Story 038 回想 ～8月15日～』

楯無さんと何があったのか？

乞うご期待！！

まあ、期待しすぎると大変だと思っけど。

Story 038 回想（08月15日）（前書き）

回想回です。

4100文字。限界の1/10ですが、僕にとっては長い方です。

それではごじげ。

Story 038 回想 〱08月15日〱

アレは、幾年か前のお話。

ISを使えることが分かり、身を隠すために、ロシアへと向かったあの時。

もしかしたら、たっちゃんとううことは、運命？だったのかも…

某日。

もうお昼の成田空港で見送ってくれたのは、鈴、一夏だ。
千冬さんはもうドイツにいるらしい。

搭乗するのはアエロフロート576便、
成田12:00 シエレメーチエヴォ17:10の便。

…気になる人は検索して…

(作者注：実在する便です。H23・4・25現在)

「もうこんな時間だ。…じゃあね、鈴、一夏」

「ええ！…それでね、零斗…」

電波受信中…

… 酢豚フラグはこいつが立てています…

・・・？ まあいいか。

「何の話だったんだ？ 零斗」

「いや、別に？」

「…？」

「それより、会えたらまた会おう」

「ああ」

「ええ」

そういった後、飛行機に搭乗する。

そして、飛行機は、動き出す。

それは、新たな旅立ちを、歓迎するかのようにな……

無事到着。

そこで、軍隊へと向かう。

いつから、僕の人生は、狂ってしまったのだろうか。

そう、思いながら。

軍隊を管理するお偉いさんに、軽く会釈をし寮へ向かう。

ちなみに、此処は情報の漏洩をしない限りは他の国の軍隊に入っても大丈夫…らしい。

ドイツ軍とは仲が良く、1人2人を期間限定で入れ替えたりするとか。

そんなことを考えていると、いつの間にか寮に付く。

部屋番号は…072・よし、この部屋だ。

ガチャツ、とドアを開けたときに音が鳴る。

「はじめまして。長峰零斗です」

そう言った途端、後ろから一般人はおるか軍人すらも気付かなそうな気配を察知する。

まったく、ややこしい軍隊だ。

僕はすぐさま後ろを向き、拳を繰り出す。

しかし、避けられた。相手も随分と身のこなしが軽いらしい。

さて…と。冥月流派の攻撃法は使っちゃいけないから、如何し様か…

そんなことを考えていると、相手の降伏…いや、僕と相手の会話が
始まった。

「だーれだ？」

「ロシア軍隊の者、もしくは…」

そう言った後、後ろに回りこむ。

「侵入者」

その瞬間、蹴りが相手を襲う。

だがしかし、本気の少しも出していない蹴りを止められる。予想出
来た事、ではない。

彼女は、ISを展開していたようだ。

『グストロイ・トゥマン・モスクヴェ
モスクワの深い霧』だ。

ロシアの第3世代型IS。ナノマシンを駆使して水を操るとか何と
か。たしか、ロシアのISだ。

「おっと、これは失礼しました。えーっと…」

「更識楯無。おねーさんは楯無かたちちゃん、って呼んでもらえる
とうれしいな」

「じゃあ此方は零斗でかまいません」

危険度が高い人はこう余所余所しい面で回避。
そうでなければ…

脳内の信号がWor^{警告!}king!と鳴り響く訳が無いもの。

しかし、余所余所しい態度が逆に仇となってしまうたのを、当時の僕は知る由も無い。

それから。

たっちゃんに、私にします? x3を聞かれたり、
スク水でシャワールームに入られたりしたことは驚いた。

だが、表面上は冷静を保ち、

『お断りします。嫌なら部屋割りを変えてもらうだけです』とか。
『変態はストライクゾーンからは外れます』とか。

とりあえず、拒否できるような余所余所しい反応をし続けても、意味が無かった。

心労の耐えないロシア。

僕はどうなってしまうのか、と不安になったりした。

その関係がちょっとだけ変貌した、あの日。

僕は軍隊では生身での最強の称号をもらう。ISなんて到底無理な話。

使用しないから。

ちなみに負けなし。そして隊員のほぼ全員は病院送りにしたことがある。

ほぼって、誰を病院送りにできなかつたって？
たっちゃんに決まってるじゃないか。

冥月流を使えないのは、力を1/4しか^{25%}發揮できないから。
もし使ったら、間違いなく相手は良くて重症。

最悪の場合、即死だ。

そんなもの、仲間には使いたくは無いよね。

そして、敵は襲来した。

いや、正しくは、ISが暴走した。

福音の、前。

『ノヴォシビルスクの赤き花』は『モスクワの深い霧』の姉妹機だ。

それしか情報が無い。本部に連絡すると、

『我々も対策を講じている。だから突破口になるのであれば情報を開示する』

とか。非常事態だからしょうがない。

情報を受信。

『ノヴォシビルスクの赤き花』：通称は赤い花。

なんでも、ナノマシンを駆使して、粉塵爆発による攻撃とか。

：確かに姉妹機だね。

他にも、刀剣は粉塵を燃やし続けて刀身をつくり攻撃するとか。銃弾が炎を纏ってるとか。

：チートだね、うん。

今思うと、篠ノ之箒の専用機『赤椿』のコアだとか。

東さん、アンタすごいね。ネーミングは：花繋がりで椿にしたのかなあ？

そんなことは置いておいて

たっちゃんも苦戦していて、僕には何もできないのか。

僕は役立たずなのか。

不要なのか。

いや、違う。必要とされていないから？

そんなことを考え出すと、きりが無い。

しかし、そんな螺旋ループも終わりが来る。

一夏や鈴、千冬さんだって、必要としてくれた。

此処に来てからだって、たっちゃんが。

そんなことも考えられないまま、適当に追いついていただけなのか？

自分の心が踏み荒らされてしまいかもしれないと考え、壁を作っていたのか？

否定できない。だからこそ、否定できるように、立ち上がらなければ。

ISを使う。

それが、最善の措置だ。

恐らく、監禁は免れないだろう。

それは、自分を必要とする人が居るのか、という試みでもあった。

だから、ISを起動した。

それは、自分が危険にさらされること、もしかしたら、モンド・グ
ロツソへ

出場できるかもという期待。

かなり甘い。

しかし、そう考えないと、ネガティブ・シンキング負の思考に潰されてしまったであろう。

『降雨』起動。

それは、悪魔との契約。

気付かれてはならない、ただ1つの迷いという良心の呵責も振り切られる。

仕留める。絶対に。

.....

「楯無さん、大丈夫ですか？」

そう尋ねる僕。 たっちゃんは僕がISを起動させているのを見て驚いている。

「それは…なんで…？」

「気にしないでください。それより、僕は貴方を助けに来ました」

「な…んで？」

「まあ、仲間がワンサイドゲーム一方的な戦いだと助けたくなくなります。それに…」

「それに？」

僕は、秘密ですよ。仇なら取ってきます、と返し、その場を去った。

.....

ガキイン！

戦闘開始から1分。

仲間は皆気絶。

楯無さんは意識が朦朧としている。

相手の装甲を捕らえた。それと同時に相手の攻撃も直撃し、シールドエネルギーが互いに減る。

そして、相手が見えなくなる。

…これが、粉塵爆発。

回避。

ババババババババババアーン！

凄まじいといっても現し切れない様な轟音。

爆風によりダメージを受けた。

戦闘開始から、3分。

早く、仕留めなくちゃ…

そう思いながら、近接ブレード『隼』を握り締める。

ISの制御を完全に手動に。^{マニュアル}

^{オーバークロック}超過負荷、使用。

これは、ISで冥月流が使えるように反応速度を一時的に引き伸ばす機能だ。

ただし、かなりの負荷がかかるためオーバーホールは必須だが。

そして、脳にも負担をかける。

その代わり、並列演算が可能になったり、^{マルチタスク}処理速度が段違いに良くなったりする。^{スベック}

俗に言う、『SPC』(TSで放送されたドラマですね、分かります。)である。

下手したら死ぬらしいから滅多には使わないが。

開始から、3分30秒。

^{オーバークロック}超過負荷を使った僕は、

攻撃をすべて避け、自らの攻撃をすべて当てていく。

^{パーフェクト・アヴオイダンス}完全回避達成。

そう思考の海で考え終わったときには、戦闘は終わった。

丁度4分。

この戦いがきつかけとなり、雨粒の振るおおよその時間と一緒にあ
ることから、

『ア・ドロップ・オブ・レイン一滴の雨』と言う2つ名まで付いてきたりすること。

そのときは、まだ知らない。

そして僕は、意識がそこに沈んでいくような感触に襲われた。

.....

目を覚ます。

早速僕は、監禁されているようだ。

質問の内容は、

『あのISはなんだ？』

『あのISを渡せ』

『何故ISが使える？』

ばかり。こう返したよ。

『僕専用機』

『断固拒否』

『原因不明』

とね。そしてついに怒った東さんが、ロシアに対し、

れーくんに何かするようだったら、コア自体を使い物にならないようにするよ。

それともその暴走したISのコアを渡してくれるなら、新しいISのコアを渡す、と。

ロシアもついに動き、専用機持ちとして正式に認められた。

まあ、暴走した奴を倒したんだからねえ…

それで、監禁からオサラバ、と言うわけ。

-
-
-
-
-

それから。

僕はたっちゃんと少しずつ打ち解けていった。

敬語もいつしかなくなり、たっちゃん、零斗君、と呼び合うくらいにはなった。

そして。

グストイ・トウマン・モスクヴェ
『モスクワの深い霧』

をもとに、僕がメインでミステリアス・レイディ霧纏の淑女を組み上げたり。

そして、日本に一時帰国して、簪との出会い。

(前の話を参照して下さい)

ロシアに戻ってから、去年の4月までロシアにいた。

モンド・グロツソで、『ア・ド・ドロップ・オブ・レイン一滴の雨』という2つ名も貰ったが。

ちなみに、国家代表ではなく、特別枠として出場。

ロシア国籍なんて、持っていないから。

そして、たっちゃんがIS学園に行く時。

僕は、ロシアでは大佐レベルにはなったが、そこを脱退。

そして、その1年間は東さんアシスタントの手伝い。

それで、今年の4月から今に至る。

.....ってわけ。

「...へえ...」

何故不機嫌に？そんな恋愛要素は出してなかった筈。

ともかく、この話の後、秋誠さんに屋敷を案内され、夜になる。

おいしい夕食を食した後、風呂に入ったりして、闇は深くなってくる。

翌朝、何かがありそうで嫌な予感はあるが、寝ないわけにもいかないので、僕は床に就いた。

Story 038 回想 ～08月15日～（後書き）

回想…

何故か捏造設定が加わっていたのです。

いいじゃないですか。

では、また次回

『Story 039 苦惱 ～08月16日～』

乞うご期待！

…ちなみに零斗オリジナルのオムニバス最終回となります。

だが、夏休みはまだまだ続くので、出番自体はまだあります。

では、またお会いしましょう。

S t o r y 039 苦惱 ～08月16日～(前書き)

タイトル改題の旨は活動記録にて掲載。

Story 039 苦惱 ～08月16日～

リア充死ね？

そんなことを思っていたときが、前世僕にはありませんでした。

現実、リア充は辛いだけっばいZE

余談を戻して
閑話休題

…ねえ、その君、賢者な君、分かるだろう。

モウヤダ。

詳しく
5WHで説明すると、

誰が
Who… たつちゃんと簪が、

何を
What… 僕の布団に潜り込むのを、

何時
When… 昨日の夜、

何処で
Where… 僕の寝室で、

どうして
Why… 添い寝ができると期待して、

How…ひっそりと来た…と。

もう一回言っが、

…ねえ、その君、賢者な君、分かるだろう。

はあ…

たっちゃん、そして何故か簪、何故、僕の布団で寝ているんですか？

.....

あれから。

「若々しいって、良いですねえ」「とか秋誠さんに冷やかされたりして、

いろいろ辛かった。

…メンタル
精神面で。

そんなことはお構い無しに、帰宅の時…いや帰寮が正しいか。

12:00

丁度下り高速の渋滞ピーク。

…なのに、14日から混んでいたあの高速道路はなんだったんだろ
うか？

…ねえ、誰か教えて。

…なんか三角関係に発展しそうな気がするんだけど、どうすればいいの？

構図としては、

僕は両方の好意を理解している。

簪は僕への好意、そして姉へのライバル心？だ。

たっちゃんも同様に。

…僕は、どちらの好意を受け取るにせよたっちゃんからは逃げられない、
ない、

もう終わりだ。と想っていたい。

なんか両方とも取っちゃえ、と言っ幻聴が聞こえたが、気にしたら負けだ。

その瞬間死亡FLAGフリゲが立つのは御免だ。

「どっすねばいいの…」

もう、ヤダ。

そんな声、誰にも届きはしない。

ややこしい立場だ、此処は。

そういう思いで、柳葉家を後にした。

何故か、2人が居ない事に気付かぬまま。

- - - - -

12:30

高速道を走行中。これほど後悔したことは無かった。

はあ…何で2人も乗ってるの？

たっちゃんはそういう人だから諦めが付くとして、簪は…
姉に零斗君取っちゃうよ？とでも言ったのだろう。

…僕としては簪が好みだが…ゴホンゴホン！

そう思った途端後ろから視線が。
破壊光線
実に恐ろしい。

「で、何で二人とも乗っているんですか？」

「えー、いいじゃない。零斗君のイケズ」

「別に…」

突っ込みを入れてみよう。

「まずたっちゃんが居ると厄介ごとに巻き込まれるから降りて」

こんな台詞、よく言えたものだ。

ささやかな反撃とでもして置こう。

「そして簪、姉に唆そそのかされたのは分かるが、何故今なんだ？」

あれ、これってクーデレ？そして2人は何なんだ？

最近良く脱線するんだよ…

ちなみに、こんな返答が帰ってきたとか。

「いいじゃない。おねーさんは送ってもらっていつでも」

「れっ…零斗、と、い、一緒に帰りたかった」

属性は不明である。

.....

16:00。無事帰寮。

一夏&p:ラバーズに何処に言ったのかとかその人たちは
とか聞かれたけど

まあ、それなりに説明しました。

…暴走事件？そんなもの話せないでしょうが。

そして…

鍵が掛かっていた筈の自室。

たっちゃんが、お風呂にします？ご飯にします？それともわ・た・し？、とか聞いてきたり。

簪も、この本一緒に読んで、とあったのは載せればノ ターン送りになる
ような本だったり。

どちらもお断り。もう少しまじなように、ね と返したよ、うん。

今度は部屋は侵入不可な様に様々な機器を仕掛けた。

絶対破られてはならない。

もし5時前に起床したら最後、起きたままと言う状態もありうるのだ。

安眠の、妨害はさせない。

そう誓った僕であった。

Story 039 苦悩 ～08月16日～(後書き)

長さが不定期で変動しますな。

3日に1回、長くなったりとか。

次回予告

『Story 040 撃退 ～08月20日～』
をお送りいたします。

ページで言うと78 - 147のどこか、かな？

それではまた次回！

乞うご期待！

S t o r y 0 4 0 買物 〜08月20日〜(前書き)

はい、次回予告のときより改題。

…撃退じゃ、話にあわなかった才チ。

とある日
8月20日。

何とかあの2人から逃亡し、買い物タイム。

…もう夏休みに会うことがありませんように…

…武装、どうしようか？

暇になったら読書か本を読むか何か考えるか。

前の2つは同じだって言わないでね。

第壹案・二刀流：悪くない、うん。

その気になれば容易たやすいし、努力してみよう。

第貳案・擲弾銃
グレネードランチャー

…え、グレネードを打ちまくるのって、なんか楽しそうだし。

いざと言つときはチャフから通常時まで使えそうだし。

第参案・機関銃
マシンガン

…弾幕張るの楽しくない？

いけない、思考が恐ろしい方向に…

第肆案⁴・散弾銃
ショットガン

…弾幕要員。

なんか説明が少なくなってる…

でも、やっぱりまずは、『雷雨』のエネルギー供給速度か…

バッテリー使っているのに、あれじゃあ遅すぎる。

と言っわけで、まずは雷雨の効率向上を図る。

…まえに。

この人たち、如何にかしないとな…

「あれ、君一人？」

「おねーさん達と一緒に遊ばない？」

…やかましい2人組だ。

「お断りします。用事がありますので」

「そんなこと言ってないでさー」

「ね、行こう」

…五月蠅い人たちだ。

「用事がありますので」

そう言って、去ろうとしたとき。

「男が偉そうにするんじゃないやねえよ！」

「どんな立場か分かってるの？」

…オー、オコッタ、コワイネー

「あ、じゃあ、自己紹介だけしておきますよ」

柳葉零斗です。

そうだった瞬間、女は去っていく。
恐怖を覚えたような顔をして。

詳しく説明しよう。

『柳葉グループ』は、PC/ISメーカー。

そして一番の業績を誇るのが、ソフトウェアである。

他にもあるが、主な方面はこの3つ。

PC部門ではIntelやAMDのCPUを遥かに超える処理能力、
加えて低価格のCPUを開発。

PCはこの会社が作らなかつたら無くなってしまう様な代物と化している。

IS部門では第3世代型ISの兵器作成をしている、
変態共の巣…ではなく普通に優秀な研究者達の間。案外変態は1人も居なかった。

最近、デユノア社に技術協力をしているらしい。

…前社長、つまりはシャルロットの父は、シャルロットのことで会社を首、

さらには実刑判決となり、そして非常に優秀な社員が新社長となっ

たらしい。

そして会社は技術協力を受けイグニッション・プランにフランスが加盟できることになったらしい。

おめでとう御座います。

ちなみに、IS本体開発もある。此方が本職だが、第3世代の兵器開発の依頼が多い。

ソフトウェア面では、ISの技術をいくらかフィードバックし、どのソフトも使いやすいらしい。評価は99%が満点評価。

…残りは俗に言うアンチだが。

イメージ・インターフェースも応用で使用できているため、ISの兵器作成の技術協力を依頼されている、と言う訳。

他にも、記録媒体面で著しい業績を上げている会社。

…とまあ、こんな所だ。

欠陥製品なんて作ったことが無いらしい。

あと、社会的に抹消する手段もあると言う都市伝説まであるらしい。

ちなみに、ISのデータ提供で現在9桁の貯金となっていたりする。スイスの銀行に。

…なんでこんなことになったのだろうか。

とまあ、柳葉の関係者は企業に守られているが、犯罪が本当だった場合は、助けないらしい。

相手の嘘だった場合、全員が7年以上の懲役になっているとか。
…前科があっても優秀ならば雇う会社でもあるが。

というわけで、そういうのが嫌な人たちはさっさと退散するのである。

余談を戻して
閑話休題

さて、今回購入しに来たのはなんと…

パソコン内部のパーツ。

ソフトウェアは、柳葉秋誠やなぎはあきまことさんが用意してくれるそうだし。
…勿論、金額を払えばだが。

厳密に言えば、注文しに来た、が妥当だろう。

ちなみにこの店、配送サービスまで担当すると言つ優良店だ。
しかも9時から12時まで営業する。

さて、パーツ選びを堪能しよう…

- - - - - 2時間経過 - - - - -

AM 11:05。

購入を済ませた僕は、@クルーズへと向かう。

何故って、ゆっくりとしたいからじゃないか。

学園…朴念仁、人たらし、簪、朴念仁ラブーズの方々…など。

で、戻ったら戻ったで大変そうじゃないか。

しかも、たまたま目に付いたのがこの店だった、と言うオチ。

珈琲を頼み、読書をして待つ。

そして、珈琲が来る。

そのときは、まだ知らない。

面倒なことに、巻き込まれるのを……

「ねえ、バイトしない?」

…何で僕なんですか？

何故か学園に居なくても面倒なことが起きました、はい。

この時、別の店で珈琲を飲んでおけばよかった、と思ったのは余談だ。

Story 041 強盗 (08月20日) (前書き)

PV250,000達成!

ユニーク25,000達成!

作者、何かと喜んでおります。

どうしてこうなった。

12:00

…シャルロットとラウラにばったり出会いました。
しかも同じところのバイト。

これじゃあ、学園から離れて休もうとしていたのに意味が無いじゃないか。

「…と言う訳でね、いきなり2人辞めちゃったのよ。辞めたって言うか、
駆け落ちしたって言うか…」

…お幸せに。

「で、何で3人必要に？」

と聞き返す僕。

「それは、一人風邪で休んでるのよ」

…もう1人、単純な理由だったね。

「はあ」

「ふむ」

「…」

三者三様の答え。

順番的には、シャルロット、ラウラ、僕と言うことは分かるよね、うん。

そして、店長は続ける。

「でもね、今日は超重要な日なのよ！本社から視察の人間も来るし、だからお願い！貴方達3人に今日だけバイトをして欲しいの！」

なかなか面倒そうだね…

ちなみに僕は燕尾服、シャルロットとラウラはメイド服に着替えている。

…店長に釘を刺しておいて正解だった様だ。

だって、そのままだったらシャルロットが燕尾服になっていた可能性もあるもの。

「大丈夫よ、みんな似合ってるから」

「で、具体的には何をすれば？」

…もし接客が仕事内容で

更識姉妹が来たら恐ろしいことになるのは目に見えているため、一応聞いておく。

…接客だったら諦めるしかないけれど。

「接客」

はい即答です。

僕は更識姉妹が@クルーズに来ませんように、と5回念じた。

「あ、あの、もう一つだけ」

そう聞いたのはシャルロットだ。

ん？、と聞き返す店長一（らしき人物）に、シャルはこう言う。

「このお店、なんていう名前なんですか？」

「お客様、@クルーズへようこそ」

.....

「デュノア君は4番テーブルに紅茶と珈琲、

柳葉君は15番テーブルに注文を伺いに行つて」

「わかりました」

「了解」

僕はハン店員が持っているあれディターミナルを持って15番テーブルへと向かう。

「お待せいたしました。ご注文の方はお決まりでしょうか？」

「えっと、こ、紅茶を一つ！」

「わ、私もそれでっ！」

…緊張する事は無かるうに。

「かしこまりました。紅茶が2つ、でよろしいですね？」

は、はい、と言って顔を赤らめる2人。営業スマイルって、破壊力あつたっけ？

.....シャルロット・デュノアの場合.....

「お待たせいたしました。紅茶のお客様は？」
「は、はい」

同年ぐらいだろうか。シャルロットはそう考えていた。

そして男性達は緊張した面持ちでシャルロットに答える。

紅茶と珈琲をお客様に差し出す前に、シャルロットはお店の『とあるサービス』の要不要をたずねる。

「お砂糖とミルクはお入れになりますか？
よろしければ、此方に入れさせていただきます」

「お、お願いします。え、ええと、砂糖とミルク、たっぷりです」
「お、俺もそれでっ」

実はこの2人、無糖派ノンシュガーのだが、今日に限っては、美人メイドに奉仕してもらいたい一心でそう答えたらしい。

「かしこまりました。それでは失礼します」

シャルロットがかき混ぜるときの時々響くかちゃかちゃと言つ音にさえ、

男性客は息を呑んで聞き入った。

「どうぞ」

「ど、どうも…」

紅茶を受け取った男性客は、動作が一昔前の機械のような動きでそれを飲む。

紅茶と同じように珈琲を混ぜてもらった男性客も、ギクシャクとした動きでそれを飲む。

「それでは、何かありましたら何なりとお呼び出してください。ご主人様」

そういつてきれいなお辞儀をするシャルロット。まさに『貴婦人』だ。

男性客はただぼかんとして頷くのが精一杯だった。

……ラウラ・ボーデヴィツヒの場合……

男性客3名に注文をとっているラウラ。

しかし、会話は酷いものだ。

「ねえ、君可愛いね。名前教えてよ」
「絶賛ナンパ中」

「……断固無視」

「あのさ、お店何時に終わるの？一緒に遊びに……」
「懲りずにナンパ」

そして、ラウラはコップを半ばテーブルに叩きつける。

ダンッ！

男達は面食らっていた。その男達を前に、ラウラは冷たい声でこう
いった。

水だ。飲め……と。

「こ、個性的だね。もっと君のことがよく知りたくなっ……」

「」

折角言っている台詞セリフの途中で、注文オーダーを取らずに戻るラウラ。そして、
カウンターで何かを告げて、出てきた飲み物を先ほどの男のところ
へと持っていた。

「飲め」

先ほどより少し軽く、カップをテーブルに置くラウラ。
しかし珈琲は零れ落ちる。

「え、えっと、珈琲を頼んだ覚えは……」

「なんだ、客でないのなら出て行け」

「そ、そうじゃなくて……他のメニューも見たいわけです……」

歯切れが悪いようにしゃべる男。実際、初対面の女子に声をかけら
れるのは

”勇者”又は”阿呆アホ・馬鹿”しかないだろう。

そして、先ほどの彼は間違いなく後者の方だ。

「た、たとえば、珈琲にもモカとかキリマンジャロとか……」

「」

「はっ、貴様ら凡夫に違いが分かるとでも？」

「いや、その……すみません……」

男の言葉を遮り嘲笑を浮かべながら話すラウラ。

「飲んだら出て行け。邪魔だ」

「は、はい…」

流石は、”ドイツの冷水”と言われただけの事はある。

「あ、あの子、超いい…」

「罵られたいつ！見下されたいつ、差別されたいつ！」

DM達の集い。周囲の客もかなり引いている。というか、見てみぬ振りだ。

余談を戻して
閑話休題

「あ、あのっ、注文いいですか？できればさっきの黒髪の執事さんで！」

「珈琲ください！銀髪のメイドさんで！」

「じゃあこっちは紅茶ください！できれば金髪メイドさんで！」

てんやわんや。書き入れ時、とはまさにこのことだろう。

此方も大忙しだが、店長さんが的確な指示を出しているおかげで混乱することは無い。

50%アップ。お昼時の業績は、それこそ物凄い。

2時間ほどお客を捌いたところで、精神的に疲れてくる3人。

…そんな時、事件は起こる。

「全員、動くんじゃねえ！」

銃声が響き、一瞬でパニックに陥る客達。

「きゃあああああ！？」

「（…なんか、面倒だね）」

零斗はそう思っていた。しかし、こんな生身の相手、処理するのは
いとも容易いだろう。

「騒ぐんじゃねえ！静かにしろ！」

零斗は状況を把握しようと物陰で考える。

「（相手は4人。此方は最大3人。

武装としては拳銃ハンドガン、散弾銃ショットガン、短機関銃サブマシンガン、釘打機ネイルガンが1つ。釘打機は安

全装置が

付いていないアメリカ製のようなので、釘を人体に向けて飛ばす可
能性あり。

さらに、C4なんかの爆弾もある可能性もあるし…）」

奇しくも、ラウラも同じことを考えていた。ラウラは爆弾については
考えてはいなかったが、軍人氣質と言うものは、なかなか抜けない
ようだ。

しかし、何か古い。

強盗の服装は20世紀を彷彿させる様な服装。

そして、警察の対応も…

「あー、あー、犯人一味に告ぐ。君たちはすでに包囲されている。おとなしく投降しなさい。繰り返す……」

駅前の一等地。その立地の関係上、警察機関の動きも迅速で、窓から伺える

店外では道路封鎖、ライオットシールドを装備した対銃撃装備の警官での包囲。

「なんか……」

「……警察の対応も……」

「古……」

何かを覚えた数名の客がそう呟く。

「ど、どうしましょう兄貴！このままじゃ、俺たち全員……」

「うるたえるんじゃないやねえ！焦ることはねえ。こっちは人質が居るんだ。

強引な真似は出来ねえさ」

と言うリーダー格。だが、

今日強盗に入ったのは実に不幸だと言うことを、思い知ることになるとは。

零斗はラウラとシャルロットが

動いたら、と言うシミュレーションでどうなるかを考えていた。

銃声も、蚊帳の外のようなようだ。

そして、シミュレーションが終わる頃。

ラウラが氷の指弾を放っている頃。
作者が省いたわけじゃないと説明したい頃。

「あ、兄貴っ！こいつ……」

「うるたえるな！餓鬼1人、すぐに片付けて……」
「1人じゃないんだよね。残念ながら」

そう言ったのはシャルロットだ。

「なっ！？この……」

「あ、こうなるなら執事服が良かったなあ。
執事服なら、思いつきり足上げても大丈夫だし」

そんなことを口にしながら、リーダーの拳銃ハンドガンを蹴り上げ、
その反動で散弾銃ショットガンの男に踵落しかかとおちを叩き込む。

メリッ、と物凄く常人が聞くには生々しいそれが響く。

慣れているレベルではない。簡単なこと……ただ、それだけ。

専用機持ちは『ありとあらゆる事態』を想定した訓練をしている。

候補生であっても、候補であっても、何等変わりはない。
ISの展開が不能な状況に陥ったとしても、状況を打破できるように鍛えられている。

しかし、軍人と一般人では体力に差があるが、この程度の状況なら、無問題だ。

「目標3、制圧完了……ラウラは？」

「問題ない。目標4、制圧完了。零斗は」

「目標2、制圧終了」

手下2名の制圧完了。残るは目標1。

だが、いつ目標2は制圧されたのであろうか？何故か？少し振り返ってみよう。

散弾銃男ショットガンが踵落しを食らうのを呆然と見つめる目標2、こと釘打機ネイルガン男。

その目標2は、後ろから何かを押し付けられ、気絶していたのであった。

何が彼を気絶へ導いたのか？

スタンガン。

誰もが聞いたことあるだろう。

何故、そんなものを零斗が持っていたのか？答えは簡単だ。

ただ単にスタンガンの仕組みをどう『雷雨ライム』に応用出来るか調べよ

うとしたため。

…そこで強盗にあつのは、なんと偶然なのか。
いや、なんと言う不幸—（？）なのか。

そして、男は予備と思われる拳銃ハンドガンを左手に握り立ち上がる。

諦めないぞ、と言わんばかりに。

「ふざけるなあっ！お、俺が、こんな餓鬼共につ…」

刹那、その引き金が引かれ、銃弾がラウラの元へと飛んでゆく。

Story 041 強盗 ～08月20日～（後書き）

GWに付き毎日投稿している今日この頃。

ー昨日投稿できなかったのが残念だが。

まあそこは妥協して、と。

次回『Story 042 解決 ～08月20日～』

をお送りします。乞うご期待！

その弾丸がラウラに飛んでゆく刹那。

ラウラは電光石火のごとく体を捻り、弾丸を回避する。

.....それこそ、最初から決まっていた結末のように。

そして一発で当たらないと確信したらしき男は、目標を零斗とシャルロットに変更し、

次々と発射してゆく。

1発、2発、3発。そして4発、5発、6発と、弾丸が繰り出される。

「（…3点バーストって、厄介だなあ）」

零斗はそう考えながらも、確実に3発の弾丸を回避。

シャルロットの方では、あらゆる障害物、すなわち物陰に入り弾丸を浴びるのを阻止した。

その隙に、ラウラは黒光りする『物体』を拾い、リーダーの男の眉間に突きつける。

それは、一般的には、ハンドガン、拳銃と呼ばれるもの。

それを、何の防御も無い人間に、さらに眉間に撃たれたらどうなるか。

即ち、死、が待ち構えているのである。

「遅い、死ね」

「えっ、ラウラ、待っ……………」

その時、ゴンツ！と、鈍い音が鳴る。

それは、リーダーへの制裁。

しかし、その身に当たったのは銃弾ではなく、拳銃ハンドガンのグリップだった。

「全制圧、完了」

その声は、民間人の方々には、格好いいと思えたことだろう。

民間人には。

「はあ…一瞬びつくりしたじゃない…」

「ただど有効な戦術だとは思う。玄人ヘイジンには対した事は無いけど、

素人には非常に有効で、引き金トリガーを引くのに気の迷いが生じるから」

内心冷や汗だったシャルロットへ、どうしてラウラがそうしたのかを説明する零斗。

そこで。

民間人が状況をかなりゆっくりと、しかし確実に把握し始めようとする。

その人たちの目線は、度々零斗、シャルロット、ラウラを見ていた。

『この人たちのお陰で助かった』と言う様な目線と、

『本当にこいつらがやったのか?』と言う様な目線が交錯する。

しかし、店長はまだ意識が朦朧としている中、ピントが外れたことを考えていた。

『銀髪、金髪の美少女メイドたちと黒髪美少年執事が銀行強盗を撃退しました』

と報告したら、信じるだろうか、と。

もし誰かが今その言葉を聞いたとしたら、ほぼ全員がこう答えるだろう。

そんなのでいいのか、店長?

…まったく何かとずれている店長なのであった。

余談を戻して
閑話休題

様々な人たちに感謝されながらも、3人は困惑していた。

何故なら、公になれば代表候補生2人と柳葉の関係者なら

マスコミがさらに騒ぎ立て大変なことになるから引かなければなら

ない。

ラウラとシャルロットが相談している間に、とある強盗が復活する。

「捕まってムシヨ暮らしになる位なら、いつそ全部吹き飛ばしてやるよ！」

先ほどの一撃は浅かったようで、意識が残っていたようだ。そして、革ジャンを広げた先には――

――プラスチック爆弾。恐らくC-4と呼ばれる爆薬だ。男の左手には起爆装置が握られていて、もうスイッチは押されていた。

が、爆発しなかった。何故か？それは簡単だ。

爆弾は、起爆装置がダミーにすりかえられており、起爆しなかった。それだけだ。

そして、銃を拾ったシャルロットとラウラはその一瞬の隙を見計らい、
信管、それと導線を的確に打ち抜く。

チエックメイト
「詰み」

そう高らかに宣言する零斗。そしてその男には、

「まだやる？」

「次はその腕……いや、眉間を狙ってやるう」

「釘打機ネイルガンで足に釘を打たれるの、一生に一度しか味わえないと思うから、やってみる？」

マゾヒストなら、喜んでやると思うよ？……それとも、肺が良いかい？」

上から……お察しください。

とりあえず、下の2つは死刑宣告だが。

「す、すみつ、すみませんでしたっ！も、も、もう二度としません

っ！だ、だから、い、命だけは……」

事実上の敗北宣言。しかし3人は最後まで聞かずに立ち去る。

それは、強く降ってすぐに止む『村雨』の様に。

それは、黒き疾風のように。

.....

そして。

シャルロットとラウラと別れ、ただ歩いている零斗。

その内心は、事件に本当に巻き込まれたのか？と思うようなものだったろう。

「（HSSが某ラノベと被っているんだよな…意味は違うけど。

だったらいつその事、意味的にも会っている『村雨』で良いじゃないか！）」

…とか。

換算とした裏道を通り、着実に寮を目指す。

その途中、

「…よし、後で武装設計図作成しよう」と

と小さく呟いた。

小声で呟いたそれは、誰もが不審者、と思っても良い物だったのだらう。

だが、その咳きを、誰かが聞くことは無かった。

そして、彼が帰った寮では…

誰かの尋問に精神的に疲労して寝てる、と言っか気絶している姿が目撃されたと云う。

Story 042 解決 〓08月20日〓(後書き)

なんとなく思いついてしまったNG .

シャルロットの方では、あらゆる障害物、

すなわち物陰に入り弾丸を浴びるのを阻止した。

その隙に、ラウラは黒光りする『物体G』を拾い、
リーダーの男の眉間に突きつける。

…よく見ると、それはゴキブリだったようだ。

シャルロットは悲鳴を上げ、リーダーは虫が額に当てられ気絶した。

これでいいの
一件落着？

…なんなんだ、これ？ それと、お久し振り？です。

なんか、閃きって、肝心だよね。

え？何でこんなことを言ってるかだって？

アイデアが今脳内に！

詳しくはいえないですが、現在草案の段階なこれ。

ぜひ実行に移せたらいいなあと、思いつつ、次回予告。

『Story 043 設計 〓08月25日〓』

をお送りします。

乞うご期待！

S t o r y 0 4 3 設 計 〳 0 8 月 2 5 日 〳 (前 書 き)

第 5 0 部 だ 〳 ! !

Story 043 設計 〱08月25日〱

- Side Reito -

あれから5日。

午前9時。

自室にこもりっぱなしだった僕。

実際には、東さんにパッケージ作成依頼していただけだけど。

ちなみに、東さんは僕のISを世代を4 とするらしい。

装甲も「あれじゃあ分離だから、分離装甲ね」とか。

あとは、第3世代兵器のアイデアだね、うん。

…早く届かないかが楽しみである。

ちなみに、ドアには感電するように仕掛けてあったので、誰も侵入者は来なかった。

大丈夫だ、問題ない。

ドアの装置の電源を切り、誰も居ないで、と願いながら、その扉を開ける。

目の前には更識姉妹。

…これって、不味いよね。

と思いつながら逃げようとすると、姉妹に腕をつかまれて逃げられな

かった。

- Side Out -

零斗は2人につれられていた。

何故なら、5日も出なかつたんだから心配させた罰として何かおこ
れ、

だったためおこらざるを得ない状況なのである。

と言うわけで、外出許可、いや、食堂へ向かう。

「…で、何か用ですか？」

「いや、別にいいじゃない。恋する乙女は盲目なんだから」

はあ、と溜息をつく零斗。その胸中は、

(いや、アンタ乙女って恥ずかしくないのかよ…)
に違いない。

「はいはい。で、簪の事で頼みたい事があるんだよね？」

「…なんで、分かるの…」

そこは推理力の応用でしょう。きっと。と言って、零斗はさらに付
け加える。

「だって、2人そろつての頼みごとでもなかつたら、どちらか1人
で来るでしょ？」

と、なんとなくからかってみる零斗。

2人は、片方は焦りを隠しきれていない。もう片方は、真っ赤であ

る。

そして、赤くなっている簪は、急に何かを頼みたそうだ。

「妹をお願い！」

「簪の何を？」

「簪ちゃんの、機体を」

「…それ、給料は？」

実は武器の修復、実弾の製造やパソコンパーツのため貯金が6桁に減ったとか。

ちなみに修復が減ったとしても貯金が9月には5桁になる可能性が大。

柳葉のテストパイロットとして正式登録されるのは10月。

イコール給料は10月からで金欠確定なため零斗は大変なのである。

「ん〜、ざっと100万。ちなみに簪ちゃんを柳葉のパイロットにして、

そして零斗君が生徒会に入るなら200万よ」

その金額はのどから手が出るほど欲しいだろう。

特に今金欠状態の零斗には。

「よし、引き受けよう。あ、勿論簪のためでもあるからね」

それを聞いた生徒1名は、顔を再び赤らめたと云う。

.....

「よし、じゃあ整備に取り掛かるうか」

「…う、うん」

此処は第2整備室。

何故いるかって？

だって、簪の機体整備のためだから。

.....

零斗はコンソールを呼び出し、機体の方を確認する。

簪のIS『うちがねにしき打鉄式』は機動に特化したISだ。

「で、どうすれば良い？」

「…機体は完成してる…けど、武装がまだ…」

「了解。で、火器管制システムから手を付けていくよ」

何か普通にすごい事を言った零斗。だが簪が反論しないわけがなく、

「火器管制システムは…私が、やる…」

当然の結果である。しかし零斗は、

「いや、僕がやった方が早い。だから、僕に任せて」

…なんか一夏に言わせるとノクーン送りになりそうな台詞だ。

と言うわけで、簪は武装データ、

零斗は火器管制システムの組み上げへと移ったのであった。

一方、簪の方では…

…格好、良い…

簪はそんな事を思いながら、武装の完成を急いでいる。

しかし手は、動いたり止まったり。

…そんな事をするのは、10代の特権である。

とかになっているそうだ。

- Side Out -

「（火器完成システム。
これは…マルチ・ロックオン・システムを使つての
最大48発のミサイルをどう飛ばすか。
用はパターン化して使えつてことだね、うん。」

零斗がこんな事を考えているうちにも、画面上では高速で文字がスクロールしていく。

いったい何故か。それは、インカム型思考入力装置。名を『あまぎり雨霧』
と言つ。

…どんだけせこい入力装置といわれようが、作ってしまったものだからしょうがない。

そう考えているうちにも、高速でスクロールする。

零斗は、シミュレーターでの実験後、マルチ・ロックオン・システムを使用する

『やまかぜ山嵐』に搭載するらしい。

- Side Reitor -

…さて、どうしたものか。

ついさつき、Ver0.01の組み上げが完了した。

え？0.01の訳かい？

バージョンだからに決まってるじゃないか。

と言つわけで、次はシミュレーターを組み上げよう。うん。

入力開始。

0%から始まる入力。

僕は第3世代兵器について考えていた。何しろ、アイデアを…と、変態じゃない優良研究者が屍のように現れたので、毎日考えている。

B Tやら空気砲やらA I Cやらマルチ・ロックオン・システムやら
ナノマシンやらは

国際問題に発展するからパス。

つてな訳で、イメージ・インターフェイスを活用した何かできない
かなあ…

50%完了

…そういえばよく進行度合が分かるようになってるよね。
部分ごとに表示できるようにすればもつといいのにな…

その瞬間、僕の脳内に何かが駆け巡った。

閃いた。早速研究者達に連絡しないと…

- 75%完了。このまま中止しますか？ -

Y e s / N o

答えは勿論NOだ。

ここまで来て、中止なんかできないでしょ。

わして、と。

最後までくらはいは集中しないとね。

- - - - -

100%完了。シミュレーターを起動します。

やっと終わった。

ちなみに、シミュレーター上では軌道変更も可能にしてしまったらしい。

まあ、便利と言えばそうなんだけど。

パターンを後4通りぐらい作りますか。

- - - - -

時刻は17時。

すっかりパターンを組み上げるのに熱中し過ぎたようだ。

ちなみに、できたパターンは500通り。

さらに、ランダムでセレクトできるようにホーミングなっているため、

500通り覚えると言つのは無理。だが、結局追尾ホーミングするため問題はない。

- Side Out -

「終わったよ」

「…あつ、ありがとう」

「どづいたしまして」

じゃあ、明日テスト飛行しようか、と付け加える零斗。

「…う、うんっ！」

そこには、仲の良さそうな2人を見ている生徒会長がいたのだとか。

.....

1時。

ほぼすべての生徒が寝静まっている時間。男子の織斑一夏も、その中からは漏れない。しかし、零斗は眠っていなかった。

「あ、束さん？」

「お、れーくんではないか。で、何か用？」

そう、篠ノ之束に連絡しているのだった。

「そうそう、ISの武装パッケージ、正確には武装を作っ
て欲しいんだけど…」

「まっかせなさい」

「設計図は一応完成してるから、送っておくよ」

「りょーかい」

武装を作ってもらいたい。こっちは材料がないからだろう。
おそろく。

「で、東さんからは何かある？」

「ない」

了解。じゃあ切るよ、と言って電話を切る。

零斗は武装がうまくできるか楽しみにしながら、夜は更けていった。

Story 043 設計（08月25日）（後書き）

50部突破————！！

と、何故か叫んでみる。

100部まで折り返しとなりましたな。

…3月のペースが恐ろしかったから100部は9月ごろだろうか。

次回、『Story 044 稼動（08月26日）』を
お送りします。

乞うご期待？

Story 044 稼働（08月26日）（前書き）

どうもです。

GWはどこかに出かけていた、もとい、暇つぶし。

（そして今回はなぜか作風が若干変わっているお話）

オリスト案が着々と実装段階へと上り詰めています。

8月26日。

IS 『うちがねにしき打鉄式式』 稼動実験。

まだ機体の最終のプログラミングが終わっていないそれを、動かすのにはどうか？と

問われると、唸ってしまう。

かと言って、動かせないのか？と聞かれても、ただただ唸る他ない。動かせないわけではないが、動かすのには不安要素もある。

中途半端だ。いつその事没か、はたまた完成まで持ち込むか。

……そうになると、当然完成の方まで持っていきたくなる。

しかし、時間がない。

夏休み中にテスト飛行、そして不具合を見て、そこを修正するという計画だ。

しかし、未完成過ぎるのではないか？

しかし、スケジュール予定通りにするには、この日しかないだろう。

……夏季休暇の課題だつてあるわけだし。

と言う訳で、現在、第6アリーナへと向かう。

第6アリーナは、高速機動を練習する場といえればお分かりだろうか？

『キャノンボール・ファスト』の調整にも用いられる。

僕はそこを指している。いや、もう着いた。

ドアから圧縮空気が抜ける音がして、それからドアが開く。

「待たせたね。それじゃあテスト飛行をしようか。」

そこには、簀が待っていた。

.....

「まずは展開をしようか」

僕はピットでデータ取得のため待機していた。
ノートパソコンを学園の端末に接続しているため、ここでもデータ
取得は可能である。

「…う、うん」

簀はISを展開し、個々の状態をチェックする。

ちなみにこの試験飛行が終了した後に、稼動データとして使用はし
ない。

システム面が完成していないからだ。

……システム面が完成後、試験稼動、稼動サンプル取得は
するけれど。

「PICが反転…」

現状では、本当に試験的な要素しか含まれてはいないだろう。

只、システム面が未完成の機体での試験トリアルデータが取得できるので、
そこはかるうじてプラス要素であろう。

しかし、どんなISでも、不慮の事故は当たり前だ。
特に、未完成の機体なら、

今、こちらに向かって降下する『打鉄式』は、徐々に速度を上昇
させている。

危険だ。

僕はそう直感した後、ISを展開し、『村雨』を使用し簷の元へと向かう。

地上に向かって高速で落下するISを安全な状態にさせるには、スラストの逆噴射により上昇するか、速度を落として追突するかだ。

少なくとも僕には、この2つしかない。

もし打鉄式式を抱え込んで、『村雨』を使おうとするならば、即座に打鉄式式は鉄屑と化してしまうだろう。

打鉄式式にゆっくりと近づき、それを抱き込み、上昇しようとスラストを吹かせる。

速度としてはゆっくりと減少しているが、間に合うのか不安だ。

高度100m、
速度150km/h。

下手をすれば地獄のカウントとなりうるそれは、確実に迫る。

下手をすれば地獄のカウントとなりうるそれは、確実に減少する。

高度50m、

速度100km/h。

ただ、それは、じっくりと近づき、じっくりと遠ざかる。

高度25m、

速度50km/h。

ここまで来れば大丈夫だろう、と思うと、事故に繋がる。
…そんなことを防ぐ為、スラッシャーに無理を言わせる。

高度1250cm、

速度10km/h。

そこまできて、スラスターの逆噴射を弱め、地上へ向かう。

今、ようやく着いた。

そして、ゆっくりと地に降りる。

ここで待っているのは、反省会。

「僕が試験飛行を急いだばかりに……ごめん」

「……」

「お詫びに、午後からデートでも行く？」

「~~~~~!!」

そこには、からかって楽しむ1人の少年と、その思惑に見事にはまり顔を赤くする少女と、本気で気配を消す1人の少女がいましたとさ。

「じゃあ、正門前に1時集合で」

そう言って、立ち去る僕。

しかし、簪は

「…逃げられた…」

と言いつつも、先ほどの言葉を思い出しにやけ顔をする簪。

さぞかし、彼から誘われたのが嬉しかったのだろう。

しかし、零斗は知っているが、簪が知らない事実があることを、簪はまだ知らない。

…もし気配を消していた少女に気づいていたら、幸せな午後となったことだろう。

Story 044 稼動 〓08月26日〓(後書き)

割り込み投稿って50話超えると数字で入力する様になるんだね。
…初耳だぜい。

第6アリーナにもピットあるよね、きつと。

そしてオリジナルストーリーは5巻からだぜい。
一夏と楯無さんのエンカウントはやるがな。

…って、そろそろだね。

大丈夫だ、学園祭はやる。

…いろいろお騒がせしてすみません。
次回、『Story 045 逢引 〓08月26日〓』となりま
す。

乞つご期待!!!

Story 045 逢引 (08月26日) (前書き)

書いている時点で総合評価333pt。

…東京タワーじゃあるまいし。
1000の1/3だね。

…1000ptなんて、無理だろうけど。

Story 045 逢引 〱08月26日〱

… 幸福な時間は唐突に終了するものである。
歴史の偉人が発言したものではないが、非常に納得できる内容でもある。

その言葉を、更識簪ちやうしきかんざしは思い知ったのである。

何故か？時を少し遡ひかのぼる事、約10分。

Story・045 逢引 08/26

12時55分。

8月も終盤に差し掛かってきてはいるものの、暑さはまだ続く。
それも、世間一般では、猛暑日と言つそれを簪は体感していた。

… 暑い。

38度。

ヒートアイランド現象によって生じたそれは、誰であろうと、その

気温はさぞかし暑かっただろう。

だが、そこにぽつりと立っている少女には、その暑さを忘れかけるほど、

楽しみなことがある。

そう、思い人、柳葉零斗とのデートである。

楽しみだった。最高潮に。

しかし、彼女の登場により半減する。

「ちゃお」

そこに現れたのは、柳葉零斗……ではなく、姉の、更識楯無であった。

現在、12時57分。

彼が現れたのは、その1分後だった。

そして、今に至るわけである。

ちなみに、お姉ちゃんが『手つなごうよ零斗君』と言ったのを皮切りに、

私も、『私も…て、手、繋いで…』と言ってしまった。

こうなると、凄く恥ずかしい。

でも、このアドバンテージをお姉ちゃんだけに与えないで良かったとも思っている。

.....

はあ…

現在、IS学園から離れて、早10分。
4 駅先、東京駅に到着。

(作者注 この次に投稿する内容にIS学園の位置情報(捏造)を掲載するため、それに準拠しています。)

そして『レゾナンス』に到着。

だが、そこで問題が。

僕は何故か、と言うか必然的に男性に睨まれている。

原因は1つしかありえない。

左側に簪、右側にたっちゃんがいる、まさに両手に花状態が1つ完成。

これでは、誰からも睨まれるだろう。

…なんで一夏は5人の好意に気付かないんだろう？

そんな疑問を抱くが、今はその疑問は解決しようがない。

今は、更識姉妹との時間なのである。

ちなみに簪が行きたい所へ向かっているため、某DVD販売店へと向かっている。

…何処とは言わないが。

で、簪は非常に楽しみにしていた。が、そこにたっちゃんが乱入してしまったため、

ご機嫌斜めのような。

僕も若干気付いていたけど本当にこの人だとは思わなかったため、言わなかったので僕にも負い目はある。と信じたい。

そしてたっちゃんが行きたい所は、将棋用品販売店らしい。

…どんなのを買うのかは知らないが。

とにかく、簪は乱入されたためご機嫌斜め、たっちゃんは乱入できたので上機嫌と言っ

不思議な構図になっている。

付け加えると僕が行きたいのはお決まりのパソコンパーツ販売店
為、
3手に分かれる事態になる。

待ち合わせ場所を指定した後、3手に分かれた。

と言うわけで、現在は単独行動である。

というか、パソコン販売店漁り過ぎと言うのは突っ込まないでほ
い。

だから金欠になるんだよ、と言う突っ込みもしないで欲しい。

来た理由はノートパソコンがダウン。

5年前から使用しているため、寿命と考えてもいい事態。

と言うわけで、漁りに来たわけである。

ここは家電量販店とは違い、デスクトップやノートの上位機種も販
売していて、

さらにケズデキのような5年保障も付加されているのでいい店
である。

そして、前にも紹介した配送もあるので、とても良い店である。

と言うわけで、ノートパソコンの実勢価格の下見、良ければ購入ま
でする気である。

実勢価格としては…1000(契約縛り)・50,000〜200,000円、と言ったところだろうか。

200,000円なんていうのは、ゲーム用などと謳われている物だ。

だが、実際には、デスクトップパソコンのゲーム用の方が遙かには行かないが、結構安いいため、そちらの方が良い。

…だが、実際にはBTO、つまりはオーダーメイドであり保障も少ないものが多いので、
そういうのが不安な方はN Cとか富通とかを利用すれば良い。

閑話休題

と言うわけで、製品を絞込むために価格帯を1000,000〜150,000円に限定する。

その中で、高性能、尚且つ保障が良いものを選ぶ。

これだ。

選んだノートパソコンは持ち運ぶ機種にしては高価格だが、高性能、尚且つ保障が良いものなため選んだものだ。

ノートパソコンを決めた後、次に、冷却機構を用意する。

これは即決まったため、店員に話しかけ、購入へと移る。

その他諸々のものも購入したため、合計は…

「250,000円となります」

…何も聞かないで欲しい。

さらに言えばそんなに何を買ったんだとも聞かないで欲しい。

そして、僕はクレジットカードを出し、会計を済ませる。

余談だが、現在の口座の貯金額は5桁となった。

暫くは、節約が必要だ。

時は変わり、待ち合わせ場所。

丁度3人同時に集まった。

どこにいこうか、などの談笑をしつつ、向かう先は喫茶店。@クル
ーズではない。

そこで、僅かながらの談笑と、休憩をして、寮へと戻った。

僅かとは言っても、1時間ほどは居たが。

零斗たちが帰ってきて暫くしてからの寮では。

…今日は2人きりじゃなくて残念だったけど、もし2人きりだったら…

とか考えている少女だったり、

うーん、今日は乱入できたからいつかとか考えている少女がいたと言う。

誰がどうなのかは、推測にお任せしよう。

そのころ、零斗はと言うと。

「あ、夏季休暇の課題忘れてた」

とか何とかで急いでいたりしたとか。

前の武装開発のように8月が終わるまで出てこなかったのだから。

Story 045 逢引（08月26日）（後書き）

ヒートアイランド現象は、IS学園の周辺は都市と推測してのもの。

最初の『幸福な時間は』はオリジナリティ溢れる（？）造語。

…なんか、小説とかのタイトルでありそうだけど。

そして今回、何故か長かったよね、きつと。

…最近愚痴ばかりだね。

次回予告。

『Section・07』を開始いたします。

『Story 046 転入（09月01日）』となります。

乞うご期待!?

の前に、

『Setup 004 学園』を掲載します。

Story 046 転入（09月01日）（前書き）

とりあえず捏造の位置。

位置情報

日本語に訳すと『虹の橋』より北側に位置。
と言う捏造設定にでもしておきましょう。

交通アクセス

モノレール。某空港を目指すモノレールを延伸したもの。

駅を置くとすれば、駅がある順に、

IS学園前（捏造）

某空港から 浜松町 新橋 有楽町 東京 神田 秋葉原 本郷3
丁目

飯田橋 早稲田（東京メトロ東西線側） 東新宿 新宿（終点）

：いろいろ通るね。学校近くとか電気街とか新幹線の駅とか。
四ツ谷とか通って新宿行けなんて聞こえない。

IS学園前行きは12分に1本程度で。

某空港行きモノレールの間隔が3分と仮定して、4本に1本。

Story 046 転入 〱09月01日〱

始業式。

重要なのは夏季休暇の課題が無事終わったことや、先生の話聞く
ことでもなく。

今日、来るのか…

誰かと聞かれると、転入生。しかも、確実に知り合い。

…三角が四角になったりはしないけれども。

教室では - - - - -

「ねえ、聞いた？」

「何の話？」

「今日、転入生が来るんだって！しかも2人！！」

1人くるとは聞いてはいたが、2人来ると言うのは初耳だ。
そもそも、女子の情報網はどうなっているのか？

「えー、どこのクラスに？」

「どっちも3組だって！」

…情報網の大元の人って凄いな、と思いつつながら、読書タイムである。
その噂を気にしていない様に見える為。

余談だが、本の内容は脳にきつちりと入っている。

「なあ、零斗」

其処で話し掛けてきたのは、織斑一夏であった。

「ん…何？」

「転校生ってどんな奴なんだろうな？」

「それ、前も言ってた気がするけど…」

「零斗の言う通りだ」

「零斗さんの言う通りですわ」

そんな声が、同時に聞こえた。

箒とセシリアだ。そして、その後からも。

「そんなに転校生が気になるの？」

「シャルロットの言うとおりだ。…第一、一夏は私の嫁という自覚が足りん！」

「なっ、何言つのよラウラ！」

そうして口論になる5人。と言うか鈴、いつ1組に侵入した。

とりあえず、目の前に千冬さん改め、織斑先生がいるので、

目で謝っておく。

…しかし、当の5人＋一夏は織斑先生の存在に感じていないらしく、

まだ口論を続けている。

織斑先生のこめかみがピクツ、と動く。それを目撃したため念の為
耳をふさぐ。

出席簿が舞う。

パン！と軽快になるそれは、6回鳴り響いた。

「煩い！さつさと席に着け！鳳^{ファン}は、さつさと2組に戻れ！」

…千冬さんの怒号は、今日も廊下に響いたのであった。

.....

所変わって、食堂。

始業式諸々は午前中で終わるので、その後は自由なのだ。

ちなみに、一夏はいつもの5人、僕はお決まりの2人と昼食をとっていた。

「で、その転校生とやらはどうなの、零斗君？」

少し考えた後、その転校生について説明する。勿論、僕の知っているほう。

「…そうですね、京言葉で話す日本人、とでも申しておきましょうか」

「…もう、1人は…？」

其処で聞かれても、分からない物は分からないので、正直に答えておく。

「分からない」

「…そう」

「で、零斗君は何で片方のことを知っているのかな？」

「知り合い。日本に帰ってきて簪と会った時があったでしょう。そのあと京都に行ったときに、面識が一度だけ」

「……なにせ、”高橋”が苗字だったころの従兄妹らしい。」

「…」

その言葉に2人とも沈黙する。

多分、どちらも『従兄妹なんて聞いてない!』と思っているのだろう。

「大丈夫です。そんな明確に覚えているわけじゃ無さそうだから…」

その言葉を遮る様に、1人の少女が現れる。

「久しぶりだね、零斗」

「あっ…シオン?…」

以外にも反応したのは、簪だった。

「そっよ」

そこには、転入生の1人――――菱垣シオンひしがきが立っていた。

だが、読者諸君、これだけは忘れないで欲しい。
フラグなんて立てていない。

――――

「…ほして、日本代表候補生になった訳それで」

「……………簪、知ってた？」

「…うん」

簪のさっきの反応と、シオンが日本の代表候補生だからとは思っていたが、

本当に知り合いだったとは。

世間って、案外狭いものだと言感した。

「で、そちらの方は？…簪と似てるから、簪のお姉はん？」

「ええ。更識楯無よ。気軽に楯無かたっちゃんって呼んでね」

「じゃあ…楯無はなくても呼びますな。あと、零斗は狙ってへんから安心してください」

「「へ？」」

2人が驚きの声を上げる。

例え従兄妹であっても、そういう感情は存在するから、
と言うような勘違いでもしてたのだらう。

「はは…」

笑いが思わず零れる。

この時間が、いつまでも続けばいいのに、と思いながら。

「あ、そうそうシオン」

「何？」

「もう1人の転校生って、どんな人？」

「「!!」」

2人が思い出したかのように、驚いた表情をする。
もし、何でこのタイミングで?と聞かれたら、

「だって、1番手つ取り早いから」

で済むだろう。

「じゃあ説明するよ。名前は、Amano・Napier。^{アマノ}
イギリスの代表候補生らしいよ。専用機も持つとるらしいし。^{ネイピア}
その他、詳しい経歴は分かれへんけど、とにかく無口。
あたしが知ってるのは、それくらい」

「ふうん……」

「へえ……」

「……」

三者三様。

だがしかし、皆少し警戒している。

その辺りの空気は、少し冷えたようだった。

.....

「生徒の呼び出しをします。1年生、柳葉零斗君、柳葉零斗君、至急第1アリーナに来てください」

あれから。

昼食時の会話はどこかぎこちなくなり、気がつけばその会話も、食事も終わっていた。

そして。

部屋に戻るつする所へ、今の放送である。

一体なんだろうかと、第1アリーナへ向かってみると。

織斑先生がいた。

「なあ柳葉、お前宛に束から手紙と荷物が届いているんだが…これは何だ？」

「恐らく、一式パッケージ装備だと思っんですけどね

…その手紙を読まないで判別できません」

そして、その手紙にはこう書いてあった。
…読みやすいよう漢字に直しておく。

「れーくんへ

この前頼まれた装備、パッケージ『コンスタント・レイン降り続く雨』として送ったよ。
この手紙を読んでもるってことは、もう着いたんだね。
じゃあ、パッケージの内容物を公開しようではないか！

とりあえず、全部名前は（仮）だから、使うときに名前は決めてね

ジャミング・グレネード
妨碍の擲弾

なんと！東さん特製グレネードとグレネードランチャーだよ！

メカニカル・アーティフィシャル・エッジ
機械仕掛けの人工刃

普通の刀じゃ物足りないからチェーンソーの機構を搭載する刀！
展開装甲の技術使用だよ！

後は…マシンガン（仮）とショットガン（仮）が入ってるよ！

東より

…武器、詳細が無いのか。
と思いつつも、全部要求どおりにできているのでたまったもんじゃない。

ちなみに、現在絶賛量子変換中である。
インスタール

量子変換終了。

見事にかかった時間は6時間。

武装の説明でもしうか。

グレネードランチャー改め『俄雨』。

見た目はXM25 IAWSの大型版。

グレネードは：対IS榴弾、散弾、フレシエツト弾、焼夷弾、妨害用なのか、チャフ、フレア、発煙弾、閃光弾。

メカニカル・アーティフィシャル・エッジ
機械仕掛けの人工刃改め『タ立』。

モスーハターポーブル2ndGの機神双鋸の片割れ。
それが刀状に変形するようになってる代物。

マシンガン改め『梅雨』。

軽量化済みマシンガンだった。

ショットガン改め『大雨』

こちらも軽量。

とまあ、こんな具合な武器を見て、ふと思う。

剣が魔改造されすぎじゃないのか？

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

食堂からの帰り。

奇遇にも、いつもの5人はおらず、一夏と会話しながら部屋に着いた時だった。

ドアを開ける。

「ご飯は済ませたようですよ…お風呂にしますか？一緒にお風呂に入りますか？」

それともワ・タ・シ？」

僕はその言葉に即反応し、「ごう返す。

「じゃあ簪に告白してきますね」

一夏も驚いていたが、ショックを通り越して魂が抜けそうなたったやんが、そこにいた。

「え…ど、どっして…」

「冗談ですから、泣かないで下さい」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「引っ掛ったわね、零斗君」

「…もう、いやだ」

主導権を握ろうと思ったら、むしろ握られていたのであった。

「一夏、気をつけろよ」

そんな僕の声が、虚空に響いた。

Story 046 転入 (09月01日) (後書き)

今回から京言葉へと変換するサイトを使用しています。
ちなみに、ルビを京言葉の上に振るので心配は無し。

次回、『Story 047』
乞うご期待

…ROBOTICS・NOTES気になるなあ。

9月3日。

転入生の噂が、少しずつではあるが着実にさめ始めてきた頃。

しかし、その噂は、また大きくなって広がる。

2学期初の実践訓練。

それは、1組と2組での合同訓練だ。

ちなみに、別のアリーナで3組と4組の合同訓練も行っているようだ。

一夏と鈴が戦っている頃、零斗もまた、セシリアと戦っていた。

今回は、コンスタント・レイン新一式装備の試験運用的側面も兼ね備えているが。

ふと思ったのは、『時雨』とほぼ同じ大きさの『夕立』の何処にチェインソーの機構を取り入れることができたのか。

まったく持って謎なのだが、束さんならやりかねない。

そう思わないと、そもそもISをどう作ったのか、に行き着くため、諦める他無いのだ。

「戦闘中に考え事は命取りですわよ。零斗さん」

『^{リニアガン}長雨』の命中率が落ちているのを察してか、忠告をするセシリア。

「そう？考え事の内容によっては相手の足元を掬えるんじゃない？」

そう言っただけで見た所で、武器を換装し、『時雨』と『夕立』を手に持つ。

その持ち方は、逆手二刀流。

『冥月流』を教わる際に、覚えた二刀流の1つ。

その名を、『新月式二刀流』と言う。

初めて見せるその戦い方に、^{スタンス}驚きを隠せないセシリア。

「な、な、何ですのそのスタンスは！？そんな持ち方、今まで一度も見たことがありませんでしてよ！？」

隙アリ。

そう直感した零斗は、すぐさま相手の後ろに突き抜けるように潜り込んで進み、

逆手ならではの持ち方で、『時雨』の斬撃をブルー・ティアーズに食らわせ、

さらに体を捻り、『夕立』を^{チェーンソー}機械刃に変形させ、ダメージを与えてゆく。

チェインソーの刃は、小癩こしやくな真似をするかの様に、機体ブルー・ティアーズにじわじわと、しかし確実にダメージを与え続ける。

そこに、『時雨』での、逆手状態から順手へと持ち替えた状態での突きを浴びせる。

片側が『順手』で、もう片方が『逆手』となっている。

冥月流の『半月式二刀流』だ。

これは、冥月流に限れば、扱いこそ難しいものの、使いこなせば非常に有利な二刀流。

2つの『刀』が交錯せず、目標のみに斬撃鎖鋸と、突きを浴びせてゆく。あつという間に、ブルー・ティアーズのシールドエネルギーが削られ、それが尽きる。

ブザー音が鳴り響き、宣告される。

「勝者、柳葉零斗」と。

.....

一方その頃、3組と4組の合同訓練では.....

「こうして戦うのは初めてだね、簪」

「…うん」

菱垣シオンと更識簪が試合を始めようとしていた。

簪はシオンのISを何度か見たことはあるが、第3世代兵器は未だに出していない。

しかし、訓練では候補性相手に必勝。

だから、どういつ武器を使うのかはよくわかる。

近接武器単一^{オンリー}。

簪は一度だけ、何で銃火器類を使わないのか、と聞いたことがあるが、

返ってきた言葉はこうだった。

「………だって、実際に、相手に”命中し^ちとる”感^{めい}覚があるから。」

それに、銃火器じゃ、命中していても、当たったと言う感^{めい}覚が無いし。

その言葉に、当時の簪は驚いた。

日本代表候補生の中で、一番の成績を誇る彼女が、感^{めい}覚を重視している、と言っ^いことに。

だからこそ、一番になれたのかも知れないが。

だからこそ、近接武器しか使わないと断言できる。
だったら、遠距離から徹底的に狙えばいい。そう思っていた。

「開始！」

そう宣告された瞬間、簪は間を取る。

しかし、シオンは簪のその行動を見て、不敵な笑みを浮かべた。
そして、その口元は、こういつているように聞こえた。

『あたしはまだ、このISのすべてを見せておらんよ』

その刹那、後ろから槌矛メイブでの打撃を受ける。

簪は動揺する。

なぜ今遠距離を保って前にいる相手が、後ろから攻撃するの？と。

その隙を突こうと言わんばかりに、連続での打撃が入る。

その攻撃により簪は少し冷静さを取り戻し、前進と方向転換を行う。
思った通りに、後ろにはIS『連雀』を装備したシオンが槌矛を持
って立っていた。

「…やっぱり…何で？」

その声には、様々な感情が込められていた。

「後でおせてあげるよ。^{教えて}そやし、今は戦闘に集中！」

そう言っつて、シオンは間を詰める。

刀での斬撃、突き、^{メイス}槌矛での打撃と、繰り出される攻撃。どれもが命中している様に見える、簪は焦る。

しかし、実際にはほぼ命中していなかった。

簪がその事実に感付いたとき、シオンは^{メイス}槌矛での強力な打撃を浴びせ、

試合は終了した。

「試合終了……勝者、菱垣シオン」

……

「……で、何故か前方に見えたはずのISが後方にいたか？」

「……うん」

「それは……デゴイじゃないかな？」

今、食堂にて零斗と簪が今日の訓練の際の意見交換中。

簪も他国の代表候補生の実力を詳しくは知らない。

そして、零斗もまた、シオンの実力を知らない。

まずは、シオンの情報収集から行うことになった。

そこで、先ほどの実践訓練の意見交換、と言っ訳だ。

「…デゴイ？」

「そう、デゴイ。…でも、どうやって欺いたのかはわからない。だから、放課後までに考えてみるね」

「…うん」

気が付けば、午後の実習の開始時刻が刻一刻と迫っていた。

「じゃあ、また後で」

簪にそう言い残し、零斗はその場を去っていった。

.....

「やっぱり無駄に広いもんだ」

「そうだね。じゃあ、先に行ってるよ」

「ああ」

ロッカールーム。もともと男子が使うことなど全く想定していなかったもので、

3年間のみ男子専用としてしまうとやはり広い。

零斗が先に準備を済ませ、一夏だけが更衣室に残された。

そこに、不幸が重なる。

|||||

突然だが、

”自分の目の前が真っ暗になった”
と言われたら如何する？

俺は、そんな事は無いだろう。
そう断言出来た。ついさっきまでは。

こう言ったら、何処かの捕獲と育成をするゲームで初の敗戦としか
聞こえないが、
実際に”目の前が真っ暗”になってしまった。

本当は、手で目隠しされたからだが。

俺が少しの間ぼーっとしていたその時、声が聞こえた。

「だれだ？」

背中から聞こえる少し大人びたその声は、まさしく生徒会長、更識
楯無の物だった。

|| || || || || || || ||

「生徒会長さんですか？」

「はい、大正解」

取り敢えず可能性のある人を言ったものの、実際にその人だとは思わなかった一夏は、思わず後ろを向く。

「引つかかったなあ」

指で頬を押される。

扇子には、何故か”成功”と書かれていた。

一夏がどう対応をして良いのか困っているのを尻目に、楯無は言葉を紡ぐ。

「それじゃあね。キミも急がないと、織班先生に怒られるよ」

「え？」

一夏は壁に掛けられた時計を見る。その途端、一夏の顔色が変わった。

その時刻は、何時の間にか授業開始前ではなく、授業開始から3分が経過していた。

「だあああっ！？や、やばい！不味い！」

一夏が元凶更識 橋無の人物の方を見ても、一夏以外は誰もいなかった。

「遅刻の言い訳は以上か？」

やはり教師だからだろうか、自分の弟にも容赦ない。

「い、いや、あのですね… 生徒会長さんに話し掛けられて…」

「ほう。織斑、お前は授業より会話を優先させる奴だったか」

そう言っつて、千冬は零斗の方を向く。

「…そうだ、柳葉」

「何ですか？」

「いや、汎用の銃器の扱い方を復習してもらつた為、実演を頼む。的はコイツで構わん」

千冬さんが指を示したのは一夏であった。

一夏は困惑しているが、零斗は死刑宣告を一夏に言い渡す。

「了解」

たった2文字の言葉だったが、一夏は酷く頂垂れる。

ちなみに、零斗のISでの汎用銃器は突撃銃アサルトライフル、機関銃マシンガン、散弾銃ショットガンだ。他の銃器については、零斗は何か企んでいるようだった。

「あ、織斑先生」

「なんだ、柳葉」

「明日の実習は、ラビット・スイッチ高速切替と、他の銃器の扱い方についてと、レールガンとリニアガンの違いについて、お願いします。あ、的は一夏で」

そう、企みの内容とは、嫉妬しているであろう若干5名に反撃のチャンス機会を与えることだった。

「よし、いいだろう」

その企みは見事成功し、再び項垂れる一夏。

しかし、シャルロットは明日の実演で一夏をどう攻めるか考えているらしく、

笑顔が天使の微笑みから残酷な天使のそれになっていた。

「じゃあ、まずはアサルトライフル突撃銃から実演したいと思います」

.....

.....

.....

.....

「ぎゃあああああー!!」

今日の午後の校庭には、悲鳴が数十回木霊した。

.....

放課後。

一夏を復習と言つ名目で狙撃してすつきりした零斗は、簪とシオンを待っていた。

デゴイについて聞く為に、だ。

「...お待たせ」

「待たせたね、零斗」

気が付けば、すぐそこに、簪とシオンが立っていた。

「シオン、単刀直入に聞く。実習で使っていた、デゴイの仕組みは？」

「それより、あたしのISから説明するよ」

そう言って、シオンはISの説明を始めた。

Story 047 夕立 ～09月03日～（後書き）

2週間程のブランクを経て、ようやく帰ってきました。

大事に至らなくて本当に良かった。良かった。

けれど、中間テストが迫り、結局忙しい今日この頃。

次回、27日以降に投稿。

『Story 048 連雀 ～09月04日～』の前に

『Setup 004 連雀』を投稿。

乞う御期待!!

Settings02 連雀 〈随時更新〉（前書き）

日付の代わりに4文字で入る言葉を探していたら、随時更新がぴったりだった今日この頃。

現実逃避が大好きになってしまいそうな今日この頃。

…今回はオリキャラとそのIS解説です、はい。
2人分ね。

（注 随時更新なので未公開の部分がありますが気にせずに。

Settings 02 連雀 〈随時更新〉

菱垣ひしがき シオン

IS学園に夏休み明けに1年3組に転入した内の1人。京言葉で話す。

零斗とは従兄妹であったが故に面識がある。近接武装大好き人間である。

近接武器のみしか使わないと言う珍しい一面もある。その為、一夏とは意気投合している。

なお、一夏には剣での有効なダメージの与え方を教える。

束との面識が（一度だけだが）あり、（そこそこに）束が懐いている人物の1人。

その為、束はシオンが近接武装好きと知り仕様書を捏造した。

IS適正：A

専用IS：連雀

皆さんの好きな黒髪キャラで脳内補完をお願いします。

IS「連雀れんせう」について

近接武装オンリーのみ。第3世代型。

なぜ第4世代ではないのか、と言うと、そこそこに懐いているからの点があるからかもしれないが、真意は不明。

たとえ遠距離武装があるとしても、槍を投げるのみと、白式よりもピーキーな機体である。

なお、実弾兵装よりもビーム系、エネルギー系への対処が得意なI Sである。

武装

????・梟ふくろう

Please wait...

ハルバード・燕めはし

斧である。近距離の中でも少し離れている場合などに用いる。遠心力により回転しながら振り回すことも。

????・四十雀しじゅうしゅう

Please wait...

シヨートル・夜鷹よたか

本人は鎌が良かったようだが、こればかりは束さんの趣味によって決定。

不満がつている割には使用率が高い。

槍・隼 はやぶさ

せんなりひょうたん
千成瓢箪のような状態の槍。周囲からは、その形から、千成槍と呼ばれる。

基本的には、中央の槍を分離して使用するが、周囲の槍を切り離し投げることもできる。

メイス・鷲 わし

宇宙がまだ隠し持った 秩序の無い理論…で作り出されるわけではないメイス。

ハンマーではないのだが、本人はハンマー並みの威力は出せる、と豪語。

第3世代兵器

特殊反射壁；鏡の雑音 ミラーノイズ

Please wait . . .

- - - - -

アマノ
Amanno・Napier
ネイピア

IS学園に夏休み明けに1年3組に転入した内の1人。無口。イギリス代表候補生。

ビット試作機3号機のテストパイロット。

IS適正：？

専用IS：？

IS「？」について

Please wait...

武装

第3世代兵器：？

ビット。これまでの2つとは違い、レーザー型の特殊並列連結方式パラレルアクセスなる物を使用。

10機あるが、そのうち4機は整備中。

？：？

Please wait...

？：？

P
l
e
a
s
e

W
a
i
t
.
.
.

?
:
/

P
l
e
a
s
e

W
a
i
t
.
.
.

Settings02 連雀（随時更新）（後書き）

と言っわけで紹介終わり。

イギリス代表候補生さんの名前は変えたんだよ。
伏字が多くても気にしないで。

…と思う今日この頃。

次回『Story 048 連雀（09月03日）』

乞うご期待

Story 048 連雀 〓09月03日〓(前書き)

こっちの小説だともものすごい久しぶり間が満載。

…ネタで手詰まりとテストが原因だけど。

あと、多少の超展開はご容赦ください。

そしてオリ展開の実装が速かった。

…多少どころじゃないがな！

S e c t i o n ・ 0 8 新し世界へ、墮ちる

その刹那、

耳を塞いでも脳内に響いてきそうな爆発音が聞こえる。

その場所は、僕たちがいるIS学園校舎。

アリーナならまだわかるが、校舎とはどういうことか。

可能性その一、テロ。

…校舎でやっつてどっつする。

可能性その二、効果音。

…こんなリアルな音は聞こえないはずだ。

最後の可能性、アクシデント。

…これが一番可能性として高い。だが、何処で、何が起きた？
要救助者は？死亡者は？

取り敢えず、無闇矢鱈に疑問を投げかけても帰ってくるはずは無く。

そして、校舎では爛々と燃え続けている、火炎があった。

原因不明爆発から、約15分、
消火活動開始から、約10分経過。

出火場所、いや、正しくは爆発箇所が判明したらしい。

IS学園第3理科室。

IS学園に、科学部は存在する。

だが、その科学部生徒は、全員無事。

しかも、爆発に巻き込まれた生徒は皆無。

無論、先生も無事である。

では、何故事件、いや時事故は起きたのか。

恐らく爆発物。

威力は強大。

…となると、C4か、また別のものか。

しかし、あれだけの大規模爆発だ。どれだけ用意しなくてはいけないかが問題だ。

恐らく、この学校の警備は万全…の筈。

だから、設置さえ難しいだろう。

理科の実験などでも、固形の爆薬は使わないだろうし。

となると、C4は無いか…

ほかに、理科室に持ち込むことなく、作り出せる爆薬があるとしたら？

いや、爆薬は、作り出せるんじゃないか？

そう見方を変えた瞬間、僕は理解した。

「ニトログリセリンだ…」

「ニトログリセリンだ…」

私は、その声を聞いた。

彼のその声は、あまりにも驚いたような声だった。

ニトログリセリン…か。

それは加熱、摩擦で爆発。

さらに、衝撃感度が高く小さな衝撃でも爆発しやすい。

恐らくは、理科室でも生成は可能だろう。

できなくとも、理科の備品と偽って原材料を搬入するのは容易い。偽るというよりは、実際に理科の授業で使うだろうから、いまの表現は少し違う。

あとは、どう混合するかだが。

その点については、搬入業者を装った奴、と考えれば成立する。他に、どう振動させるかは携帯電話のバイブレータを使用すれば簡単だろう。そうでなくても、固形の爆弾よりは威力は低いが、作成は格段に楽だ。設置に関してはどうともいえないが。

すべて、彼の一言からの推論だ。

だが、それがわかったところで何も出来はしない。

私　アマノ・ネイピア　は何も出来ないことに対する無念さで唇を噛み締めた。

原因不明爆発から、約45分、
消火活動開始から、約40分経過。

二トログリセリンの可能性は、教員方に話した。
あくまで予測なので、本当に信じてもらえたかはわからない。
下手をすれば、犯人扱いされかねない。

それより、一向に火は消えない。
もしかしたら、燃料でもあるのか？

だが、恐らくガスは爆発時に引火、他は燃え尽きていると思っけど…

何かの不安が、僕を襲う。
まだ、何かあるんじゃないかと。

不安は、疑惑へと変わり、疑惑は、確信へと変化する

この学園、性格には島と外界との交通手段は、モノレールだ。
いま、火災によりIS学園方面への列車は途絶えている。

が、ニュースによると、あと15分ほどでIS学園方面への列車が
運行再開をするらしい。

これを断たれたら、泳ぐかIS使用、又はヘリなどを使わないといけないだろう。

しかし、その交通手段の駅の方から、突然、爆発音がした。唯一の脱出への希望を、打ち砕くように。

そしてその瞬間、この島に残っている全員の情報端末に、何かが届く。
何かというより、メッセージ、メールというほうが正しいだろう。

”初めまして。この度、ニトログリセリンによる校舎破壊、C4による駅の破壊をさせて頂いた者です。
クライアント
依頼人から、IS学園の人的災害防止能力
…つまりは、警備面についての調査を依頼されましたので、この計画を実行いたしました。

ちなみに、これも依頼ですので、
現状はすべて防犯カメラとその他諸々によって監視させていただ
いています。

では、汝に幸あれ。

P・S

あなた方の無事を祈りましょうか。

依頼主
クライアントHN　・反旗を翻す者
実行者
パフォーマーHN：CODE・PAINよ

り”

Story 048 連雀 〓09月03日〓(後書き)

はい超展開ですね、わかります。

といたいところだが超展開過ぎた気も…

気にしないでください。

次回、49話「錯綜」となります。

乞うご期待！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8262r/>

雨、何時まで降り続く

2011年6月7日22時10分発行